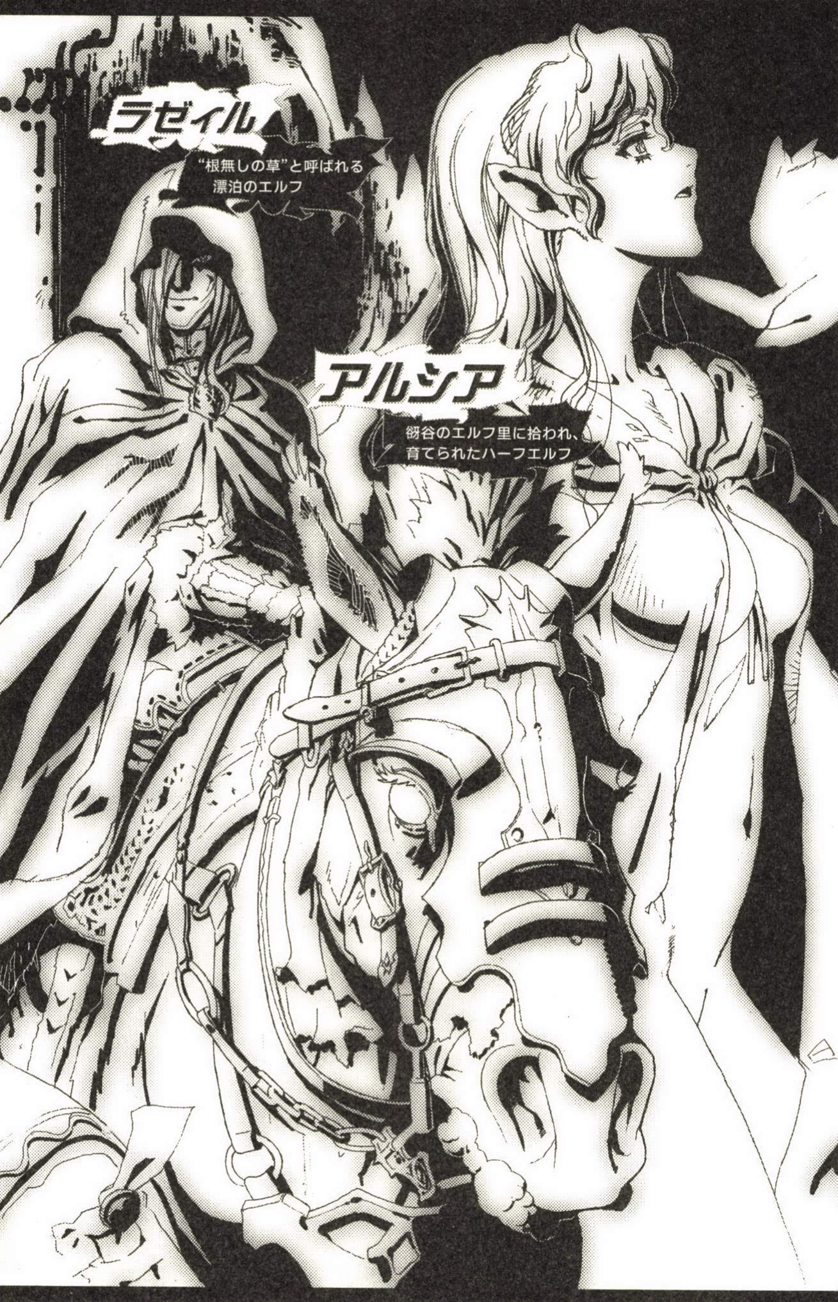
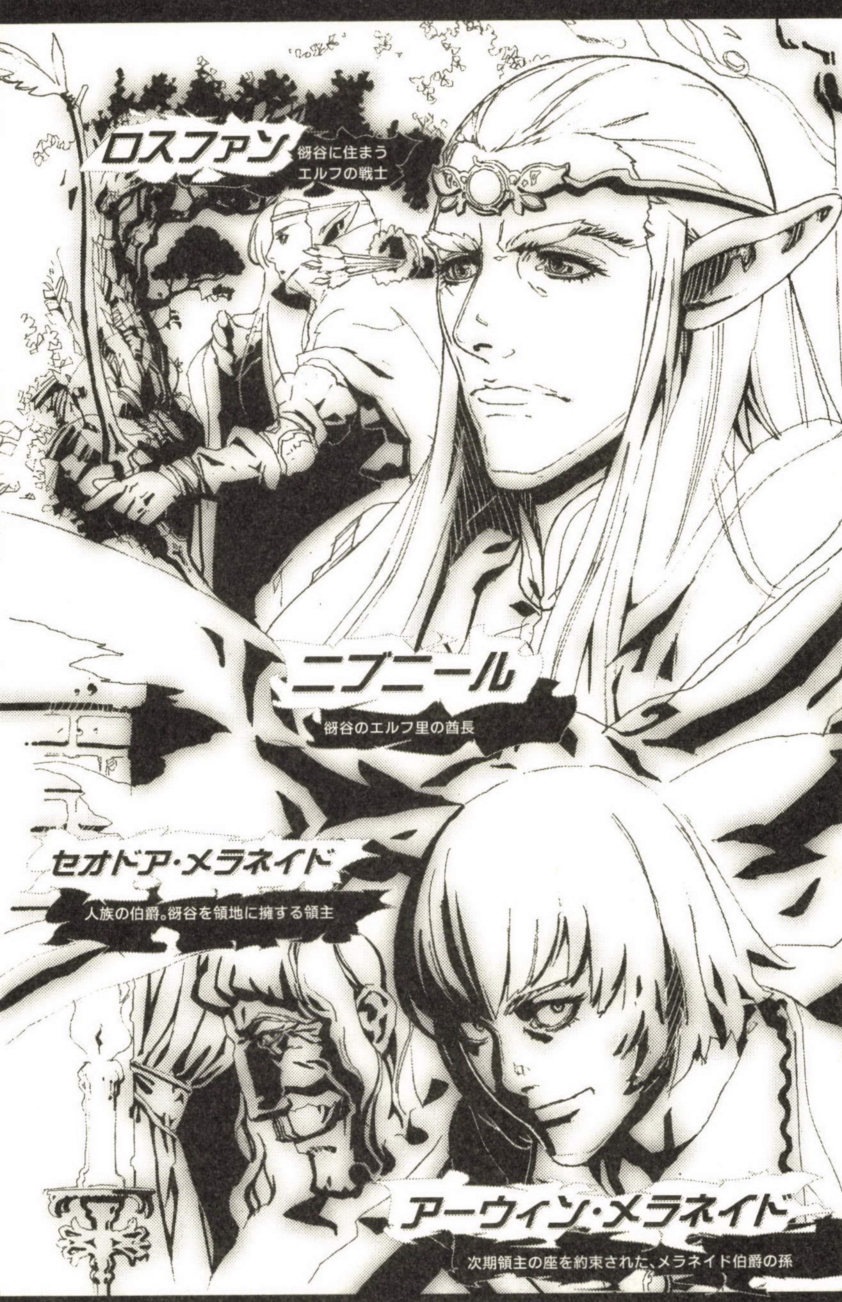
白貌の伝道師

虚淵 玄

N i t r o p l u s

目次


ラゼイル
“根無しの草”と呼ばれる
漂泊のエルフ
アルシア
谺谷のエルフ里に拾われ、
育てられたハーフエルフ


ロスファン
翎谷に住まう
エルフの戦士
ニブニール
翎谷のエルフ里の酋長
セオドア・メラネイド
人族の伯爵。翎谷を領地に擁する領主
アーウィン・メラネイド
次期領主の座を約束された、メラネイド伯爵の孫

装 画 ―――――――― kamiwata
挿 画 ―――――――― kamiwata
装 幀 ―――――――― 夜死雪

群狼の餌食

吹き渡る荒野の風を、野卑な濁声の嘲りと笑いが穢していた。

まず砂塵の中に見て取れたのは、六騎の人馬と一輌の幌馬車。

馬上の男たちは手に手に刀や槍を携え、幾人かは鎧を纏った者もいる。だが武具の手入れは明らかにずさんで、加えて野放図に伸ばした髪と髭の隙間から、垢じみた肌と黄色い乱杭歯が覗くという風体は、どう見ても真っ当な騎士の類ではない。およそ誇りや忠節とは無縁の輩、無頼の野盗山賊どもと見て間違いなかった。

野盗たちは道を進むでなく、手慣れた手綱捌きで馬を繰りながら、右に左に輪を描くようにして円陣を組んでいる。各々の表情を染めているのは、嗜虐の表情。歯を剥き出した笑みとぎらついた視線は、まさに獲物を見定めた野犬のそれだった。

はたして輪の中央には、逃げ場を失った哀れな獲物が囲われていた。

分厚いフードつきの外套に身をくるんだ旅人だった。一見すると婦人のように頼りない肩幅。上背はそれなりにありそうだが体格はきわめて細い。野盗たち同様に馬上にい

るので目線の高さこそ同じだが、鞍に座っているせいで背丈よりも体格の薄さの方がより際立って見えた。

鞍を背負う馬がまた頼りない。お世辞にも駿馬とは言えない野盗たちの馬よりも、さらに数段劣る駄馬だった。見るからに精気がなく鈍重で、何より不格好なほどに肥えている。どういう飼い方をしたのか疑いたくなるほどの寸胴だ。これでは人を背に乗せて速駆けをするなど明らかに無理な相談であろう。旅人が逃げることも叶わず野盗たちに包囲されたのは、なるほど尤もな顛末だった。

法も正義も届かない不毛の地を行く旅人が、せめて用心棒の一人も雇わぬままに道を急いだ軽率さを咎めようというのなら、それは富める者の論理である。誰もが危機に備えた助勢を用意しておけるほどの路銀を持ち合わせているわけではない。

「とんだ災難だったなァ、別嬪さんよぉ」

野盗の一人――槍を携え、鎧も馬も他の五騎より一段見勝る大男が、ひやかす野次を旅人に浴びせる。おそらくは頭目であろう。

「その細っこい身体でこの荒野を渡ろうと思ったかい？　ここいらにゃ、おっかないオ

オカミがうろついてるって話、前の宿場で聞かなかったのかい？」
旅人は答えない。絶体絶命の危機に違いないこの状況下で、身じろぎもせず鞍に座すその様は、なぜか異様なほど落ち着き払っていた。身が竦んで金縛りにあっているのか、それとも全てを観念したか、ともかく不自然なほど静かに過ぎた。
「そらよっ」
おどけた掛け声とともに、頭目が馬上から槍を繰り出す。本気ではない脅しの一撃。穂先は旅人の頭上をすんでの所で掠め、目深に被っていたそのフードだけを引っかけて捲り落とした。
やや俯き加減に伏せられていた旅人の風貌が、盗賊たちの前に晒される。
「ほぉ……エルフだったか」
流れ落ちるように長く伸ばした直毛の銀髪。細く端正な顎の線と、妖精族の証たる尖った耳――旅人はエルフの男性だった。
「何でぇ何でぇ、そのナヨナヨした腰つきで、てっきり可愛い娘ちゃんかと思ったのによォ。こいつぁアテが外れたぜ」

一人の手下がぼやいたのを受けて、頭目が鼻を鳴らした。
「ケッ、オメェまだこの上に女が御所望だってか？　ゆうべは散々――」
言いながら、頭目は後方に待機している幌馬車を顎で指す。
「――むこう一ヶ月ぶんは事足りるぐらい愉しみまくった後だろうが。あん？」
盗賊たちの幌馬車は車輪が軋まんばかりに荷を満載していた。堅気の馬車ならいざ知らず、盗賊の馬車を満たす積み荷となれば、これはもう略奪品と拐かしの成果しかありえまい。
「お頭ァ、ゆうべの役得っつったって、たった一人を八人がかりですぜ。娘の肌より野郎のケツばっか目につくような色事なんて、まるきり風情が足りませんや」
「そうよな。せめてこのエルフが女だったなら、今夜の慰みは四人の順繰りで済んだってのによ――どうでぇお前ら、男を掘るんでも構わねぇってヤロウはいねぇか？」
卑猥な冗談に、男たちが一斉に嘲笑を返す。
だが事ここに及んで、エルフの旅人は身に迫る危機をまるで意に介していないかのように、端正な眉を顰めることもなく、ただ物憂げな眼差しで盗賊たちを眺めている。

人にして野犬と変わらぬ性根で、弱いものを嬲りいたぶるのが喜びの盗賊たちからしてみれば、獲物がまるで怖じ気づく気配を見せないのは甚だ面白くない。

「おう、エルフよ。まさかお得意のあやかしで、この場を乗り切れるなんて思っちゃいまいな？」

侮りきった表情で、頭目はエルフの仏頂面をなじる。

「風でも繰るか？　樹妖（トレント）でも呼び出すか？　ハン、無理な相談だよなぁ。枯れ草一本も生えてねぇ、こんな砂地の真ん中じゃあなぁ」

もしこの場が森であったなら——盗賊たちも、ここまで余裕の構えではいられなかっただろう。いやむしろ、相手がエルフだと見て取っただけで尻尾を巻いて逃げていたかもしれない。

エルフは草木を輩（ともがら）とする妖精族。木々生い茂る中にあっては精霊の守護を受ける森の民である。森で彼らに手出しをすれば、人智を越えたあやかしの術をかけられて、どれほど手痛いしっぺ返しを喰らうか知れたものではない。

とはいえ緑の生命とは程遠いこの荒野にあっては、まったくの杞憂である。不毛の地

を行くエルフなど、外見そのままに非力で脆弱な獲物にすぎないはずだ。
だがそれでも、そのエルフは動じた素振りを見せなかった。頭目の言葉を聞き流すでもなく、さもつまらなそうに相手を一瞥して、飄然と肩を竦めながら、
「私のあやかしがどういう類のものか、見抜いているとでも言うのかな？」
硝子細工のように透き通った声で、そう平然と返事をよこしてきた。
野盗たちの笑い声が止む。
虚勢を張るのなら、まだいい。早々に観念したのだとしても、それはそれで構わない。
だが獲物であるはずの標的が、こちらをまるで脅威と見なしていないのだとすれば——
——相手は気がふれているのか、それとも本当に秘策があるのか。
もし後者である可能性が少しでもあるのなら、笑って済ませる状況ではない。無法者として生き抜くために備えていて当然の用心深さが、野盗たちの意識から遊び心を追い払った。
頭目は鋭い眼差しで、もう一度、エルフの出で立ちを隅々まで観察した。
外套が縁取る体格はあくまで細く、武器の類を身に帯びている形跡はまるでない。あ

ったとしても短剣か何かを隠し持っている程度であろう。両手の、何かの獣毛で編んだとおぼしき黒い籠手にも甲はなく、どう見ても戦支度の防具ではない。
跨っている駄馬にしても、また然り。鞍に積んであるのは毛布と食料……それ以上のものを秘め隠している気配は欠片もない。強いて言うなら、その精気のなさが薄気味悪いばかりである。さっきから周囲を囲んであれだけ威嚇しているにも拘わらず、怯えて嘶く元気さえないのか、駄馬は死んだように頭を垂れて、主（あるじ）ともども陰気な沈黙を守っている。
「俺ァ常々思ってたんだが、つくづくエルフって奴ぁ油断のならねぇ、いけねぇ好かねぇ連中だよなぁ」
頭目の声音は低く、鋼のように冷たかった。遊びを切り上げる腹になったなら、あとはただ仕事を片付けるだけだ。野盗ならではの血腥い仕事を。
殺意を剥き出しにした恫喝の声に、だがエルフは——
「ああ、まったく同感だ」
——笑った。こともあろうに、満面の笑顔で頷きながらそう答えた。

「私もエルフは好かないね。見かければ必ず殺したくなる」
「じゃあ死ねやァ‼」
怒号とともに頭目は槍を繰り出した。今度こそ手加減抜きに、一突きのもとに澄まし顔のエルフを串刺しにせんとして。

それが、怪異の皮切りだった。

槍を繰った頭目の腕が伸びきる。だが、あって当然のはずの手応えがない。
標的のエルフは避けもせず、槍の切っ先が抉る筈だった胸板は、微塵も動かぬまま元の位置にある。
代わりに消え失せていたのは、槍の穂先の方だった。
頭目の右隣、手下の一人が、馬の鞍に座ったまま、反っくり返るようにして上体だけを仰向けにしていた。その胸に深々と突き刺さっているのは、消え失せた頭目の槍……柄から切り離された槍の穂先だった。

半ば思考の停止したまま、頭目はエルフが右手に携え持っている武器を凝視した。刃渡り三フィートはあろうかという曲刀。あの先細りの刀身が、繰り出された槍を両断したのだろう。そう、弾いたのではなく斬った、切断したのだ。硬い樫の槍竿を、何の手応えすら感じさせないほど一瞬のうちに。

そして斬り飛ばされた槍の穂先が、隣にいた手下の胸板に真っ直ぐに突き刺さったのもまた、ただの偶然ではあるまい。だとすればそれは一体いかなる手練の技か。

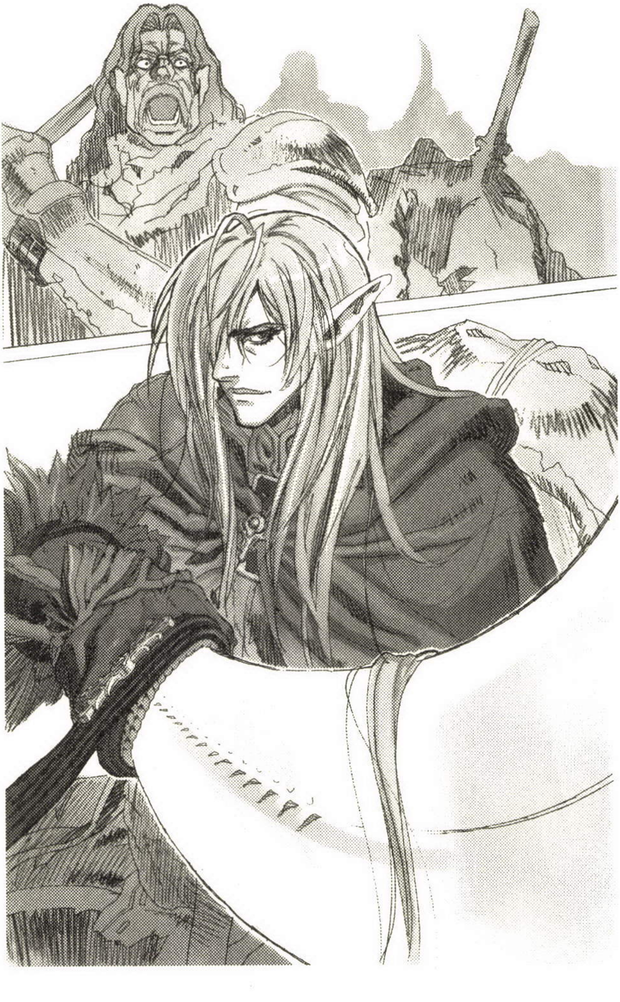
そもそも立ち返るに、あの曲刀は一体どこから降って湧いてエルフの手の中に収まったのか。

すべてが理解の埒外にあった。納得できる事柄はなにひとつ見当たらなかった。

むしろ状況を正しく見届けていなかったぶん、旅人の背後にいた野盗たちはまだ戦意を萎えさせずにいられた。

「おらぁッ‼」

旅人の右後方、一人の手下が抜き身の剣を手に、馬を駆って一気に間合いまで詰め寄る。そのまま背中を袈裟懸けに斬り下ろそうと、剣を大上段に振りかぶり――



そして鉈が現れた。
鉈。寸法といい刃の厚さといい戦斧ばりの大鉈である。それは旅人が手にした曲刀のように忽然と出現するのでなく、むしろより派手に、おぞましく、常軌を逸した登場をした。
旅人の跨る駄馬の右脇腹から、いきなり皮と肉を突き破って飛び出したのである。
斬りかかろうとした野盗は、おそらく事情を理解する暇もなかっただろう。次の瞬間には胴を真っ二つに断ち斬られていた。驚愕と戦慄は、生きてそれを見届けた者たちだけが分かち合った。
鉈の刃に続いて、その柄を握る節くれ立った拳と、筋骨隆々たる腕が現れた。馬の血にぬれそぼったその腕は、五指と肱を備えた、まぎれもない人型種族(ヒューマノイド)のものだった。
もぞり、と、今度は駄馬の左脇腹が内側から蠢く。次に何が出るのか察しはついても、その連想を鵜呑みにする者は一人としていなかったが——
再びビリビリと皮を破り割いて、鉈を持つ手と対になるもう一本の腕が現れる。
駄馬の脚から力が抜けた。下肢を折ってへたり込みそうになったところで、その股が

裂けて血に濡れた中身が地にこぼれ落ちる。腸……ではなかった。それは二本の脚だった。脇腹から突き出た腕同様、屈強な男の足と腿だった。

濃密な血の臭気。真紅の飛沫が居並ぶ野盗たちの顔に浴びせられる。

馬の体内から現れたのは、巌のように頑強な一人の大男だった。その足許の血の海に散乱しているのは、バラバラの四肢と首だけになった馬の残骸である。あの肥え太った駄馬には内臓がなかった。胴体の内側には、この大男が鉈を抱きかかえ、手足を縮めて丸まった姿勢で隠れ潜んでいたのだ。

悪夢としか言いようのない光景だった。野盗たちはついさっき、この駄馬がエルフを背に乗せて、ふらふら心許ない歩みで道をやってくる様を、たしかに見届けていたのだ。あのとき間違いなく馬は生きて、動いていた。腑の代わりに人間を詰め込まれた馬が、生あるもののように歩いていられる道理などあろう筈がないというのに。

怪異を見届けた野盗たちのうち、はたと一人が気付いた。さっきまで駄馬の鞍の上に跨っていたエルフはどこに行ったのか？

それは、馬の腹を割いて現れた大男に較べれば、まったくどうでもいい、些細な疑問

に思えた。ふと振り仰いだ頭上に、風巻く唸りとともに肉薄する曲刀の白刃を見出したのも——おそらくは馬が四散する直前に鞍の上から宙へと跳躍したらしく、すでに新たな犠牲者を仕留めにかかっていたエルフの存在も——その野盗にとってはまだ生やさしい、与しやすい事象のように思えた。

白痴のように呆けた表情のまま、三人目の頸が斬り飛ばされて宙を舞った。その生首が地に転がる頃には、さらに二人が絶命していた。馬の血にまみれた巨漢が大鉈をひと薙ぎしただけで、一度に頭を吹き飛ばされたのだ。

わずか数秒のうちに五人が死んでいた。エルフの旅人を取り囲んでいた野盗たちのうち、まだ命があるのは、役立たずになった槍の柄だけを手にして茫然自失の体にある頭目ひとりだけだった。

跳躍から着地したエルフが、やおら空いている左手を外套の裾に入れ、新たな得物を抜き放った。長さ四フィート余りの短槍。今度こそ頭目は、その出現の瞬間を見届けた。それは明らかに何もない外套の布地の隙間から、まるで影そのものが伸び上がって形を成したかの如く、文字通り〝出現〟していた。



左手に掴んだその短槍を、エルフは振りかぶるやいなや投擲した。轟と唸る凶刃は頭目の脇を掠め過ぎ、その後方——幌馬車の御者台から弩の狙いをつけていた最後の手下を、雷の如き勢いで刺し貫いた。

〝逃げなければ……〟

そう思う一方で、もはや何もかもが手遅れであることを、ただひとり生き残った頭目は理解していた。もはや理屈ではなく本能で、彼は運命を悟った。

この怪異と、それをもたらした人物からは、どうあっても逃れられない。

只のエルフだと思った。あやかしの手段さえ封じられていれば、苦もなく蹴散らせる相手だと——殺して奪うばかりの獲物だと思った。

だが違ったのだ。逃げるだの戦うだの、そういう次元の相手ですらない。こいつは死そのもの……呪いや死病と同じ、ひとたび憑かれればただ最期を待つばかりの、抗いようのない凶事の具現だ。

そんな相手に、触れてしまった。魅入られてしまった。

「さて、どうかね？　君が知っているエルフのあやかしとは、いささか趣が違っただろ

う？」
たったいま酸鼻な虐殺をしてのけた人物には相応しからぬ、穏やかな、むしろ優しげにさえ聞こえる美声で、エルフは頭目へと詰め寄った。その背後に、全身を馬の血と人の返り血に染めた巨漢の大鉈使いが侍る。
頭目は声さえ出なかった。ただ、ここにきて奇妙なものが目についた。
血刀を提げたエルフの右手、ついさっきまで外套の袖の下に隠れていたそこに、輝く装身具が籠手の上に重ねて填められている。
黄金の腕輪だった。精緻な彫り細工もさることながら、とみに目を惹くのは、腕輪の中央に象眼された大粒の宝石である。艶やかに磨き上げられた深緑の奥に、なお白く輝く縦一文字の線条。宝石は猫目石だった。
「つまらんな。まったくもってつまらん。こう歯応えがないのでは――」
言いながら、エルフは刀を手にしたままの右手を差し上げる。腕輪の猫目石がきらめき、白い線条が生あるもののように輝きを躍らせる。
いや、頭目はたしかに視線を感じた。ただの猫目石と思えた宝石が、まるで肉食獣の

瞳のように、最後の獲物を睨み据えたかのように……

「この程度では、我が君(きみ)への供物にしようにも、まるで物足りんではないか」

エルフは笑った。これまでの静かな笑いとは違う、おそらくはこの人物の秘めたる本性を垣間見せるような笑み。

美と平和と生命を愛でる森の民に、有り得べからざる邪悪の微笑。

・・・・・・・・・・・・

この男はエルフなどではない。

頭目がそう悟ったときには、もうすべてが遅すぎた。

覚醒

舌を噛み切って死のうと思った。
鉄の刃が命を断つのと同様に、辱めは精神を殺す。
まず真っ先に誇りや尊厳といったものが壊される。だがそんなものは、しょせん魂の表層でしかない。
止むことなくどこまでも積み重ねられ、上塗りされていく苦痛。肉体というものに与えうる刺激には限度がない。痛みに勝るさらなる痛み、さらなる苦しみ。連鎖はどこまでも無限に続く。恥辱も、屈辱も、ほんの鳥羽口でしかない。
我が身を苛む加害者たちが、同情も、一片の憐憫さえもなく、それどころか苦痛を与えることに無上の喜びを——いや、歓喜という以上に積極的な欲望を懐いていると知ったとき。泣き叫び、慈悲を請う声までもが無情の慰みとして相手の耳に届いていると知ったときに、犠牲者はついに理解するのだ。殺されるのではなく、貪られるのだと。
ただ欲望の糧にするためだけに、この身を略奪し尽くされるのだと悟ると、そこから

は生ある者として最悪の悪夢が、生きながらにして食われるという、原初の恐怖が幕を開ける。

恐怖。絶望。それが心を撃ち砕く最後の槌。

やがて陵辱の嵐が過ぎ去った後、まだ胸の鼓動が続いていることを理解したとしても、それはもう抜け殻なのだ。

ひとたびヒトでなくモノとして扱われた魂は、もう二度とヒトであった頃の自覚を取り戻せない。

他の獣の餌食にされた。ただ欲望のためだけに奪い尽くされた。その記憶は、残る生涯にあるかもしれない希望や幸福のすべてを懐疑させてしまう。

これほどの地獄がありながら、これほどの絶望がありながら、なお人生に幸などというものがあろうなど……どうして信じ得ようか。求められようか。

だから、八人の男たちに寄って集って、幾度となく繰り返して貪り尽くされた少女は、すでに心を死なせていた。

もしも誰かがそれを哀しむのなら――少女を襲った災厄に怒り、涙し、彼女の心を救

済しようと手を差し伸べる者があったなら――あるいは少女も、おのれを癒すための人生に今一度挑もうと、そんな希望を持てたかもしれない。

だが、いないのだ。

彼女は愛されていなかった。どうなろうと誰も悲しまなかった。

なぜなら彼女は裏切られたのだ。彼女に愛を語り続けていた男に。そして他ならぬ彼の計略によって、彼女はあの飢えた獣たちの巣穴に放り込まれたのだ。

ただの一夜にして全てが砕けた。偽りの幸福。偽りの愛。儚い恋の中で見出したかりそめの希望。もう何も残っていなかった。彼女は虚ろな抜け殻だった。

だから、舌を噛み切ろうとした。

柔肉を奥歯に挟み、渾身の力で噛みしめて――だが、痛かった。耐え難いほどに痛かった。最後の意志の力さえ萎えさせるほどに、その自決の手段は苦痛が過ぎた。

もう、生きていたくなんかない。これ以上は苦しみたくない。

だが、これで打ち止めにできるはずの最後の痛みを、乗り越えることができない。

もしも両手両足を縛めるロープさえなかったら、自由に身体を動かせたなら、より容

易い死に方を工夫できただろう。だが身動きさえできない彼女には、他に命を絶つ手段がなかった。

何度も何度も、少女は舌を噛みしめ、苦い血の味を口腔一杯に味わいながら、痛みと惨めさに泣いた。繰り返し顎に力を込めて、そのたびにわななく舌に阻まれて、もうどれだけそんな無為な循環を繰り返していたのか判らなくなっていた。

ああ、せめてこの命と引き換えに、呪いを、祟りを成し遂げることができるなら——

この身を苛む苦痛と絶望の、せめてほんの一欠片だけでもいい。彼女を欺き、陥れ、傷つけた者に送り届けてやれるのなら——

そのときは喜んで、最後の痛みを乗り越えて逝けように。

× × ×

瞼を開けると、光を感じた。

目に見えているものが何なのか……視覚と、思考とを結びつけられない。

さておき、まず最初に思い当たったことは、〝何かが見える〟ことの違和感だった。
さっきまで彼女は頭からすっぽりと麻袋を被せられていた筈なのだから。
それを訝るのと相次いで、手足の縛めが解けているのにも気がついた。
いったい、何があったのか？
板張りの荷台と、キャンバス布の天蓋。幌馬車の中だ。そこに仰臥している自分。身体には厚手の外套が被せられている。
絶え間ない振動が、ゆるやかに背中を揺すっていた。馬車はだく足で道を行く途中らしい。
「どうだ、動けるか？」
脇から声をかけられて、少女は同乗者の存在に気がついた。
刹那に、記憶に蘇る悪夢の一夜。思わず恐怖に身を竦ませる。
が――彼女を覗き込む顔は、おぞましい野盗たちの髭面ではなかった。
艶やかな銀髪。細く端正な美貌。
少女の覚醒を見守っていたのは、エルフ族の男性だった。

不可解だった。彼女の記憶は、野盗たちに縛り上げられて馬車に積み込まれたところで途絶えている。あの男たちの中にエルフ族などはいなかった。一味の者ではあるまい。途方に暮れたまま、少女は幌の隙間から馬車の外を覗き見た。

一面の荒野である。馬車に追随する人馬はいない。

御者台すらも無人で、轡で繋がれた一頭の馬が、手綱を繰る者もいないままに粛々と馬車を牽いている。森の妖精たるエルフには、ごく初歩の魔術として物言わぬ動物と心を通わせる術があるから、このエルフが手ずから操馬していないのはそう不思議なことではない。

むしろ目を惹いたのは馬そのものの不格好さだった。荷馬車を牽くのさえ苦しいのではないかと思えるほど、見るからに肥えすぎている。そのくせ息を切らしているかと思えばそんなこともなく、むしろ息をしているのか訝しいほど静かに、ただ機械のように淡々と蹄を運んでいる。

速駆けすらも難しそうなこの駄馬は、おそらく野盗たちの持ち物ではあるまいが、馬車そのものは間違いなく、あの憎むべき野盗たちのものだ。いったい彼らは何処に消え

たのか？

一方で、少女の覚醒を見届けた銀髪のエルフは、いったん休めていた作業の手をまた動かしはじめた。見れば何やら針仕事をしている様子である。どうやら分厚い麻の布地を継ぎ合わせて一反の大布に縫い上げようとしているらしい。

エルフは黙々と作業に没頭するばかりで、少女に状況の説明をしようという気はなさそうだった。少女は躊躇いつつも仕方なく、見知らぬ同乗者に声をかけた。

「あの、わたしは、一体……」

「お前を拐(かどわか)した野盗どもなら、死んだぞ」

しごく端的に、疑問に先回りした答えが返ってきた。ますます少女は呆気にとられて言葉に詰まる。

「死んだ……？」

「ああ、みな私が殺した」

とてつもなく剣呑な言葉を、銀髪のエルフはさも平然と口にした。言いながらも針仕事の手は何の頓着もなく、淀みなく動いている。

「……あなたは、いったい……？」

「私は――そうさな、差し当たっては、お前の新しい主、とだけ言っておこうか」

「……」

少女はまじまじと、目の前の怜悧な美貌に見入った。

つまりこのエルフは、彼女に救いの手を差し伸べたのではなく、単に新たな略奪者として、他の略奪者から少女の身柄を横取りしたということなのか？

これが他の人間や、オーク、ゴブリンといった妖鬼の仕業というのなら理解もできる。

だがエルフともなれば話は別だ。

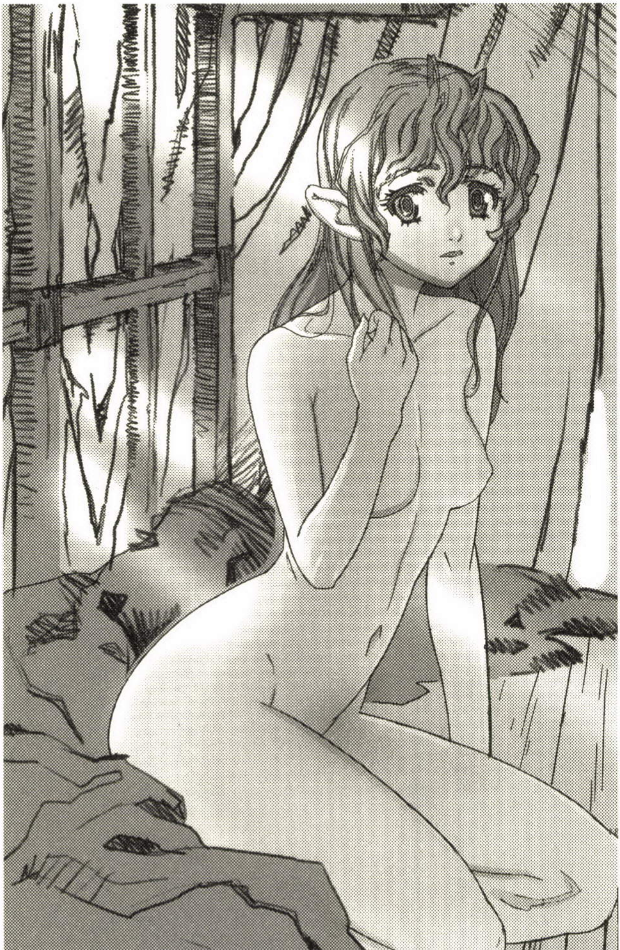
エルフ族というのは一概に、高潔な精神の持ち主である。無益な殺生はもちろんのこと、奴隷を所有して使役するというのも、エルフの信仰と道徳観からは大きく逸脱した行為だ。

「貴方は……本当に、エルフなのですか？」

「そういうお前は、どうなのだ？」

少女の問いに気を悪くした風もなく、そっけない口調で銀髪のエルフは問い返してき

た。
「その身体、どこまでがエルフで、どこまでが人間だ？」
「……」
無遠慮に問われて、少女はしばし口ごもり、俯く。
少女の耳は木の葉のように尖っていた。なるほどエルフ族ならではの特質である。体格も人族の少女に較べれば、手足とも細長く華奢で、胸と腰の肉も薄く慎ましい。
だがエルフにしてはつぶらすぎる瞳。エルフにしては柔らかすぎる頬の線。そして何より決定的なのは、エルフ族には有り得ない髪と目の色――烏の羽のような黒の癖毛と、漆黒の瞳。
少女は人間族との混血児。ハーフエルフだった。
「同じ妖精の眷属にも、まぁ、色々なはみ出し者がいるということだ」
少女の沈黙の隙間を埋めるかのように、銀髪のエルフは嘯いた。
「エルフの顔をした者が、必ずしもエルフらしく振る舞うとは限らない。安易に判断してはいけないな」



少女は、あらためて相手の風体を観察した。
埃じみたブーツと、ほつれの目立つ胴着。かなりの長旅を経てきたのだろう。乾いた砂塵、煤汚れ。エルフが森でエルフらしく暮らしていく上では無縁なものばかりである。
唯一、籠手を填めた右の手首に、さらに重ねて填められた大きな腕輪だけは、黄金と宝玉を豪奢にあしらった見事な逸品だったが、その意匠もまたエルフ族のものとは違う見慣れないものだ。
「あなたは……〝根無し〟？」
「まぁ、そんなところだ」
根無し――
森に根を下ろした木々とともに生き、外界と隔絶されたまま生涯を過ごすエルフ族の中にあって、定住する森を持たず、異種族のひしめく世界を漂泊する生き様を選ぶ者たちが、ごく希にいる。
そういったアウトサイダーを、森に住まう同族たちは、憐憫と、ささやかな侮蔑を込めてこう呼ぶのだった。――〝根無しの草〟と。

なるほど根無しのエルフであれば、その価値観が少なからず異種族の影響を受け、ときには保守的なエルフとは大きく隔たった精神性を備えるようになることもある。だがそれでも、本質的にエルフとは〝善〟なる種族だ。殺戮や征服といった行為は、本能的に忌避するはずなのだが……

「わたしを……どうするおつもりですか？」

「もちろん、愛でる」

返事は短く端的だった。だがそう言いながらも、主を名乗るそのエルフは、手元の針仕事に没頭したまま少女を一顧だにしない。昨夜の野盗たちのように、獣欲の赴くままに彼女を蹂躙するのかといえば、そんな素振りはまったくない。

「愛でる、と言っても……何故わたしを……わたしなんかを……」

少女は、奴隷として価値を持つような技芸はなにひとつ持ち合わせていなかった。唄や踊りが得意なわけでもないし、従僕としての作法を教え込まれているわけでもない。

加えて、すでに生娘ですらない。

こんな自分を侍らせて、何の慰めを得ようというのか。

「お前は、美しい。だから拾って私のものにした」
「そんな……」
とりわけ容姿については、少女は賛辞の言葉などとても鵜呑みにする気にはなれなかった。
人族の娘のような愛嬌もなく、エルフ族の娘のような気品もない。人間にしてはエルフに似すぎ、エルフにしては人間に似すぎて、どちらからも蔑まれ疎まれる、穢れた出生の混血児。
そんな自分が美しかろうはずがない。
縫い物が一段落したのか、銀髪のエルフは手を止めて、今度は正面からまじまじと少女の顔に見入った。頭髪と同じ色の、透けるような銀の瞳。少女は受け止めきれずに面を伏せる。
「娘よ、お前は美しい」
エルフは、重ねてそう言ってから、少女の顎に手を添えて仰向かせ、じっくりと覗き込んだ。

「その目は流すだけの涙を流し尽くし、希望の輝きを根こそぎ奪われ、ただ虚無と絶望だけを見つめていたのだろう？　その声は掠れて涸れ果てるまで悲鳴と嘆願をひりだしたのだろう？」

逃げ場のないその視線を正視して――少女は、相手の銀の瞳の奥に、まるで灰の中で赤熱する炭のような、昏くも熱い情熱の色を見て取った。

「苦悶と恐怖がお前の在りようを変えた。そういった負の感情の激流が、お前を洗浄し、亜麻布のように磨き上げた。尊厳だの、信念だのといった穢らわしい諸々をすべて拭い去ってくれたのだ。だから少女よ、今お前は確かに美しい。限りなく純粋で愛おしい。我が寵愛に値する」

相手の言っていることが、少女にはほとんど理解できなかった。――いや正しくは、どう頑張っても理解できない隔絶だけを本能で察した。根無し草という生き様だけでも想像のつかない彼女にとって、この銀髪のエルフの価値観と美意識は、空の星ほどにも遠い所にあるのだろう。

「娘よ、名は？」

問われて、少女は、抗おうという意識さえ持たずに返答した。

「アルシア、と……申します」

黒髪のアルシア。かつて暮らしていたエルフ里ではそう呼ばれていた。姓は名乗れなかった。彼女の親であることを公言する者がいなかったからだ。

「アルシア、か。いいだろう。まずはこれを」

銀髪のエルフは、アルシアの顎から手を放すと、傍らに置いてあった大布の塊……さっきまでの針仕事の成果を抛ってよこした。

「これは――」

薄手の粗末な毛布を継ぎ合わせて仕立てた、それはフード付きのローブだった。

「まさか裸のままでいるわけにもいくまい。それとも、私の外套を奪う気だったか?」

「……」

そうは言われても、実のところアルシアは、被せられていた外套の下の裸身を意識もしなければ、今更それを恥じて包み隠すようなものとさえも思っていなかった。羞恥だの、尊厳だの、そういった乙女の自意識は、ただ一夜の蹂躙で根こそぎ踏みにじられて

いたのだから。

着衣という、人として当然の権利。それをまた再び与えてくれた人がいた。

そのとき初めて、アルシアはいかに自分が虚ろな人形に成り果てていたかを理解した。

今ようやく、少女は溢れ出る涙の熱さを思い出した。

「ほう……泣くか。まだ流す涙を残していたか」

嗚咽する少女を、銀の瞳のエルフは、さも珍しいものを見出したかのように感慨深げに観察していた。

「わたしは……わたしは……」

「アルシア、望むところがあるなら何なりと言ってみろ。事と次第によっては、叶えてやらんでもない」

感極まっていたアルシアは、ただかぶりを振って否定することしかできなかった。

「わたしには……これ以上の望みなど……もう……」

「ない筈があるまい」

声に詰まるアルシアの有様には頓着せず、銀髪のエルフは短くそう断じた。

「お前は今もまだ自分のために泣くことができる。おのれの自我を手放さず、魂の形を壊れさせることもなく。——なかなかどうして、希有なことだ。あれだけの仕打ちを受けた後となっては、な」

言われて、少女は一夜の記憶を——怖気をふるう体験のすべてを思い出した。

ごわついた髭の感触。脂ぎった強引な指。粘ついた臭い吐息……

堰を切ったように記憶は押し寄せた。悔しさと、嫌悪感と、それに勝る恐怖の奔流。

「何を願った？　何を祈った？」

銀の双眸が、深く探るようにアルシアの瞳を覗き込む。

「お前は執念を支えにして、絶望に屈服せず自己を保った。アルシアよ。思い出せ。お前が最後まで縋った望みを」

「望み……」

自分は死者も同然だと思っていた。もう何の希望もないと。

なのにいま少女の前には、彼女の言葉に耳を傾けようとして待ち受けている人物がいる。

裏切られ、信じるすべてを失った少女にとって、この見知らぬエルフの態度は、どんな慈愛にも勝る真摯なものに思えた。

今度こそ、口にできるのだ。聞いてくれる人がいるのだ。

絶望の底で望んだもの。

混濁する意識の中で、最後まで胸に懐いていた願い——

憶えていた。忘れられるはずもなかった。

「……報いを……」

嗚咽の隙間から、アルシアは絞り出すような声を漏らした。

「どうか、わたしを謀った者に、わたしを踏みにじった者に復讐を！

この恨みを晴らしていただけるなら、わたし——喜んであなたの僕(しもべ)になります。永遠に忠誠を誓います！」

「なるほど。意趣返し、か……」

泣訴するアルシアの悲痛な声とは裏腹に、それを聞き届けたエルフの呟きは、妙に嬉々として弾んでいた。まるで新しい玩具を手に入れようとしている子供のように。

「まぁ、あの野盗どもについては、あらかた済んだと言えような。……だが察するに、事はそれだけではない様子だが？」
「はい。わたしがあの野盗たちの手に落ちるまでの顛末が……捕まった後のことよりむしろ、そうなるに至る顛末の方が、わたしには許せません……」
「良かろう。子細を話してみよ」
「はい。……あの、その前に――」
「ん？」
馬車の柵に背中をくつろげ、早くも長話に備える体勢でいる銀髪のエルフに、アルシアはおずおずと問うた。
「名前を、お聞かせ願えませんか？」
「ああ、そうだったな」
さては名を伏せる事情があるのかと、アルシアは気後れしていたのだが、銀髪のエルフさして気にした風もなく、朗らかに笑って回答した。
「私はラゼィル。姓の方は、まぁ――いずれ知れよう」

「ラゼィル様……」

ついに明かされた、およそエルフらしからぬ謎のエルフの名。その響きを口の中で反芻してから、アルシアは己の身の上を語りはじめた。

人と森と妖精と

古くからメラネイド伯爵家が国王より拝領する領地の片隅に、谺谷と呼ばれる深い森林がある。そこは王国よりもさらに古い時代から、エルフの住まう森として知られてきた。

渓谷に至る山岳の隘路は、馬を駆るには険しすぎ、通り抜けるには徒（かち）によるほかない。狩人たちにしてみれば、そんな便の悪い深山に踏み込まなくても他に実りの多い狩場はいくらでもあったし、そもそもメラネイド伯爵領は農耕や牧畜に適した肥沃な平野を充分に擁していた。あえてエルフたちの森に踏み込んだところで何の益があるはずもなく、必定、人族とエルフ族は互いの縄張りを踏み荒らすことなく、無関心と不干渉をもって永らく穏便な関係を保ってきた。

それを思えば、ある日、一人の野伏（レンジャー）が、谺谷の底の渓流から砂金が採れることを発見したのは、きわめて不幸な出来事だったのかもしれない。

黄金の輝きを求めるとなれば千里の道をも踏み越えるのが、いずこも変わらぬ人族の

性(さが)である。メラネイド伯爵はすぐさま谺谷の価値を見直した。広く領内に触れを発し、山道の整備と精錬所を建てるための人夫を募って、さっそく砂金の採集に乗り出した。ところが、ひと月のうちに完成するはずの精錬設備が、三月四月(みつきよつき)を経た後も一向に操業の目処が立たない。

谷間の山道は、いくら拡張しようにも途端に落石や地滑りで塞がれ、いつまでも資材が運搬できない。また精錬所の用地を確保するために森の伐採を始めた者たちは、それ以上の災難に見舞われた。虫が運ぶ熱病。飲料水に投げ込まれる毒草。木を伐ろうとした途端、たちどころに錆びる斧や鋤。夜ともなれば熊や狼が現れて野営地を騒がせ、補給もままならない食料を食い荒らしていった。

作業中には奇妙な幻覚が、眠りの中では恐ろしい悪夢が、昼夜を問わず人夫たちの神経を苛んだ。たまりかねて遁走する者は後を絶たず、残った人夫も疲弊しきって、とても仕事が手につかない。

すべて森のエルフたちの仕業なのは誰の目にも明らかだった。

なるほどエルフたちには、砂金欲しさに森の静寂を乱そうとする人間たちの欲望など、

見過ごせるわけがない。彼らは森にあっては草木や獣と意を通じ、数限りないあやかしを駆使できる。人智を越えた怪異の数々は、彼らエルフの魔術としか考えられなかった。

　とはいえ、谺谷の不可侵は、遠く先祖の時代から暗黙の了解であったとはいえ、それについて確かな盟約が交わされたことは一度もない。伯爵からしてみれば、仮にも彼の領地である谺谷で何をしようと咎め立てされる謂われはどこにもなく、公然と刃向かう者があるなら、それは歴とした謀反であり、領主の権限のもとに処罰するべき反逆であった。

　いっそ軍勢を差し向けて森ごと焼き払ってはどうかと進言する家臣もいたが、そこまでするには義の立つ理（ことわり）がいる。その点、エルフたちのやり口は実に巧妙狡猾だった。砂金採りの妨害工作にはなにひとつ証拠を残さず、問い質されようとも知らぬ存ぜぬを通し、それどころか森で遭難しかかった人夫たちを助け出して親切面をする始末である。

　エルフたちは妨害工作を否定しつつ、言葉の裏では冷然と、交渉の余地も否定していた。伯爵の側でどう足掻こうと、エルフの隠れ里というのは結界で護られており、人間の力だけでは辿り着くのはおろか位置を知ることさえ叶わない。どだい森の中で人間が

エルフと競い合おうとするのが、そもそも無理な相談なのだった。
こうして、両種族の感情は無害な没交渉から剣呑な反目へと移り変わっていったものの、依然エルフたちは森に引きこもり、人間たちは渓流の砂金を物欲しげな眼差しで遠目に眺めつつ、双方の関係は傍目には以前と変わらぬ均衡を保っていた。

× × ×

領主とエルフ族との軋轢は、当然、人々の噂にのぼり、あまねく領民たちの知るところであった。
それ故に、ある日、駿馬を駆って風のように現れた三騎のエルフが、メラネイド伯爵の居城の門前に立ったとき、城下の町民たちは訝り怪しみつつも、ただ困惑の囁きを交わしつつ見守っていた。
三人のエルフが酋長ニブニールの使者を名乗り、伯爵への目通りを願い出ると、彼らはただちに城内へと通された。

「さて、ただ藪から棒に〝返せ〟と言われても、な……」
執務室に通すや否や、エルフの使者たちが礼辞もそこそこに切り出した要求を聞いて、領主セオドア・メラネイド伯爵はさも困惑した風に眉を顰めた。
伯爵は当年とって六〇歳。その体躯は若かりし頃を偲ばせる堅牢さを保ち、髪と髭は灰のように白くなりながらも精力的に波打っている。鋼色の双眸には射るような光を湛え、なるほど領主の器に相応しい貫禄ある人物であった。
しかし相対するエルフたちは樹木の如き長寿を備え、永遠の若さを保つ種族である。たかが定命の人族の威厳に恐れ入るはずもない。
「御身らは事の重大さを知らず、ただ戯れのつもりで我らを嘲弄しているものと信じたい」
細いながらも鐘のように通る声で語りながら、使者たちのうち中央の一人が、凝と伯爵の目を見据える。
「だが、我らの里から〝樫の護り〟が持ち去られたことは、人族とエルフ族の双方にと

って深刻な意味を持つ。そして我らが秘宝たる護符は、メラネイド伯爵――御身の眷属の手に渡ったものと信ずるに足る理由がある」

「ではその理由とやらを説明してもらおうか」

執務机を前に座した伯爵の傍らから、エルフたちを冷然と見渡していた青年が、高圧的な口調でそう質した。

アーウィン・メラネイド。伯爵の初孫であり、早くに亡くした父に代わっていずれは領主の座と爵位を嗣ぐ身の人物だった。若輩ながらも祖父の補佐役として近頃めきめきと頭角を顕しつつあり、祖父譲りの鋼色の目は聡明さと鉄の意思を兼ね備えて、早くも若さに似合わぬ威厳を窺わせる。

そのアーウィンが言葉を発するや、だがエルフの使者は眼差しにありありと侮蔑の色を滲ませて、伯爵からアーウィンへと視線を転じた。

「ならば申し上げよう。我らの里より宝を持ち出した者は、アーウィン殿、貴殿と関わりの深い者なのだ」

「はて？」

訝るように目を細めるアーウィン。

「君らエルフの隠れ里は妖精しか辿り着けない幽境の地であろう？　そんな場所に私の知人が案内されたなどという話は、ついぞ聞いたことがないが……」

「左様。我らが里に人族の客人を招き入れた例は、ここ百年のあいだ一度もない」

「ならば君らの宝を持ち出したのは、私ではなく君らの同胞だろうに」

「同族⁉　あの〝親無し〟を同族と⁉」

それまで無表情を装っていたエルフの使者が、やおら語気を荒げて忌々しげに吐き捨てた。

「左様……ほんのひとときとはいえ哀れに思い、同胞として遇したのが仇となった。あの小娘の半身には、さぞ薄汚い盗人の血が流れておるのだろうな」

「どうも口振りから察するに、よほど気にくわない隣人がいた様子だが――」

腹立ちを露わにしたエルフを、アーウィンが剽げた口調で揶揄する。

「君らの宝を持ち出したという、その穢れた血を継ぐ娘とやらが、なぜ私に関わりのある者なのだ？」

それを聞いたエルフが、今度こそ怒りに眉を吊り上げる。

「貴殿はあの半エルフと将来を誓い合った仲であろう！　我らが知らなかったとでもお思いか？」

まるで悪い冗談でも聞かされたかのような面持ちで、メラネイド伯爵が物問いたげに孫の横顔を一瞥する。

「そのような物言い、事と次第によっては侮辱と受け取って斬り捨てるところだ。エルフ殿」

アーウィンは慌てず騒がず、冷めきった平坦な声で返答した。

「何故この私が、メラネイド伯爵家の嫡子たるこのアーウィンが、栄えある我が血統に、生まれも定かでない半妖精なんぞを迎え入れねばならんのだ？　屈辱も甚だしい」

「アルシア自身が告白したのだ。いずれ領主の孫に嫁ぐと」

そう食い下がるエルフに対して、アーウィンの視線が凄みを帯びる。

「ならばそのアルシアとやらを斬るしかあるまいな。かような侮辱を受けたとあっては」

睨み合う両者の間に、さも辟易した風なメラネイド伯爵が割って入る。

「双方とも熱くなるでない。……なぁ森人よ。その半妖精だの護符だのは知らぬ話だが、貴殿らの難事にまつわる事柄には、心当たりがないこともない」

「と、言うと？」

強張った表情のまま、エルフは視線をアーウィンから伯爵へと戻す。

「貴殿らの住まう谺谷から三里ほど南に下った辺りに、先時代の入植者たちの廃墟がある。丁度その辺りは当家の猟場でな。昨夜も我が家臣の弓師が夜狩りに出ていたのだが――

其奴の話によると、野盗の一団とおぼしき連中が、黒髪の少女を拐(かどわか)す現場を見た、と申しておった」

「……」

深意を窺えない複雑な表情で、エルフの使者たちが顔を見合わす。

「真夜中に、そんな人里離れた廃墟をうろつく娘子などおるまいし、どうせ幽鬼か何かの悪戯であろうと思って捨て置いたが……エルフの血を引く半妖精であれば、なるほど夜の森を漫(そぞ)ろ歩いていたとしても不思議はない。さてはその黒髪の少女、貴殿らの捜す相

手ではあるまいか?」
二、三言、人間には理解できないエルフ語の囁きが、三人の使者たちの間で交わされる。そこに重ねて伯爵が問うた。
「そのアルシアという娘の髪は?」
「——黒い。あれが本物のエルフでない証だ」
「では、決まりだな」
息を吐いてくつろぎながら、伯爵が執務机に頬杖をつく。
「おそらくは貴殿らの求める護符とやらも、その野盗どもに持ち去られたのであろう。これで我々を疑う理由はなくなったかね?」
「領主殿、御身は領内に人攫いを遊ばせておいでか?」
冷然と皮肉を返すエルフに対し、伯爵は肩を竦める。
「領民に被害が出たとあっては、無論、兵を挙げて討伐もしよう。だが、どうなのだ? 谺谷のエルフたちよ。儂は貴殿らの一門を〝領民〟と見なして良いものかどうか」
「……」

エルフたちは言葉に詰まり、ただ視線だけで憤怒を伯爵に向ける。
森のエルフが領主として伯爵を崇め、服従するのでない限り、伯爵もまたエルフたちになにひとつ責任を負うつもりはないと、そう言外にほのめかす言葉であった。
「谺谷の大榕樹は人族の王国の歴史より古く、我らエルフは谺谷の始まりと共にかの地に在った」
決然と顎を上げて、エルフの使者は言い放った。
「森と森に住まう生命は、誰に支配されることもない」
「ならば、儂に出来ることは何もあるまいて」
伯爵は冷ややかに、さも退屈な余興に付き合わされたとでも言わんばかりに結論づけた。
「あとはその野盗たちを追ってみることだな。もし望むなら、件の弓師と引き合わせてやっても良いが？」
「無用だ。その遺跡であれば我らも知っている。野盗たちの痕跡はこの目で見定めよう」
森に生きるエルフたちは生粋の野伏である。鋭敏な知覚と沈着な思考を駆使しての追

跡術は、猟犬の鼻や猛禽の瞳さえ凌駕する。
「当家の猟場に踏み入って良いなどとは、まだ一言も言っておらんがな。――まぁ、良い。特例として許可しよう」
「我らはエルフの弓に賭けて、その野盗とやらを捜し出し、捕らえるだろう」
その場を辞する挨拶さえもないままに、エルフたちは踵を返しながら嘯いて、肩越しにアーウィンを見遣る。
「その外道の輩どもからアルシアを取り戻した暁には……アーウィン殿、あらためて件（くだん）の半エルフとご対面願おうか」
アーウィンは鼻を鳴らして冷笑した。
「断る理由はない。無論、その娘が生きていればの話だが」
険悪な空気だけを残してエルフたちが去っていった後、孫と二人きりになった執務室で、メラネイド伯爵は深い溜息をついた。
「やれやれ、肝の冷える対決だったな」

「そう仰有いますな。木々の合間ならいざ知らず、石の床に立ったエルフなぞ、何を恐れることがありましょう」

祖父をいたわる孫の表情で、アーウィンが微笑みかける。

「連中はあの野盗どもに追いつくかな？」

「さて、どうだか。いずれにせよアルシアは奴隷商にでも売られているか、さもなければ嬲り殺された後でしょうよ」

「万が一、エルフどもが生きたままあの小娘を取り押さえて、洗いざらい白状させたら──」

「そうなる前に、万事を終わらせてしまえば良いのです」

満面の笑みでアーウィンは答えた。どこか陰惨なものを孕んだその笑顔に、伯爵は頼もしげに見入る。

「その胆力と冷酷さ──我が孫ながら末恐ろしい男よのう」

「恐れ入ります」

頭を下げるアーウィンに微笑で頷いてから、伯爵は窓の外──遠く谺谷の方角に当た

る北の空を眺める。

「〝樫の護り〟か。……あれほどまでに連中が血眼になる代物なのか？」

「それはもう。エルフたちが森で操る妖術、幻術を、すべて無効にする護符ですからね。難攻不落の砦たるエルフの森を、丸裸同然にしてしまう秘宝——連中にとっては門外不出の品でしょうな」

「で、その宝は、今どこに？」

「常に私が、肌身離さず」

得意満面の笑みで、アーウィンは懐から掌大のペンダントを取り出した。

樫の木の苗木で編まれた円形の網の中央に、大粒の紫水晶が絡め取られた形のそれは、まぎれもなくエルフの手になる精緻な工芸品だった。紫水晶はカットも研磨もされていない原石のままのように見えながら、まるでそれ自身が内側から輝いているかのように、透き通った光を湛えている。

「見事じゃ！　まったくもって恐れ入った！」

伯爵は手を打ち鳴らして呵々と大笑した。

「まさかそんなものを懐に呑んだまま、素知らぬ顔で連中をあしらってのけたとは。まったく、我がメラネイド家は大した傑物に恵まれたものよのう！」
「お褒めにあずかり、恐縮です」
紫水晶の清浄な輝きとは裏腹に、それに照らされたアーウィンの笑みは邪なものに満ちていた。



根無し草の義心

心ある人の目で見れば、エルフの住まう森は、すぐにそれと知れる。

鳥や獣は互いに喰らい合っても、滅びるまで喰らい尽くすことはなく、草花は丈を競って咲き誇っても、いずれかのただ一色に埋め尽くされることはない。闘ぎ合う野生の生命が、闘ぎ合うままの均衡を保つ。そう導くよう細心の注意で調整し、律しているのが、他ならぬエルフたちである。

茂りすぎた木の枝は落とされ、増えすぎた獣は狩られ、その場所を他の生命に譲る。そうやってすべての生命は、生と死を巡る流転の中で循環し相克する。そんな遠大な調和の輪こそがエルフたちの理想であり、その均衡を保つ使命を果たすべく、彼らは他の生物とは桁の違う長い寿命を与えられているのだという。

いわばエルフたちは大地の庭師であり、彼らが甲斐甲斐しく世話をする天然の庭園には、ただの荒れ野や密林とは違う美しい秩序がある。木の茂る間隔や梢の密度、視野の片隅をよぎる鳥獣の頻度や種類、すべてが天上の黄金律とも言うべき理想的な均衡を保

っているのだ。

それゆえに闖入者は、さながら唱和の中に割り込んだ雑音の如く、否が応にも浮き立ってしまう。

下生えを踏み分けて進むラゼィルの足音が、ただの足音以上に騒々しく聞こえるのも、彼がこの森に住まうエルフたちの望むところにない異分子だからであろう。

その後ろに続くアルシアは、いかに〝根無し〟という生き様がエルフの本性を損なうものなのか、あらためて思い知らされた。

仮にもエルフであれば、たとえ見知らぬ森を訪れることがあろうとも、自然とその森ならではの生命のリズムを聴き取り、その調和を乱すことなく溶け込んで同調することができるものだ。だがラゼィルの無遠慮な歩の運びはむしろ、森の何たるかを解していない人族のそれに近い。永い漂泊のうちに彼は、森と共に生きるエルフの本能さえ失ってしまったのだろうか。

とはいえアルシアも、もうこの谺谷の森を我が家のように闊歩できる身の上ではなかった。本当ならラゼィルの先に立って見知った道を案内するべき立場にありながら、お

ずおずと身を縮め、彼の背中に隠れるようにして付き従っているのも、彼女が自らの過ちの重大さを理解しているが故である。
「生きて故郷の土を踏むなど、望むべくもなかったであろうに……あながち嬉しくもなさそうだな」
背後のアルシアに向けて、ラゼィルが揶揄するように言葉を投げる。
「……」
アルシアは押し黙った。すでにラゼィルに打ち明けた話だけでも、彼女の胸中を推し量るのには充分であろうに、それにしては底意地の悪い質問だった。
もはや里のエルフたちは、アルシアを仲間とは見なしていないだろう。彼女もまたこの森においては、すでに招かれざる客なのだ。
「そもそも、どうしてその〝樫の護り〟とかいう護符を、里の外にまで持ち出そうなどと思った？」
「……アーウィンは私に人族の街を案内してくれました。そうすることで人間の世界を理解してもらいたい——彼はそう言いました」

アーウィン。少女が恋を捧げた人族の青年。その名を口にするだけで、アルシアの胸中を寒風が吹き抜ける。
「そんな彼が、私に言ったんです。次は自分がエルフの里を見てみたい、と」
エルフに人族を理解させ、そしてまた自らもエルフを理解したいと、そう望んでいる人間がいる……それはアルシアの心に一条の光明を与える存在だった。
両種族が互いに理解し合い、歩み寄る道がないものかと模索できるなら、そのとき初めて、卑しき出自の自分にも、この世に生まれ落ちただけの価値があるかもしれない。青年の語る理想は、少女に夢と希望を与えた。寄る辺なき孤独な少女にとって、その夢はあまりにも眩く輝いていた。――心の眼さえ眩まされるほどに。
「けれど、里の皆の承諾を得ることはできませんでした。隠れ里に人族を――それも領主の孫を招き入れるなど言語道断だと。むしろ彼と恋に落ちた私の方が裏切り者として誹(そし)られました。
だから、それでも彼に里の中を見せようとするなら、誰にも内緒で、こっそり気付かれないように案内するしかないと……」

だから――黙って持ち出した。エルフたちの秘宝たる〝樫の護り〟を。
その護符は、防人のエルフに見咎められることも、警鐘の呪術に察知されることもなく、人間を密かに隠れ里の中まで招き入れることを可能にする唯一の手段だった。
理想を懐いていたアルシアは、それをエルフ族への裏切りとは思わなかった。長い目で見れば彼女の行為はきっと尊いものだと、両種族の和睦の手始めになるのだと信じていた。歩み寄るための最初の一歩は、人族を憎み蔑むことしか知らないエルフ族の中から見出せるものではない。まずアーウィンを通じて人間にエルフを理解してもらえるならば、いつの日かエルフにもまた、人間を理解してもらう機が訪れるかもしれない。
だが……
「何を思ってやったことにせよ、結果だけ見れば、お前の行いは正真正銘の裏切りでしかないからな。成る程、今となっては里のエルフたちに会わせる顔もないか」
冷酷な事実を、ただ淡々と口にするラゼィル。少女の心情をまるで慮ることもない、そんな無神経さも根無し草であるが故の精神構造かもしれない。
かねてからアーウィンとの逢い引きの場所として決まっていた、南にある旧世界の遺

跡で、アルシアは恋人に〝樫の護り〟を手渡した。そこへ、まるで見計らったかのようなタイミングで現れた野盗の群れ。

アーウィンも、野盗の頭目も、委細承知といった様子で笑みを交えて話していた。そして領主の孫から無法者の手へと渡される金貨の枚数を見たとき、アルシアは理解してしまったのだ。それは謀（はかりごと）に手を貸した賃金なのだと。

薄汚れ、節くれ立った無数の指の感触を思い出す。アルシアの身体を寸刻みに探したとしても、あのとき穢されずに済んだ場所はない。男たちが触らなかった場所はない。だが身体に受けた仕打ちよりも、より決定的に少女の心を引き裂いたのは——それらのすべてを冷然と見届けていたアーウィンの視線だった。

野盗たちが嬌声を上げてアルシアに群がり、貪るさまを、彼は最後まで輪の外から見下ろしていた。その口元に貼りついた薄笑いを見咎めたとき、少女の中で何かが砕けた。

不思議なことに、今、痛みはまるで他人事のように、心の核から隔たった場所にある。

或いはそれは、心に深い傷を負った者ならではの、深層心理による自衛なのかもしれない。たかだか二日前の出来事でありながら、まるで遠い時間を隔てた過去のことであ

るかのように、記憶には奇妙な距離を感じる。

さもなければ、こうして谺谷に帰還しただけで――辛く哀しくも懐かしい想い出の詰まった、この景色を一目見ただけで――アルシアは自責に押し潰されていたことだろう。

彼女の過ちのせいで、今、彼女の育ての親たるエルフたちの里は、重大な危機に瀕している。この森の中にあって、気後れを感じつつも、それでも立って歩いていられる自分の厚顔ぶりには、他ならぬアルシア自身が驚いていた。

「そろそろ、〝先触れ〟の圏内です」

前を行くラゼィルの背中に向けて、アルシアは注意を促した。森の入り口に馬車と馬を残し、その先を徒歩で進みはじめて、すでに半刻あまり経っている。二人はいよいよ、隠れ里のエルフたちが侵入者を阻む領域内にまで踏み込もうとしていた。

ラゼィルは頷いて足を止め、周囲の木立を見渡した。森の景観には先程までと何の変化もない。ただ午後の日差しに安穏とぬくまった静寂があるばかりである。

だがラゼィルは誰もいない樹間の空漠へと、朗々と通る声で呼びかけた。

「地母神の慈愛の具現たる、喜びの庭に幸あれかし。これより先の聖域に踏み入る赦し



を、どうか森の守り手に請い願うばかり」

由緒正しい上位エルフ語による、形式に則った来訪の挨拶である。

「我が名はラゼィル。我もまた大地の恵みより生を受けし木々の輩たる一葉なれば、谺谷の法と秩序に敬意を表して、ここにひとたび歩みを止めましょう。庭師にして守り手たる皆々様よ、どうかお目通り願えませぬか？」

途端、ラゼィルとアルシアを巡る周囲の空気が、陽炎のようにゆらめきはじめる。

偽りの景観が洗い落とされ、森が真の姿を露わにする瞬間だった。

そして忽然と表れたのは、辺りの樹幹の影や枝の上に身構える細身の影……その数、六人。

二人の来訪者はとうの昔に、警戒に当たっていたエルフの防人たちに包囲されていたのだった。

薄く軽やかな草色のチュニックに、鹿の皮を鞣した肩帯と籠手。その手に携え持った細い弓は外見からは想像もつかないほど強靭な拵えで、その威力は敵をしてエルフ族を畏怖せしめる第一の因子である。

防人頭とおぼしき一人のエルフがラゼィルの前に進み出て、胸元に両の掌を重ねて頭を垂れる。害意のないことを示す平和の挨拶。だが残る五人の手はそれぞれの弓に添えられたまま、いつなりと瞬時に矢を番えられる体勢にある。

「生を慈しみ死を敬い、流転する命の秩序と形を知る御方は、誰なりと森の賓客。ようこそお立ち寄りくださいました。我らが同胞の兄弟よ」

防人たちも、これがただの迷い人であったなら、幻覚に陥れて方向を見失わせ、森の外へと追いやるなり何なりしていただろう。だが古の流儀に適ったエルフ語の口上を聞かされては、無碍にあしらうわけにもいかず、ひとまず幻惑の術を解くことにしたらしい。

だが、同じエルフ族のラゼィルを見定めんとする彼らの視線は、一様に冷ややかで余所余所しい。

ラゼィルが纏う、緞子のように重々しい厚手の外套、ベルトやブーツの留め金に使われた真鍮……いずれも当たり前のエルフであれば決して身につけない類のものだ。右の手首を飾る腕輪も、たしかに細工こそ精緻で美しくはあるが、調和を好むエルフの美意

識からすれば華美が過ぎて悪趣味ですらある。そもそも薄汚れた旅装束に対して浮き立ちすぎた装身具だ。

この来訪者がエルフの物差しに収まらない異端の徒であることは、防人たちの目にも明らかだった。

「して、お客人。何処の地より何を求めて、この谺谷に至りしや？」

「我が生地たる森は既になく、この身は還り着くべき故郷を持たぬ漂泊の根無し草。恥ずかしながら語るべき出自がありませぬ」

〝根無し〟という言葉を聞くや否や、防人頭の表情はますます硬く強張った。

「森と共に生きる道を捨てたと仰せか？　ならば今更、何を思って再び森に踏みいるか？」

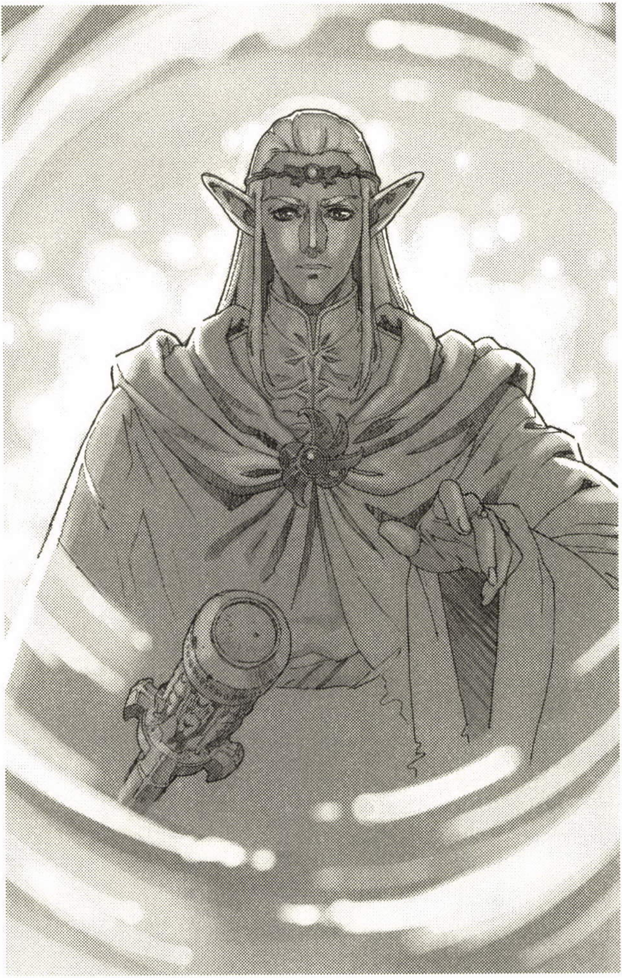
「木々と草花に抱かれる安らぎを忘れようとも、義までは忘れることなく今も、この胸に懐くが故に」

いつしか詰問調になっていた防人たちの問いかけに、ラゼィルは淀みなく返答した。

「義……とな？」

「左様。聞けば皆々様の里を脅かす、由々しき事態が生じている、とか」
「御身、何故それを――」
問いかけて、防人のエルフはラゼィルの背後に付き従う灰色のローブ姿を、あらためて凝視した。フードの奥に隠された顔形までも見透さんばかりに。
「……漂泊のラゼィルとやら。そこに控える少女は何者か?」
谺谷のエルフたちから注がれる視線の温度が、ますます冷えていく。だがそれをラゼィルは、どこか楽しんでいるかのように、泰然と微笑んで受け止めた。
「アルシア。顔をお見せしろ」
ラゼィルに命じられ、少女は気後れしつつもローブのフードを脱ぎ、容(かんばせ)と黒髪を露わにした。
――途端、防人のエルフたちが口々に呪詛の呟きを漏らす。アルシアの胸の奥で鈍い痛みが疼いた。
「旅の道すがら、行き会った野盗の群れと一悶着あった折りに、この娘の身柄を保護いたしました。お察しの通り、事情は彼女から聞き出した次第で」

メラネイド伯爵との談判に赴いた使者たちの報告は、すでに防人のエルフたちの耳にも届いていた。野盗、という言葉を聞いて、彼らは内心穏やかではいられない。
「ラゼィル殿、その野盗たちというのは――」
防人の問いを皆まで聞かず、ラゼィルは背後のアルシアへと向き直り、
「アルシアよ、今一度問う。〝樫の護り〟はいま何処に？」
俯いたまま想いを噛み殺していたアルシアは、短く、硬い声で応答した。
「かの護符は、人族の領主、セオドアの孫アーウィン・メラネイドの手の内に」
居並ぶ谺谷のエルフたちの間で、怒りの気配が膨れ上がる。
もとより人族の言い分を鵜呑みにするつもりは毛頭なかった彼らである。裏切り者の言とはいえ、アルシアの証言は伯爵の返答よりも信を置けるものだった。
そのとき、にわかに湧き起こった一陣の風が森の中を吹き抜けた。
『……御身の胸に懐く義を讃えよう。ラゼィル殿』
どこからともなく朗々と響き渡る声。はたと顔を上げた防人頭の傍らで、空間が漣（さざなみ）のようにゆらめき動く。



やがて虚空に陽炎のごとく揺らぎながら立ち現れたのは、いま一人のエルフの姿だった。

防人たちの弓兵姿とは異なる、ゆったりとした空色のローブ、額を紫水晶で飾る頭冠(サークレット)といった雅(みやび)な出で立ち。永遠の若さを誇るエルフ族の性(さが)として肌艶は青年のように瑞々しいものの、双眸に宿る智彗と威厳、それに居住まいから醸し出す気品は、尋常なものではない。

この場に居合わさない、おそらくは隠れ里の奥屋敷から投影されてきた虚像であろう。だが正体のないその姿に向かって、六人の防人たちは一斉に膝を屈して臣下の礼を取った。のみならず、ラゼィルの背後に控えるアルシアまでもが、まるで逃げ場を求めるかのようにして地に平伏する。

『影のみ馳せての拝謁の無礼、どうか御容赦願いたい。私は谺谷の森を預かる酋長ニブニール』

いかに虚像とはいえ、素性も明らかでない来訪者を酋長自らが遇するなど、滅多なことでは有り得ない。ラゼィルもまたすみやかに拝跪し、深々と顔を伏せた。

『どうか面を上げられよ。貴殿のお持ち下さった報せは、我ら谺谷の者たちの命運を左右する貴重なもの。のみならず――』

そこまでラゼィルに向けて朗らかな微笑を浮かべていたニブニール酋長は、やおら表情を一転させ、仮面のように冷酷な無表情で、その後ろのアルシアを睨み据えた。

『そこな忘恩の狗を捕らえ、連れ戻していただいたことで、我が一門の正義と名誉にまでも面目を施していただいた。重ねての恩義、もはや感謝の言葉もない』

黙して俯いたまま想いを噛み殺しているアルシアを横目に、ラゼィルは酋長に問うた。

「谺谷の皆様は、人族の奸計のみならず、それに踊らされたこの少女もまた糾すのでありましょうや？」

『もし其奴が、疑いなく我らが同胞であるのなら、尽きざる地母神の慈愛に免じて恩赦を一考せんでもない。だが、認めぬ。かような裏切りのあった後では、その黒髪は人間の眷属と断ずるより他にない』

酋長の静かな声の裏に、煮えたぎるほどの怒気の響きを、居合わせた誰もが聞きとめた。それはアルシアも例外ではない。

『たとえその半身に我らエルフの血が流れていようとも、その魂は欲得に目の眩む人族と同じ、すでに混沌の虜であろうよ』

孤立無援の少女の胸には、だが不思議と恐怖の情はなかった。これからいかなる懲罰が待ち構えていようとも、すでに味わった生き地獄には比べるべくもあるまい。もはや彼女は苦痛に怯える心そのものが麻痺していた。

深い傷を負った彼女の心は、ただ虚ろだった。この恵み溢れる世界の中で、自分に向けられるのは侮蔑と憎悪の念ばかりという、その現実がただ哀しいばかりだった。

そんなアルシアの沈黙を余所に、ラゼィルは膝をついたまま毅然と顔を上げ、貴人の幻影と向き合った。

「畏れながら、酋長。このラゼィルはまだ己が義と信ずるところを全うしたわけではありませぬ」

『――ふむ？』

不可解な物言いに、虚像が小さく眉を寄せる。

「根無しの卑しき身を顧みず、僭越は百も承知で申し上げます。どうかぜひこの私めも、

〝樫の護り〟の奪還に尽力させていただきたく」
虚像、実像の区別なく、その場に居合わすエルフたち全員が、驚きに眉を顰めた。
『奪還、と？』
「左様。夜陰に乗じて忍び入り、奪い返す。これしか他に策はありますまい。メラネイド伯爵とその孫は、森の裁きを畏れ敬う心を持ち合わせておりません。もとより道理を示して説き伏せるなど望むべくもない相手です」
『……』
ニブニールは険しい顔で沈黙した。防人たちも同様だった。ラゼィルの指摘は、あやまたず谺谷のエルフたちの総意を言い当てたものだった。
わずかな逡巡に言葉を濁しながらも、ニブニール酋長は根無しのエルフに問う。
『貴殿には、それが出来ると？』
「皆々様が森の暮らしに通暁しておられるのと同様に、私もまた、永らく人族と交わるに及んで、それなりに人族の世知にも通ずるようになりました。人間の盗賊が、人間の街で企み事を仕掛ける手口なども、いささか心得がございます」

模範的なエルフからすれば決して感心できない話であろうが、しかし谺谷のエルフたちの中にはもう、厭うような表情を見せる者は一人もいなかった。

「また、森の加護なきエルフ一人が生きるには、より違った所から加護を得るしか他になく――ささやかながら、二、三の邪法を身に修めるに至りました。石畳の街路や城中で、木々の加護なく立ち回ることになろうとも、私をお連れいただければ必ずやお役に立てましょう」

『ふむ……』

エルフ族の操る魔術は、その大半が森に満ちる草木の精霊力を拠り所としている。エルフ族にとって森における地の利は圧倒的であるが故に、どうしても彼らは森の外で行動を起こすとなると二の足を踏んでしまう。〝樫の護り〟を奪還するにあたって、酋長が懸念するところもそれだった。

だからこそ、ラゼィルのような〝根無し草〟の助力は、まさに渡りに船ともいうべき申し出だった。これがもし素性も知れぬ風来坊でなく、知古の者からの助勢であったなら、ニブニールは諸手を挙げて歓迎したいところだった。

『そこまでしていただく由縁が……失礼ながら、森を捨てて漂泊する身の貴殿に、そこまでエルフの義に殉ずる理由がおありとは思えぬが』

そう問われて、ラゼィルは卑屈な笑みに口元を歪めた。

「やはり根無しは根無しらしく、エルフらしからぬ人族じみた利己の心で動くのが分相応、とでも仰せでしょうか？」

『いや何も、そこまでは……』

「否、否。慧眼でございます。皆様の清廉たる心根を前に、この人族の塵世に汚れた本性を隠し仰せるわけがありませなんだ。――実はこのラゼィル、義を口上に尽くした上で、谺谷の皆様にひとつ、お情けを乞う心算でおりました」

『では報償をお望みと？』

ニブニールの声音が、やや得心いったらしく朗らかに和む。

『宜しい。何なりと申されよ。谺谷のエルフが恩義の何たるかを知ることをお見せしよう』

「それでは――」

ラゼィルは再び面を伏せてから、背後に蹲る小さな姿を手で指し示した。
「そこな少女アルシアの身柄を、ぜひ我が手にお譲り願いたい」
この根無し草との問答では何度も瞠目させられてきた谺谷のエルフたちだったが、今度ばかりは言葉もなかった。
「この娘、聞けば生まれながらにして穢れを背負い、森の天命を得られなかった不遇の身。このラゼィルもまた森に生きる道を見失った粗忽者ゆえに、同類相哀れむ情が湧いております。野盗たちの手から救い出すに至った顛末も、あるいは地母神による運命の導きやも知れず。どうか皆様のお許しを戴いて、これより先の我が放浪に、輩(ともがら)として連れ添えないものかと」
『……』
ニブニール酋長は表情を面に出さないまま、胸の内で算段した。
想像だにしなかった珍奇な要求ではあったが、むしろ妙な誓約やら金品やらを求められるのに較べれば、よほど害のない報償である。アルシアの断罪についても、永久追放という形で収めれば、裁きを求める声に対しても示しはつく。

あんな目障りな半エルフなどを身請けして何の益があるのか、はなはだ理解に苦しむところではあったが、それをいうなら〝根無し草〟という生き様そのものが、どだい尋常のエルフには理解を超えている。どんな酔狂に衝き動かされようと、訝るほどのものでもない。

『……承知した』

内心でほくそ笑みつつも、ニブニールは厳めしい表情を繕って宣言した。

『〝樫の護り〟が無事に谺谷へと戻った暁には、黒髪のアルシアの罪過を赦免し、以後の彼女の身上はラゼィル殿の責任の許に一任する。ただしアルシアは、以後二度とこの谺谷に踏み入ることを禁じ、また我ら谺谷の一門との縁故を吹聴することも許さない。

――これで宜しいかな？』

「ご厚情、感謝に堪えませせぬ」

深々と頭を下げるラゼィルを、防人のエルフたちもまた、奇態な珍獣を見るかのような冷笑の眼差しで眺めていた。

だがラゼィルの申し出に虚を衝かれたのは彼らエルフたちだけではない。驚きの程は、

むしろ当のアルシア本人の方が大きかった。

たしかにラゼィルは、馬車の中で目覚めたばかりのアルシアに対し、彼女を隷属させるものと宣言した。そうするだけの理由があるのだとも語った。

そういった権限は、暴力だけを法とするのであれば、労することなく手に入る。ただ拐して首輪で繋げばいい。あの野盗たちがそうしたように、ラゼィルもまた、ただ黙ってアルシアを連れ去ればそれで済んだのだ。

だが彼は、権限の〝対価〟を支払うことで、名実ともにアルシアを我が物にしようとしている。

そう、それはまさに〝対価〟だった。アルシアを支配し、その人権を所有する者として、保護者としてアルシアの行動に責任を負う義務。

『して、奪還の算段はどのように?』

「準備のために、幾つか用立てていただきたい品がございます。それと、速駆けに秀で、夜目の利く手勢を四人お貸し願いたい。それが間に合うようであれば、さっそく今夜にでも」

『問題ない。何なりと申しつけられよ』
アルシアを蚊帳の外に置き、ラゼィルはニブニール酋長との相談を先に進めている。
彼は予め用意してあった書付を読み上げるかのように淡々と、淀みなく計画の詳細を説明していった。やはり、ただの思いつきで言い出したことではない。ラゼィルは最初からそのつもりで、アルシアにこの森まで案内させたのだ。
彼の心の在り方は、アルシアにもまったく理解が及ばない。
このエルフは人を殺す。他人を奴隷として使役する。
アルシアを評して美しいと言う、その美意識の形もまた、ひどく歪んでいて異質なものらしい。
ラゼィルには恩義がある。今となってはただ一人、頼れる人なのだと思う。だがその一方でアルシアは、それでもラゼィルが堕落した悪人であることは否定できないと――そう彼を判じてきた。いま里のエルフたちがラゼィルを眺める眼差しに込められているのと同じ、忌避の念を捨てきれなかった。
エルフ族により養育されたアルシアは、個人が他の個人を支配する〝権力〟という概

念を、忌まわしいものとして教わってきた。だからラゼィルとの間に結ばれた、主（あるじ）と奴隷という関係は、決して喜ばしいものでも、誇れるものでもないと考えていた。

なのに――

思い返せば、かつて、これほどまでにアルシアを〝所有する〟ことに固執した者がいただろうか？

かつて自分は護られたことがあるか？　彼女の犯した過ちを、彼女に成り代わって償うなどと、そこまで言ってくれた人物がいたか？

一人だけ、虐げられ続けてきた少女の心に、甘言を弄して取り入ってきた男がいた。アルシアは、思慕の念というものをその男から教わった。今となってはもう二度と、同じ感情に心を許すつもりはない。

だが今度は、まるで違う。

ラゼィルが彼女に求めるもの、彼がアルシアにもたらすもの……それは温情とも、安らぎとも無縁の関係なのだろう。

だとしても、その繋がりさえ確かなら――きっと自分は居場所を手に入れられる。よ

うやっと、存在を赦される。

もう二度と、疎まれたり、捨てられたりするのは嫌だった。それは死ぬよりも恐かった。

拾われた犬が飼い主に尾を振る心境というのは、きっとこういうものなのだろう——

そんな風に自分の胸中を推し量りながらも、アルシアはそれを自虐とさえ思わなかった。

自分が犬よりも上等な立場にいるなどという、そんな幻想は既に持ち合わせていない。

もしこれが本当に、その場限りの酔狂でなく、彼が今後ともアルシアをどうあっても

〝支配したい〟とまで欲してくれるのであるならば……

喜んで、わたしはこの人の奴隷になろう。

少女は独り、そう密かに心に決めた。

闇からの使者

不毛の荒野に降り注ぐ、楚々とした月の光。
日中、砂塵を巻き上げて吹き荒れた風も今は凪ぎ、ただ死のような静寂が見渡す限りを占めている。
いかに月が明かるかろうと夜は夜。旅人にとっては月光が陽光ほどに頼り甲斐のあろうはずもなく、どれほど道程を稼ぎたくても、夜の荒野を踏み越えてまで旅路を急ごうとは、まず普通は思わない。
故に、そんな夜の荒野に佇立する五つの影法師を、もし見咎めた者がいたならば、まさか通りがかりの旅人などと判ずるわけもなく、おそらくは幽鬼か何かと見当をつけ、祟りを畏れて逃げ出すに違いない。
実のところ、その五体の人影は、ただの幽鬼よりもなお危険で忌まわしい存在であったのだが。
「……蹄の跡は、馬七頭ぶん。うち六騎が連携し、残る一騎を包囲した……」

影のひとつが呟いた。文目も分かたぬ薄闇の中、大地から何を読み取っているのか、その視線は凝と足許に据えられている。

「さらに、そこ……もう一頭ぶんの蹄と、馬車の轍。どうだ？　数は」

地を睨む影は、また別の影へと問いかけた。こちらはなおいっそう奇態な行為に没頭している。なにか細々した無数の物品を、地面に、まるで露天商のように整然と並べて、しきりに数え上げている。

「……足りないのは、馬一頭。二本脚については、数こそ合うが……」

「馬車に何人乗っていたか。それが判らぬでは何とも言えん」

また別の影が応じた。残りの影が首肯を返す。

闇の中、手明かりもなしに何かを検分している影たちは、およそ人間離れした視力の持ち主であろう。

地に並べられ、分類されている物品は、いずれも不定形で大きさも不揃いである。この場合、闇の帳は温情であった。もしそれらが白日の下に晒されていたならば、まともな神経の持ち主であればとても正視に耐えなかったに違いない。

肉塊、である。
内臓があった。骨があった。切断された手足もあった。
馬と人間、数体ぶんの屍の残骸が慎重に選り分けられ、分別されていたのである。
「馬も人も斬殺。そこは間違いないのだが……」
細切れの骸を、ひとつずつ拾い上げて子細に眺めながら、影のひとつが呟きを漏らす。
「なにぶん遺体が傷みすぎている。太刀筋までは見分けがつかん」
乾涸らびたもの。溶けかけたもの。獣に噛み千切られたもの。集められた肉片は、それぞれ様々な状態にあった。
それら検分の対象とされている肉片の一群とは別に、少し離れた所には別の屍が積み上げられて小山を成している。狼や野犬といった、この荒野で屍肉をあさる獣たちの死骸だった。いずれも腹を割かれ、胃の中身を掻き出されていた。
無論、この異様な影の群れの所行である。
漆黒のローブに身を纏ったその五人は、まず荒野の直中で乱闘の痕跡を見出した後、うち一人が蹄や足跡の痕跡と、まだ残っていた遺骸の一部を回収し、残る四人はそれぞ

れ四方に散ると、わずか小一時間ばかりの間に、近隣にいた獣たちを残らず狩り集め、腹を掤いて未消化の胃物を漁ったのである。
　こうして、前日の夕刻にこの場所で無惨に斬り捨てられた人馬の残骸が、残らずかき集められた。その手際はもちろんのこと、食い荒らされた屍肉から的確に情報を読み取っていく彼らの知識と観察力は、明らかに人知を越えた外道の法によるものだった。
「ともあれ、この場から〝去った〟のは、馬一頭、馬車一輌——」
「——それと、馬車に乗れるだけの乗員、か」
　殺戮の痕跡。生者は立ち去り死者は残った。屍の数が出揃ったとすれば、それに足りないぶんが〝殺した〟者たちに違いない。
「斬られていない馬が、一頭いるな」
　そう指摘した一人の影が、馬一頭ぶんの四肢と首、それと内臓とを別に除ける。
「これは……ほう、千切られたか。力任せに」
「いや、待て」
　影のひとつが屈み込み、それぞれの肉片を拾い上げて匂いを嗅ぐ。

「……手足と腑と、血の香が違う。それぞれ別の馬だ」
影たちは顔を見合わせた。他の馬の死骸は、きちんと帳尻が合っている。
「つまり、この一頭ぶんの馬の破片が、実は二頭ぶんの肉だと？」
「そうなるな。最初から腑のなかった馬が一頭。腑だけを残して去った空洞の馬が一頭」
何か合点がいったのか、影たちは満足げに首肯を交わす。
「大型の獣の体内に〝僕(しもべ)〟を隠して持ち歩くのは、彼奴(きゃつ)がよく使う手口よな」
「間違いない。近いぞ。あの男までの距離は一両日と離れていない」
地の底から漏れ出たような、低く陰惨な笑い声が湧いた。それは闇よりもなお黒い影たちの含み笑いだった。
「者共よ、今こそ誅伐の剣を我らが手に」
「かの大逆の叛徒の手中より、ついに我らが御神体が奪還される。おお、餓えしグルガイアを讃えるべし！」
「讃えよ！」
「讃えよ！」

「餓えし混沌の君を讃えよ！」

誰に聞かれることもなく、月明かりの下、影たちの斉唱は秘めやかに熱狂の度を増していった。

翌日の昼下がり、その荒野から数里離れた谺谷の森で、隠れ里に住まうエルフたちが風変わりな客人の来訪を受けることになる。

だが追跡者たる黒い影たちは、まだそれを知るには至らない。

侵入

根無し草のラゼィルの統率のもと、谺谷のエルフたちは速やかに〝樫の護り〟の奪還計画に着手した。

夜半の決行を目処に、エルフたちは日中を人選や下準備のうちに慌ただしく費やし、その間、ラゼィルとアルシアは森の片隅に設けられた客人用の四阿（あずまや）で待たされた。いかに協力者といえど、森のエルフはそう簡単に隠れ里の場所を余所者に教えはしない。

そして夕刻、ラゼィルの指示した道具を携えて、身支度を整えた四人のエルフが四阿へやってきた。ラゼィルと共にメラネイド伯爵城に侵入する精鋭として選ばれた者たちである。リーダー格を担うのはロスファンという、まだ年若く溌剌とした青年で、エルフにしては珍しく好奇心と冒険心に富んだ男だった。

城下町までの移動には、ラゼィルが森の外に残してきた幌馬車を提供した。六人ものエルフの一団を人目に触れぬよう搬送するには、とりあえず良しとできる乗り物である。馬車を引く駄馬のあまりに不格好な有様に、エルフたちは里から別の駿馬を連れて行こ

うとしたが、それはラゼィルが頑なに拒んだ。
冴谷から伯爵の城下町に至るまでの車中では、ラゼィルは準備の仕上げに取りかかっていた。
里のエルフたちに用意させた、炭で染め抜いた一二枚のマントに、〝穏形の呪い〟を仕込む作業である。荷台の中央にマントを一枚ずつ拡げ、その布地に黒光りするタール状の粘液で、魔術的な紋様を描いていく。森のエルフたちにとっては初めて見る類の術法だった。
「効能は、君らが森で使う〝穏形〟とほぼ一緒だ」
作業の手を休めることなく、ラゼィルは興味深そうに見守っているロスファンに説明した。
「ただし木々の梢に身を扮するのではなく、闇夜の陰影に溶け込んで相手の目を欺く。これに身を包んで、なるべく壁や物陰に寄り添って歩くんだ。何もない空き地を横切るような場合は這って進め。人族程度の夜目なら、それでほぼ完璧に輪郭を見失う」
紋様を描き終えたマントは即座に丸めて、特別に用意した荒縄で括って縛る。縄もま

た呪術的に奇怪な縒り方をしたもので、魔力の発散を封じるものだという。
「マントを使う直前まで、この縄は解くな。マントに掛けた術の効力は、せいぜい四半刻ぐらいしか保たない。だから一人につき二枚のマントを渡しておく。城下町を抜けるのに、往路で一枚、帰路で一枚だ」
「そのタールみたいな黒いのは、何なんだ？」
ロスファンの質問に、ラゼィルは意味深な微笑で答えた。
「教えないでおこう。森に住まう諸君には夢見の悪い思いをさせたくない」
何人かのエルフは殊更に不安そうな顔をしたが、敢えてラゼィルを問い質そうとする者はいなかった。
ただ一人、エルフ族には不似合いな好奇心を持て余している様子で、ロスファンは面白そうにラゼィルの作業を眺めている。
「なぁ、訊いていいか？　ラゼィル」
「何なりと。返事を期待しない範囲でな」
最後の一枚のマントに紋様を描き終えたラゼィルが、手早く荒縄で緊縛を施しながら

応じる。既に彼らの交わす会話は簡便な標準エルフ語で、堅苦しく形式張った言葉遣いは無用だった。

「根無し草の暮らしってのは、どういうものなんだい？」

不躾ともいえる遠慮のない問いだったが、ラゼィルは気に留めた風もなく、

「気楽なものだ。頼らない代わりに縛られない。孤独の対価としての自由。そう悪いもんじゃない」

そう飄々と答えた。

「人族の仲間になって、冒険の旅に出たりもしたか？　連中、そういうのが好きなんだろう？」

「たしかに、名利を求めるのが人族の性（さが）ではあるな」

「龍を退治して、財宝を手に入れたりとか？」

子供じみた質問に、ラゼィルは苦笑した。

「まぁ、その程度の経験は、ないこともない」

ラゼィルの冗談めかした返答は、からかっているのか本気なのか判然とせず、ロスフ

ァンはただ「へぇ」と相槌を打つだけに留めた。
「それにしても、よくもまぁ、あの黒髪を引き取ろうなんて気になったもんだな」
そう言ってロスファンは、アルシアの方を顎で指す。
荷台で寄り集まっているエルフたちの輪に加わることもできず、ハーフエルフの少女はひとり所在無げに、御者台の上で膝を抱えて蹲っていた。
「あのまま谺谷に置いていけば、命はなかったんだろう？」
「まぁな」
ロスファンは冷淡に頷いた。
「もちろん、だからって誰も気に留めなかっただろうがね」
秩序を尊び、地母神を奉じ、大地が生命を育むかの如き慈愛の心を美徳とするエルフ族。だが彼らの慈愛とは、彼らが規範とする秩序の範疇にだけ注がれる。異種族間の混血などは、もちろんその埒外にあった。
「アルシアの親はどうなった？」
ラゼィルの問いに、ロスファンは鼻を鳴らす。

「知るものか。あれは産まれて間もない赤子のうちに、森に捨てられてたんだ。酋長が温情を与えて、里で育ててやることになったんだが——まったく、とんだ仇で返されたものだ」

離れた所にいるアルシアへの当てこすりも含めてか、ロスファンの声は必要以上に大きかった。当然、アルシアにも聞こえてはいただろうが、少女は身じろぎもせず、ただ空虚な表情で俯いていているだけだった。

「ともかく片親はエルフなのだろう？　谺谷の者じゃなかったのか？」

「冗談じゃない。我々の一門に、人族と交わって子を成そうとするような恥知らずがいてたまるか。大方、余所から流れてきた根無しのエルフが、持て余して捨てていったんだろう。——ああ、気にしないでくれ。あんたに悪気はないんだが」

「なに、構わんさ」

そう平然と受け流してから、ラゼィルは幌の外を窺った。

すでに月明かりに照らされて、箱庭のような城下町が遠望できる所まで来ていた。その中央、小高い丘の頂では、メラネイド伯爵城の篝火が、点々と城壁の輪郭を彩ってい

る。
「さて、ほどなく到着だ。準備はいいか？」
そう促すラゼィルに、ロスファン以下四人のエルフたちが力強く頷く。その傍らでは
アルシアもまた、静かに城壁の影を眺めながら、小さく、だが決然と頷いていた。
「……アーウィン……」
少女が漏らした小さな呟きは、誰の耳にも届くことはなかった。

闇に謳う

月明かりが煌々と照らす夜の街路を、六つの黒いマント姿は、文字通り影に紛れて駆け抜けた。

人族より体格の華奢なエルフ族は、膂力で劣るぶん俊敏さに秀でている。素早く、かつ足音を忍ばせつつ、猫のような身のこなしで影から影へと馳せる足運びは、そこそこの修練を積んだ人間の盗賊などでは及びもつかないほどだった。

もしこれが森の中ならば、さらに幻惑の術による迷彩がエルフたちの姿を完全に不可視にするところだが、今回はその役をラゼィルの仕立てたマントが代替していた。二度三度、夜回りの衛兵たちの鼻先をすり抜ける局面に出会したが、カンテラをかざした衛兵たちは、ひらめく黒いマントの影に気付きさえしなかった。実のところ、森のエルフたちは根無し草の邪道な魔術など侮っていたのだが、その覿面な効果を思い知ってからは、ただ内心で唸るしかなかった。

ついに城壁の下にまで辿り着いても、胸壁の上にいる見張りの衛兵からは丸見えの位

置にありながら、誰もエルフたちの墨色のローブに注意を払う者はいなかった。
「驚いた……本当に誰にも気付かれない」
ロスファンがそう感嘆の溜息をついてから、石積みの高い城壁を見上げる。
「さて、この先はどうする？　ラゼィル」
「まぁ、任せておけ。——ロープを」
こともなげに請け負ってから、ラゼィルは同伴するエルフの一人から、束ねたロープの束を受け取った。
「まず私が上って、このロープを結わえてくる。あとは一人ずつ続け」
だが城壁の石積みは精密で、手がかり足がかりにできそうな隙間や突起はそうそう見当たらない。ロスファンは訝しげにラゼィルと城壁とを見比べる。
不敵な笑いとともに、ラゼィルがベルトから引き抜いたのは、長さ四インチ、幅二インチほどの、先細りの木の葉のような形をした奇妙な刃物だった。柄にあたる部位はなく、先端から側面にかけての縁はすべて剃刀のように尖っている。一見すると銀製の刃物のようだが、やや透明感のある質感と虹色の光沢は、むしろ磨き上げた貝殻のように

見える。同じような刃物を、ラゼィルはベルトと肩帯に何枚も挿していた。おそらくは手裏剣として使う武器なのだろう。エルフたちが護身用の短剣を一本ずつ携えているだけなのに較べれば、かなりの重装備といえた。

ラゼィルが、その手裏剣を両手に一枚ずつ持って城壁と向き合ったのを見て、ロスファンはますます訝った。あの刃の切っ先を石積の隙間にねじ込みながら登る算段だとしたら、正気とは思えない。いかに身軽なエルフとはいえ、柄もない刃だけのナイフに掴まって体重を支えられるとは思えないし、そもそもあの薄い、見るからに脆そうな刃物は、とてもラゼィルの体重に耐えられそうにない。

ところが、ラゼィルはロスファンが怪しんだ通りに、本当に二枚の手裏剣を城壁に突き立てながら、垂直の壁面を腕力だけで登攀しはじめた。どうやら手裏剣は見かけによらず頑丈で、またその剥き出しの刃を掴むラゼィルの籠手は、さらに強靭な繊維で編まれているのだろう。黒い籠手は獣毛を編んだもののように見えたが、何の毛なのかは見当もつかない。

森のエルフたちが、木登りの手練では栗鼠にも勝るとするならば、石壁を這い登るラ

ゼィルの手際はヤモリもかくやと思わせるほどだった。みるみるうちにその姿は頭上の闇へと消えていき、ほどなくして、待ち受けるエルフたちの元へロープの一端が垂らされた。

「恐れ入ったな……」

嘆息してかぶりを振りながら、ロスファンはロープに掴まり、その強固な手応えを確認してから縄登りにとりかかった。

× × ×

胸壁（パラペット）の上を駆け抜け、壁塔のひとつに踏み込んだところで、ふいにラゼィルが舌打ちして立ち止まった。

「どうした？」

「時間切れだ」

ラゼィルがマントを脱いで、ロスファンに示す。その表面に描かれていた黒いタール

の紋様は、いつの間にか薄れて、あらかた消えかかっていた。
「皆、マントは捨てろ。もう何の役にも立たん」
そう聞いて、エルフの一人が二枚目のマントの梱包を解こうとしたところを、さらにラゼィルが制止する。
「忍び込むより逃げるときの方が肝要だ。そいつは〝樫の護り〟を手に入れるまで取っておけ」
「だが、どうする？」
不安げに問い返すロスファンに、ラゼィルはさも平然と肩を竦めた。
「別にどうということもない。ここから先は呪術の助けを借りずに進むまでのこと」
嘯いてラゼィルは、外套の袖を捲る。籠手の上の肘から上腕にかけて、白い肌を浸食するように、黒い帯状のものが螺旋状に巻きついていた。
入れ墨か？　と訝ったロスファンが見守るうちに、黒い帯はふいに蛇のようにうねり、ラゼィルの腕から滑り落ちる。
「な……!?」

黒く厚みのないそれは、まるで地面から剥がされて虚空に吊り上げられた影のようだった。いや、その朧で正体のない輪郭は、正真正銘の〝影〟だった。

目を疑うロスファンの前で、ラゼィルは手からぶら下がった〝影〟をしごくようにして一振りした。途端に、影は内側から裏返るようにして厚みと輪郭を取り戻し、次の瞬間には、一振りの曲刀となって彼の手の中に収まっていた。

同様に反対の左袖からも、一条の影がするりと滑り出るやいなや、瞬時に実体を取り戻した。こちらは逆棘のびっしりと植わった、見るからに凶々しい意匠の短槍だった。

「そ、それは……」

「私の武器は、厚みと重さを影の中に畳み込んで持ち歩ける。こういう呪法も、君らには馴染みがないだろうな」

当然だった。平和を尊ぶエルフ族の武器とは、基本的に自衛のためのものである。これほど剣呑な武装を暗器のように隠して持ち歩く術など、そんな暗殺者めいた方法はエルフの思い及ぶところですらない。

唖然としているロスファンたちを前に、ラゼィルはさも自慢げに右手の曲刀を見せび

らかす。
「ほら、美しい武器だろう？　これは〝凍月(いてづき)〟」
続いて今度は左手の短槍を掲げ、
「――そしてこれが〝群鮫(むらさめ)〟。いずれ劣らぬ自信作だ。私が手ずから鍛えたものでね」
「……」
どういう返答で応じて良いのやら判断できぬまま、ロスファンは二つの得物にしげしげと見入った。
曲刀の刀身も、槍の穂先も、明らかに金属ではない。艶やかな乳白色の光沢は、まるで磨き上げられた象牙のようだ。そのくせ不思議と脆そうな印象はなく、その鋭利さはむしろ鋼の刃よりなお凶々しいものを感じさせる。
「いったい何で出来ているんだ？」
「獣の角と骨から削りだしたものだ」
言われてみれば確かに、〝凍月(いてづき)〟と呼ばれた曲刀のフォルムは妙に生々しく、先細りの刀身の反り具合は曲刀としての扱い易さを念頭に置いて作られたようには見えない。

これはおそらく、もとからこういう形の骨を鋭利に削り上げて成形したものだろう。だとすれば、湾曲したその形は肋骨を想像させるが——長さ三フィートもある肋骨の持ち主とは、いったいどういう動物なのか？

そんな他愛もない疑問に囚われていたロスファンは、ラゼィルが平然と壁塔の螺旋階段を下っていこうとするのを見咎めて、今度こそ本当に狼狽した。

「待て！　ちょっと待て！」

「どうした？」

胡乱げに振り向くラゼィルに、掴みかからんばかりの剣幕で詰め寄るロスファン。

「あんた、一体これから何をするつもりだ？　まさか……」

穏形の術も使わずに、見張りのいる城の中庭へ、抜き身の刀をひっさげて乗り込んでいこうというのだから、ラゼィルの意図するところはもはや問うまでもなかった。彼は城中の衛兵を実力行使で無力化する気なのだ。

「案ずるな。ちゃんと陽動の手筈は整えてある。そろそろ私の従僕の一人が、城門の外に着く頃だ。まず門衛を殺して開門し——」

むろんロスファンが糾さんとしているのは侵入の算段ではなく、侵入の方針についてである。

「我らは流血沙汰など望んでいない！」

無為な殺生の回避——それはエルフ族にとって最も犯すべからざる大原則である。これまで砂金集めの人夫たちを邪魔してきた手口は、たしかに卑劣なものではあったが、それでもエルフたちは決して相手の命までも奪うような真似はしなかった。

だがロスファンの血相を余所に、ラゼィルは、まるで船旅の途中で些細な忘れ物に思い当たったかのように、やや途方に暮れた風な薄笑いを浮かべただけだった。

「なぁ森のエルフ殿よ。まさかこの期に及んで、その懐の短剣を抜き放つ覚悟がないとは言うまいな？」

「な——バカな！　貴様どこまで地母神の教えに背く気だ!?　それでもエルフの端くれか!?」

もはや逆上に等しいロスファンの剣幕に、ラゼィルは、空恐ろしくなるほど冷ややかな嘲りの笑みで応じる。

「なぁおい、信心深くおめでたいエルフ殿。まさかこの城の中にいる連中に、一人でも地母神の慈悲に値する輩がいるとでもお思いか？　奴らがやろうとしている事を考えろ。ゴブリンやオークの群れとどう違う？　君たちの愛する森を、ただ欲望のためだけに蹂躙しようとしている連中だぞ」

「……ッ！」

世界の秩序を破壊せんとする〝混沌〟の勢力が攻め寄せたときには、エルフたちとて戦の覚悟で死闘に臨む。だが人族は、たしかに相容れない部分もあるとはいえ、それでも過去幾度となくエルフたちと手を携えて〝混沌〟と対決してきた〝法〟側の同盟者たちでもあるのだ。

「人族を、オークと同列に語るなど……」

力無い声で反駁しようとするロスファンを、さらにラゼィルが冷め切った口調で諭す。

「残念ながら、人族とはそういうものだ。永らくこの世界を放浪しながら、私は多くの人間と出会ってきた」

曲刀の峰で肩を叩きながら、ラゼィルは出来の悪い生徒を請け負った教師さながら、

苛立ちまじりの横柄さで語る。
「彼らは、たしかに我らエルフと理想を分かち合えるほど高潔な一面もあるが、その一方でオーガの拷問官ですら及ばんほど残虐で悪辣な側面も持ち合わせている。その二面性が人間という種族の性だ。金銀財宝は人の魂を混沌の側に寄せてしまうのだよ」
「……」
エルフたちが肯んずるにはあまりに惨い、それは極限の諦観だった。
たしかに砂金目当てに森を拓こうとした人族の欲望は度し難い。その浅ましさを憎いとさえ思ったこともある。
だがその憎しみを理由に短剣を抜くのだとしたら、それはロスファンが憎み蔑む人族の行いと、どれほど違うというのか？
「――ラゼィルよ、哀れな根無し草よ、お前の心の有りようこそ、混沌に魅入られている」
葛藤に疲れた声で、それでも厳かにロスファンは首を振った。
ラゼィルは、だがそれ以上食い下がることもなく、鼻で嗤って傍らの物陰を顎で指し

た。

「では君は、ここに隠れて待っていろ。手を汚すには及ばない」

今度こそ拒絶するように、ラゼィルは他のエルフたちに背を向ける。ロスファン以下、谺谷の戦士たちは誰一人として続く者はいなかった。

「……たった一人でも、なお行くと？」

「一人というわけでもなさそうだが」

悠揚と呟くラゼィルの傍らへと、エルフたちの横をすり抜けて、ひときわ小柄なローブの影が駆け寄る。

狼狽の色も露わなエルフたちとは対照的に、アルシアの表情は仮面のように何の感情も顕していない。ただ直向きな視線だけが、ラゼィルを見つめている。

ロスファンは嫌悪に顔を歪め、吐き捨てるように呟いた。

「森の道を踏み外しし者たち、ことごとくに災いあれ」

「私が〝樫の護り〟を取り戻してきた後で、その言葉、もう一度聞かせてもらおうか」

嘲るような冷笑だけを残して、ラゼィルはアルシアを伴い、中庭へと続く螺旋階段を

下りていった。

× × ×

折しも、中庭で巡回の任についていた三人の衛兵は、まるで地の底から湧いて出たかのように忽然と現れた二人の人影に我が目を疑い、ほんの数秒だけ躊躇した。その数秒は、ラゼィルが左手の〃群鮫（むらさめ）〃を振りかざして投じるのに充分すぎる時間であり、充分すぎて余った数刹那も無駄に費やされることはなく、ラゼィルは自ら投じた槍の後を追うようにして突進し、三人との間合いを詰めた。

まず真っ先に反応して身構えることができたのは、図らずも群鮫（むらさめ）の標的となった一人だった。手にした矛を構え直し、警告を放とうとして開けかけた口に、まるで吸い込まれるようにして突き刺さった短槍は、盆の窪から切っ先を覗かせるまでに深々と貫通し、衛兵の声を永久に奪った。

次に強襲を理解できた一人には、二つの選択肢があった。腹の底から大声を発して敵

もにこなすのは間に合わない程に、すでにラゼィルは肉薄し、振り上げた〝凍月〟の間合いに衛兵を捉えていた。
　至極当然な結論として、衛兵はまず防御を選び、敵の曲刀の一撃を矛の柄で受け止めた。それは考えるまでもなく、死と引き替えに一声を放つことよりも有意義な行動のはずだったが――結論として、彼の判断は間違っていた。凍月の尋常ならざる切れ味は、鉄製の矛竿すら歯牙にもかけず、防いだ衛兵の頭蓋ごと一刀のもとに両断してのけた。
　最後に生き残った三人目は、ようやく戦闘の態勢でラゼィルと相対するだけの猶予を得られた、最初の一人だった。だがその彼も、ラゼィルだけに気を取られていた隙を、続いて突進してきたもう一人の侵入者によって襲われた。
　実のところ、ラゼィル自身にとってもこれは意外だった。彼もまたアルシアには戦力としての価値は求めていなかった。
　だが――突進の勢いに体重を乗せて相手の喉元を突き上げると同時に、片足を相手の膝裏に絡めて、絶妙のタイミングで相手の重心を宙に浮かせて転倒させせた、その鮮やか

なまでの手練は、明らかに訓練されたものだった。仰向けに倒された衛兵は、その勢いで後頭部をしたたかに打ち、それきり昏倒してしまった。

「なかなかに達者な腕並じゃないか」

意外な発見に喜色を露わにして、ラゼィルは拍手でアルシアを褒めそやした。だがアルシアは喜ぶよりも、そんなラゼィルの朗らかな笑顔が、たったいま二人の人間を斬殺したばかりのものにしては異様すぎて、複雑な想いでただ黙するしかなかった。

「戦いの訓練を受けていたのか？」

「人間の血が混じっているせいで、他のエルフの子より頑丈な身体でしたから……他に、取り柄なんてなかったですし」

半エルフのアルシアを、自分たちと同等の者として扱っていなかった森のエルフたちからすれば、その教育は、拾った犬を猟犬に鍛え上げる程度の認識だったのだろう。だがそれでもアルシアは真摯に打ち込んで修練したとみえて、現にその成果はこうして実戦に耐え得るだけのものだった。

「それだけの腕っ節がありながら、たかが野盗ふぜいに不覚をとったのか？」

「大勢でしたし……それに、本物の刀を突きつけられたのは、あれが初めてだったので……」

そう語りながらもアルシアは、だんだんと自分自身が解らなくなっていた。

戦いの技を身につけながらも、実際の危機に臨んで竦み上がり、結果として自分一人すら守れなかった――そんな一昨日までの自分。

それに較べると、たった今、さしたる決意や心構えもないままに、ただ身体に覚え込ませた技術を振るっただけで成果を上げた自分は、まるで別人のようだった。

喜びも、満足感もない。ただ違和感だけがある。

あの一夜の体験を契機に、自分の魂の奥深いところから何かが欠落してしまったようなな――アルシアはそんなうそ寒い感覚に囚われた。

アルシアの倒した衛兵は、気絶しているだけで死んではいない。その一方で、ラゼィルの手に掛かった二人の屍は、ここまでする必要があったのかと思うほど凄惨な有様だった。

不思議と、嫌悪や忌避感は感じなかった。むしろ彼女はその二つの酸鼻な死体に、ラ

ゼィルという存在の遠さ、その理解の及ばない隔たりを見て取って、それが苦しく胸につかえた。
「貴方の従者であるためには――私も、人を殺せなければなりませんか？」
「殺せるに越したことはない」
涼しい顔でそう答えながら、ラゼィルは最初に殺した衛兵の骸から群鮫（むらさめ）を引き抜いた。ズブ、と身の毛もよだつような湿った音を立てて、逆棘が肉をちぎり骨を削りながら血の糸を引く。槍の一撃が犠牲者を即死に至らしめたのは、むしろ慈悲深かったかもしれない。あの逆棘の穂先を抜かれる激痛を、生きたまま味わうことを思えば。
「出来るかどうか、まぁ、まずは一人殺してみて確かめろ。その手で殺めてやりたい奴がいるだろう？」
群鮫（むらさめ）に血振りの一旋をさせたついでに、ラゼィルは槍の先で城の奥――居城の方を指し示した。
未だに侵入者にも気付かず、そこで惰眠を貪っているであろう一人の男を思って、アルシアの胸が冷たく軋む。

「護符の方はお前に任せる。おそらく例のアーウィンとやらが肌身離さず持っているはずだ。奴の部屋は判るな？」
「はい」
以前にも一度、アーウィンの手引きでこの城に忍び入り、彼の私室まで案内されたことがある。アルシアがまだ恋に夢見る少女だった頃の話だ。
ラゼィルは、今夜の企ての要となる品をアルシアに手渡した。
「段取りは、馬車で説明した通りに。相手を殺したければその後で、な」
「はい……でも、貴方は？」
「いくつか幻覚でも使って、もうしばらく衛兵どもと戯れていよう。私が主賓だと勘違いさせておけば、お前の方も動きやすかろう」
つまりは、囮になるということか。
主従の関係を考えると、危険の重さや役割の重要度が逆なようにも思えたが、たったいま目の当たりにしたラゼィルの戦闘力を思えば、アルシアには案ずることさえ烏滸がましく思えた。

もとよりこの主の下知には、意見しようなどという気持ちさえ起こらない。
「――では、仰せのままに」
頷いてアルシアは居城を目指し、中庭を駆け抜けた。
従順なる従者の姿が回廊の奥へと消えていくのを横目に、ラゼィルは気絶した衛兵の上体を抱き起こし、背中に膝を押し当てて活を入れる。
「ぐ……」
苦しげに呻いて意識を取り戻した衛兵が、まだ状況を把握しきれないうちに、今度はその背中から廻されたラゼィルの右手が、衛兵の腹を凍月の切っ先で刺し貫いた。
「がぁぁぁッ!?」
激痛に目を見開き、悶絶する衛兵。その表情がよほど滑稽なものに見えたのか、ラゼィルは声を上げて大笑いした。
「はは、済まん済まん。他の二人はついうっかり、手際よくやりすぎたんだ。急所を一撃、ばかりでは陽動にならんからなぁ」
そう言って親しげに衛兵の肩を叩きつつ、だがもう一方の手には凍月の柄を握ったたま

まで、ラゼィルは恐怖と苦痛に身悶えする衛兵の耳元に囁きかける。
「頑張ってもっと大きい悲鳴を頼むよ。ほら、もう一声」
衛兵の体内で鋭利な刃がゆっくりと輪を描き、腑を掻き混ぜる。衛兵は今度こそ魂消るばかりの絶叫を張り上げた。
悲鳴は塁壁の中で反響して城内に轟き渡り、すぐに間を置かず物見櫓に灯火が燃え上がった。警鐘が狂ったように打ち鳴らされ、城中の人間に非常事態を訴える。
満足の笑みを浮かべながらラゼィルは立ち上がり、傷を押さえて泣き叫ぶ衛兵に、とどめの一撃を与えんとして凍月（いてづき）を振り上げた。――が、そこで思い直し、腹の裂けた相手をそのままに捨て置いて、いましばらく死に至る苦痛を味わわせることにした。
「ようやく宴らしくなってきた」
ほくそ笑んで呟くラゼィルの右腕で、深緑の猫目石が濡れたように艶やかな光を放っていた。
詰め所や胸壁の壁塔から、続々と現れては侵入者を包囲する衛兵たち。いずれも剣と

甲冑に身を固め、戦支度も同然の重装備である。
衛兵たちの手に手に携えた松明の炎が、抜き身の刃を凶々しく輝かせる。衛兵長の号令一下、その切っ先は一斉に曲者の身体に殺到し、寸刻みに串刺しにすることだろう。
だが、鱠斬りの運命に瀕した侵入者の容には、どう見ても喜悦の表情としか思えない満面の笑みが張り付いている。
エルフだ、と、衛兵たちが口々に囁きを交わした。
華奢で細身な体躯と美貌。何よりも見誤りようのない尖った耳朶。
もとよりエルフ族に対して公正な認識を持っている人間は希である。加えて谺谷の懸案を抱えたメラネイド伯爵領の人間は、森に住まう妖精族に対して悪感情を募らせていた。彼らが平和を尊ぶ種族であり、わけもなく殺戮に走るような邪悪さ凶暴さとは無縁であるという通説を、ここで思い出す者はいなかった。何より、その銀髪のエルフの足許に転がる見張りの兵の屍は、衛兵たちの血を滾らせるのに充分すぎた。
が——功に逸った幾人かが、一太刀浴びせようと詰め寄った途端、ことごとく血飛沫を巻き上げて頽れるのを見るや、衛兵たちは怒りすら凌ぐ驚愕に唖然となった。

紅に染まったエルフの曲刀は、間違いなくたった今、新たな犠牲者の血を吸ったものだろう。なのに誰一人として、その曲刀が振るわれる瞬間を目で捉えた者がいなかった。加えて――犠牲者の、ぱっくりと断ち割られた鎧の胸当て。真っ二つに両断されて地に転がった剣の刀身。それらまでもがあの曲刀によるものだとすれば、これはもう悪夢の光景でしかない。その神速、その鋭利さ、もはや魔性の技としか思えぬ剣の腕だった。

エルフの左手の槍が、ふいに輪郭を崩し、厚みのない影になって袖口の奥に吸い込まれる。と思いきや、やおら振るわれたその左手から、何かが唸りを上げて飛び、闇の彼方へと消え去った。

絶叫は上から轟いた。胸壁の狭間から侵入者に狙いをつけていた弓兵のものだった。

エルフが左手から投げ放った武器――おそらくはナイフか手裏剣――の仕業だと察しはついても、明らかにそれは異常だった。無数の松明で煌々と照らされた中庭とは裏腹に、周囲の胸壁は闇の中に沈んでいる。遠投の腕前に驚くより以前に、一体どうやって闇の奥を見透かし狙いを定めたのか?

短槍に続いて曲刀もまた消えた。だが空になったはずのエルフの両手には、それぞれ

数枚ずつの手裏剣が収まっていた。左右の腕が立て続けに撓り、風切る唸りが四方へと散る。
今度は五人の弓兵が犠牲になった。彼らは胸壁の挟間に身を隠していながら、わずかに覗かせていた顔や喉に、狙いすましたかのように木の葉型の刃物を突き立てられていた。
あまりの手裏剣の正確さに、胸壁にいた残りの弓兵は、射眼から相手を窺い見ることさえできなくなった。彼らはもはや完全に戦意を喪失していた。
「槍兵、前へッ！」
半ば悲鳴に近い衛兵長の号令を受けて、歩兵槍（パイク）を携えた衛兵たちが包囲の前列に立った。銀髪のエルフを遠巻きに囲んで、一〇本あまりの長槍がぐるりと刃先を揃える。野戦で騎兵を突き落とすための歩兵槍には一〇フィート近い長さがあった。これで一斉に突きかかれば、たとえ数本をあの曲刀で切り落とせたとしても、すべてを防ぎきれるはずがない。今度こそは鉄壁にして必殺の戦術と思えた。
だがそれでも、エルフは笑っていた。いやむしろそれは、無力な獲物の最後の足掻き

を嘲笑うかのような、残忍かつ圧倒的な笑みだった。

エルフの左袖から、新たな武器の影が現れた。曲刀や短槍の影のように〝垂れ下がる〟のではなく、それは袖口から文字通り、とめどなく〝流れ出て〟きた。

足許に蟠った影の塊を、エルフは右手に掴み上げる。実体化したその武器は、前の二つの武器よりもなおいっそう凶々しい形態をしていた。

鎖分銅。

ただのそれならまだ生やさしい得物だが、その鎖にあたる部分はすべて、手裏剣として使われているのと同じ木の葉型の刃物だった。それが数十枚にわたって連結され、一本の索縄を形成しているのだ。そしてその先端に繋がれている分銅は、ただの鉄や鉛などではなく、びっしりと鋭利な牙を植えられた骨——なにか巨大な肉食獣の、下顎の骨だった。

鎖といい分銅といい、鋭利に研がれていない場所はどこにもない。どう触ろうが肉を裂かれるに違いない、およそ正気の沙汰とは思えない設計の武器だった。鎖を掴んでいるエルフの手は、五指の先まで覆う籠手に護られているからいいようなものの、あんな

ものを生身に巻きつけられたら、負傷より先に激痛だけで悶死してしまいそうだ。
〝凶蛟(まがみずち)〟……と、エルフがさも嬉しそうに口にした呟きを、何人かの槍兵が耳にした。
だがその呟きは次の瞬間、轟と逆巻く旋風の唸りにかき消されていた。
ただの遠心力で一回転させただけのはずなのに、鎖分銅の威力は想像を絶していた。分銅にあたる下顎の骨が、有り得ないほどの硬度と鋭利さを備えていたのだろう。周囲に並んでいた槍兵たちは、兜の面頬ごと顔をごっそりと引き毟られ、絶叫とともに仰け反った。さらに続けざまに二転、三転とエルフが鎖を振り回すうちに、屈んで避けるのが間に合わなかった数人の首から上が消し飛んだ。
そこに居合わせた全員が、悪魔が謳うのを聴いた。
吼え猛るように、鳴り響くように、夜の闇を底から揺すり上げる音。それは、血霧を靡かせて旋回する刃の唸りでもなく、激痛にのたうち回る負傷者たちの嘆きでもなく、ただ一人の男の哄笑だった。
銀髪のエルフが笑っていた。頬の裂けんばかりに大口を開けて、呵々と腹の底から笑い狂っていた。



「eia! ia! Gurgaia! evn-shub-ghu Varazaia!」（アイア イア グルガイア イブンシュブグフ バラザイア）

哄笑とともにその口から吐き出される言語は、誰にも理解できなかった。ただその語調と発音の、底なしの奈落のように深い悪意、人知を越えた規模の邪悪さだけは、誰の耳にも明らかだった。

もう衛兵たちは疑わなかった。目の前にいるのは死神以外の何者でもないと。この男はエルフなどではないと。

頭上に振りかざした鎖分銅を猛烈な勢いで回転させながら、銀髪の悪魔が駆け出した。もはや行く手を阻もうなどと思う者がいるはずもなく、衛兵たちは雪崩を打って逃げはじめた。

「zafhla, zafhla ia! Wignia! subun foo wol gashwuhnum!」（ザフラ ザフラ イア ウィグニア サブン フウ ヲウル ガッシュバフナム）

異界の言語で吼え謳いながら、エルフは逃げまどう獲物たちの誰を追うでもなく、ただ真っ直ぐに城門を目指して馳せていた。だが恐慌に陥った衛兵たちは誰一人としてその意図に気付かず、たとえ気付いたところで我が身の心配をする余裕しかなかった。

駆けながら、エルフは血染めの鎖分銅を影に戻して収納し、再び得物を曲刀に持ち替

える。逃げる者には頓着せず、それでも逃げ遅れた者は通りすがりに斬り伏せて、彼は何者に阻まれることもなく城門に到達した。

高さ二〇フィートにも及ぶ堅牢な城門は、鋲打ちされた両開きの門扉を、大の大人の胴ほどもある太さの閂によって封じられている。

エルフは曲刀の柄を両手に握り、大上段に振りかぶると、城門まで駆け寄った勢いを殺すことなく跳躍し、差し渡された閂を目掛けて、裂帛の気合いとともに斬りつけた。

城門の閂ともなれば、丸太一本を相手にするようなものである。破城槌を繰り返し叩きつけて、ようやく折り砕くことが叶うといった代物なのだ。いかに甲冑を刺し貫くほどの利刀といえど、こればかりは笑い話にしかならなかった。裁縫針で薪を割ろうとするのに等しい暴挙であった。

だがその死神の放つ一撃は、さらに質の悪い冗談だった。曲刀の刀身は、まるで素通りするように易々と閂の直径を通過し、エルフが着地したその後で、中央で真っ二つに両断された閂は門扉から転がり落ちた。地に転がったその断面の、鉋をかけたように滑らかな有様を見ても、誰も笑い出す者はいなかった。

曲刀の刃が閂に触れる直前、鬼火のような燐光が刀身を縁取っていたのを見咎めた者がいたなら、その曲刀がただの利刀であるだけでなく、強烈な魔力を帯びたものであると看破したことだろう。

かくして、城は城たる意味を持つ上での最大の要を失い、重い門扉は悲鳴のような軋みを上げて、ゆっくりと城外に開け放たれた。

すでに恐慌に陥っていた衛兵たちは、ここでさらに最悪の予想に打ちのめされた。単身乗り込んできたこのエルフが、城門を開放し、その外に待ちかまえていた仲間の軍勢を招き入れる役を負っていたのだとしたら……

だが、鬨の声とともに攻め入ってくる軍勢を覚悟していた衛兵たちは、ただ一頭、不格好なまでに太った駄馬が、よろめくようにして城門をくぐり抜けてきたのを見て、あまりにも拍子抜けの度が過ぎて呆然と立ち尽くした。

「さて城内の各々方、せっかくのご歓待に感謝の言葉もないが、残念ながら多忙な身ゆえ、所用あってこの場は失礼する」

取り澄ました慇懃な口調で、銀髪のエルフは恭しく衛兵たちに一礼した。

「どうかこれより先は、引き続き我が従僕の〝バイラリン〟と御歓談願いたい。宴はまだ宵の口。踊り疲れて眠るには、まだまだ時もあろうというもの。——では、失礼」

洒脱な挨拶の締めくくりに、ぶちり、と肉の裂ける音が重なった。

目の前で馬が爆ぜ割れる光景に、悲鳴を上げた者がいた。

馬の残骸の中から立ち現れた巨漢と、その手に握られた大鉈のサイズに、力の抜けた声で笑い出した者がいた。

こうして、悪夢の第二幕が始まった。

愚かなる者、賢しき者

夜中とは思えない騒々しい喧噪に、アーウィンは眠りから醒めた。
寝台から身を起こし、夢現の呆けた思考のままで耳を傾ける。騒音は窓の外、城内の中庭からだった。
部屋着のガウンを肩に羽織って、アーウィンは寝台を離れ、窓から外を窺う。衛兵たちが松明を振りかざして大乱闘の真っ直中にあるのを見た途端、眠気は微塵も残らず消し飛んだ。
状況はまるで解らない。ただ飛び交う半狂乱の叫び声の中に、〝エルフがいない〟〝化け物が〟〝なぜ死なない?〟等々、空恐ろしくなるような不気味な語彙が含まれているのは聞き取れた。
アーウィンの背筋に、冷たい汗が滲む。エルフ、だと?
「狙いは、貴方よ」
ふいに背後から声をかけられた。仰天して振り向いたアーウィンは、薄暗い部屋の中

に佇む細い人影に愕然となった。
寝台を立ってから窓辺へ来るまでの間、アーウィンは侵入者の気配に気付きもしなかった。そんな寝惚け半分のアーウィンを、侵入者はずっと冷ややかに見守っていたのだろう。おそらくは、まだアーウィンが目を覚ますよりも以前から。
そもそも、眠る前に閉めたはずの窓の鎧戸が開け放たれていた時点で、異常に気がつくべきだったのだ。
「……アルシア?」
幽霊のように佇む灰色のローブ姿は、いっそ本当に幽霊であってくれればと思わずにはいられない相手だった。
驚きのあまり言葉もないアーウィンを、半エルフの少女は無言のまま、ただ哀しげな眼差しだけで問い詰めるかのように凝視している。
「……そんな所で、何をしている?」
ようやく、そう問うだけの言葉を絞り出せたアーウィンに、アルシアは感情の欠け落ちた平坦な声で返答した。

「確かめに来たの。——この手で、貴方を殺せるかどうか」
アーウィンの視線は、少女の手にした短刀の刃へと吸い寄せられ、しばらくそこから動かせなかった。
もちろん、彼女にはアーウィンを殺すだけの理由がある。そして見ての通り、殺す手段も持ち合わせている。
対するアーウィンは、当然ながら丸腰だった。寝る前に外した剣帯は、いま立っている位置からはあまりに遠い。
絶体絶命の窮地にありながら、それでもただ狼狽するばかりでなく、打算を巡らすだけの思考力も辛うじて維持できていたのは、なるほどアーウィンという男の器であろう。彼を見つめるアルシアの眼に、憎悪よりも哀惜の方が色濃いのを見て取ったアーウィンは、そこに唯一の活路があると即断した。
悲しみからくる怒りは、同じ悲しみに暮れている者には向けられない。
他人の感情を謀ることに長けたアーウィンは、まずそれ以前の基本技術として、自分の感情を謀るすべも心得ていた。だから彼はさほどの苦もなく涙腺を開き、ぼろぼろと

大粒の涙を垂れ流すことができた。
案の定、その反応はあまりにも予想外だったのだろう。アルシアは目に見えて動揺した。
「良かった……」
畳みかけるように、アーウィンはさも激情に掠れた風な声を喉から絞り出す。ついでに脱力した風を装って床に膝をつくのも忘れなかった。
「生きててくれて、本当に良かった……アルシア……ああ、また逢えるなんて……」
泣き崩れる自分へと注がれる視線が、次第に困惑に揺らぎはじめる手応えを、アーウィンは気配だけで察知した。
「アーウィン、貴方は、わたしを――」
「済まない……あの場は、ああするしか他に……なかった……」
必要なのは、自責と悔恨に押し潰されそうな声。それでも喋っている内容だけは明瞭に伝わらなくてはならない。演技の匙加減が難しいところだった。
「ああやって君を差し出すしか……僕は、君から預かった〝樫の護り〟を持っていた。

あれだけは……あれが野盗の手に渡ったら、それこそ最悪の事態になる。どんなに卑怯者と誹られようと、僕は野盗たちの眼を護符から逸らしたままで、あの場から持ち出さなきゃならないと……そう思ったんだ。仕方なかったんだ……」

アルシアが息を呑む気配。咄嗟に思いついた弁明ではあったが、切り口としては新しいはずだ。アーウィンの言い分が予想外のものであれば、アルシアにはそれを検証し、判断する思考の時間が必要になる。そこを衝いて畳みかける。

もう少しだ——そうアーウィンは心の中でほくそ笑んだが、もちろん演技から気を抜いたりはしなかった。

「あの後、すぐさま手勢を集めて君を攫った野盗たちを追ったんだ。でも……間に合わなかった。人生で、これほど自分の不甲斐なさを呪ったことはない」

そろそろ、顔を上げてもいい頃合いだろう。そう思ってアーウィンは泣き濡れた顔でアルシアを見上げた。

混乱。葛藤。少女の複雑な表情は、明らかに心乱されていると見て判る顔だった。そしてその動揺の中に、かつて恋した男を信じたがっている願望があるのを、アーウィン

は抜け目なく見抜いた。
女というのは、どうしてこうも馬鹿なのか……心の底で、アーウィンは本物の憐憫すら懐いていた。
だが、狼が兎を狩るように、賢しい者は愚か者を喰らうことで生き長らえる。そう信じているアーウィンにとって、自分より愚かな者がこの世に多ければ多いほど、それは歓迎すべきことだった。
「あともう一両日、探索を続けて……それでも野盗たちを捕まえられなければ、そのときはもうすべて諦めようと……もちろん、君を救えなかった僕に生き長らえる理由なんてない。いっそ死んでしまおうと……そう思っていた。ああ、神様——御身を何と讃えれば良いのやら……」
アーウィンが、ついさっきまで大鼾をかいて安穏と眠っていたことに思い至れば、こんな台詞は真っ赤な嘘だと見破れて当然だっただろう。
だがアルシアは愚かに過ぎた。恋心などというものを忘れきれないほどに、少女はあまりにも愚かだった。

「アーウィン、あの護符は――」
「もちろん、ここにある」
アーウィンは肌着の胸元をまさぐり、紐に通して首から掛けていた〝樫の護り〟を取り出した。
「誓いを立ててたんだ。これは君に返せる日が来るまで、決して肌身から放さず持ち歩こうと――ようやく、その誓いを果たせる」
アーウィンの差し出した〝樫の護り〟に、アルシアはまるで幻か何かに触ろうとするかのように、おずおずと手を伸ばした。信じられない気持ち、信じたい気持ち、それらの綯い交ぜになった胸中では、余計なことに注意を払う余裕など皆無だった。
アルシアが護符を手に取った。アーウィンは護符から手を放した。そのとき少女の心はついに飽和した。
それが、男の狙いすましていた隙でもあった。
アーウィンは、護符を手渡した腕をそのまま素早く翻し、少女のもう一方の手――いまだ短剣を握り締めていた右手を掴んだ。そしてその短剣の切っ先を、持ち主に柄を握

らせたまま、アルシアの身体へと突き立てた。

「ふっ――」

少女の眼差しは、それでもまだ問いかけるように、途方に暮れたように、我が身に起きたことを理解できていない呆けた驚きの表情のままだった。

事実、解りたくもなかったのだ。少女の心は最後まで、自分が一度ならず二度までも裏切られたという現実を理解することを拒んでいた。

その痛ましいまでの愚かさは、賢しさこそ正義と奉ずるアーウィンにとって、あまりにも度し難く苛立たしかった。今際のきわまで愚劣なままでいようとする少女の心理は、彼の信念に照らすと断じて許せないものだった。

「べつに野盗なんかを使わなくても良かったんだよ」

せめて最後ぐらいは現実というものを直視させてやろうと思い、アーウィンはアルシアの耳元に囁きかけた。

「わざわざあいつらを雇ったのはな、まぁ、ちょっとした興さ。エルフの娘ってのは輪姦されながらどんな声で啼くか、聞いてみようと思ったんだよ」

「……」

アルシアは縋りつくようにしてアーウィンの肩に手をかけ、何かを言おうとした。しかしそれは声にならなかった。

「でもアルシア、ちょっと期待はずれだったなぁ。泣きわめくお前の様は、人間の娘とまるで変わらなかった。中途半端で面白味に欠けたよ。やっぱり半エルフじゃ物足りないみたいだ」

アーウィンの言葉は、間違いなくアルシアの耳に届いているはずだった。少女の心に最後の傷を刻み込んでいるはずだった。

だがアルシアは、虚ろな双眸に理解の色を示すよりも早く、自分から瞼を閉ざした。もうこれ以上、この残酷な世界を見ていたくない、とでも言いたげに。

床にくずおれたアルシアの手から、再び〝樫の護符〟を奪い取って懐に収めると、アーウィンは手早く身支度を整えた。中庭からはまだ乱闘の喧噪が聞こえてくる。気にならないわけがなかった。

足早に私室から出ていくアーウィンは、最後まで、床に転がった少女の骸には一瞥も

くれなかった。

× × ×

一人取り残されたアルシアは、しかし、そう長く捨て置かれることはなかった。アーウィンが退室した後、それきり部屋の主が引き返してこないことを確認するだけの間を置いてから、開け放たれた窓の外から新たな侵入者が滑り込んできた。

ラゼィルである。アーウィンはもちろんアルシアも気付いていなかったが、彼は二人の問答の途中から窓の外のテラスに潜み、ずっと事の成り行きを見守っていた。

床に倒れたアルシアの傍らに屈み込み、短剣に刺された傷を検めると、ラゼィルは眉ひとつ動かさず的確な手つきで傷口に処置を施した。

「これで良し。――さぁ、目を開けろ」

呼びかけられて、アルシアが固く閉ざしていた瞼をうっすらと開く。すでに自分が死んだものと思っていたアルシアは、しばらくラゼィルの顔に見入るまで、状況が呑み込

めずにいた。

「で、首尾はどうだ？」

僕（しもべ）の様子に頓着なくそう質すラゼィルに、アルシアは心ここにあらずといった虚ろな表情のまま、懐から紫水晶と樫の苗木で編まれたペンダントを取り出した。

〝樫の護り〟――それもアーウィンが持ち去ったものと寸分違わない。実は今アルシアの手元にある方こそが本物である。

そもそも始めにラゼィルがニブニール酋長に提案した奪回作戦とは、メラネイド伯爵城に忍び込んで〝樫の護り〟を探し出した後、それを密かに偽物とすり替える、というものだった。人族の手元に偽の護符を残して、本物を回収したことを気取られずにおけば、これ以上事を荒立てることもなく、谺谷のエルフは今後とも適当に人族をあしらっておけば済む。理想的とも言える計略にニブニール酋長は一も二もなく同意し、すぐさま〝樫の護り〟を精巧に模倣した偽物を用意した。城に来るまでラゼィルが預かり、中庭でアルシアと別れ際に彼女に託したのも、この偽物の護符である。

アルシアは、あらかじめラゼィルに言い含められていた通りに、まず寝ているアーウ

ィンの懐から護符を取り出し、それを偽物と交換した。アーウィンが目を覚ましてから後生大事に持っていたのは、すでに偽物だったのだ。

ただ彼女が理解に苦しんだのは、護符をすり替えた後でならアーウィンを殺しても構わない、というラゼィルの言葉だった。そこまでやったら、護符を狙ったエルフの仕業と勘繰られるのは間違いない。何のためにわざわざ偽の護符まで用意したのかが解らなくなる。

このときアルシアは、まさかラゼィルが彼女と別れた後に、素顔を晒して大立ち回りを演じていようとは知る由もなく、あくまで主（あるじ）は侵入者がエルフであることを秘めておく方針でいるものとばかり思っていた。だからアーウィンの枕元に立ちながらも、その心臓に短剣を突き立てることもなく、彼の無防備な寝顔を見つめながら葛藤に苛まれ続けていたのである。

そんな彼女でも、アーウィンが首に提げた護符を何の躊躇もなく差し出そうとしたときには、ついに心の隙を作ってしまった。彼は、すでに護符が偽物だとは知りもせず、本当に真心から護符を返却しようとしているのだと、そう信じたいと思う心の動きに——

—すべてが間違いだったと、そう思いたい誘惑に——とうとう屈してしまった。
その結果が、これだ。
短剣の刃に抉られたとおぼしき辺りに、アルシアは手を触れた。確か、真正面から身体のどこかを刺された筈だったが……傷痕らしいものは何処にもない。おそらくは魔術的な治癒。施したとすればラゼィル以外にない。またしても、アルシアは彼に命を救われたのだ。
なぜか、刺された痛みの記憶さえもが、どこか自分とは隔たった遠いもののように思える。その後から心に突き刺さった言葉の痛みに較べれば、むしろ取るに足らない程度のものだった。
「私には……殺せませんでした」
項垂れたまま、アルシアはラゼィルに告白した。そう告げることで、呵責ない行いが信条であるらしいこの主（あるじ）の寵愛を失いかねないと解ってはいたものの——裏切った男を憎み抜くことさえできない、そんな惨めな自分は、捨てられても当然だと思った。
だがラゼィルは、いつぞや馬車の中でしたのと同じように、ふたたびアルシアの顎に

指を当て、上向かせた顔を正面から覗き込んだ。その手つきも、眼差しも、限りなく優しく——そして残酷だった。

「またひとつ、絶望を知ったな？　その眼で深淵を覗き込んだな？」

手ずから愛で育てた薔薇の花に、うっとりと語りかける園芸人。ラゼィルの面持ちを喩えるのなら、それがいちばん近かった。

「お前の心は、また一段と虚ろになった。——いいぞ。ますます私好みの眼になってきた」

アルシアは安らいだ心地で眼を閉ざし、力の抜けた身体をラゼィルの腕に預けた。

白貌

衛兵詰め所の裏にある厩舎の中に、ロスファンは傷を負った仲間ひとりを連れて身を潜めていた。

馬たちはみな怯えて騒ぎ立てているが、それは外の戦闘の気配を察してであって、ロスファンたちに対してではない。エルフ族には野生の動物と心を通じさせる能力がある。この厩舎にいる馬たちは人間慣れしすぎていて、細かい意志疎通まではできなかったが、それでもロスファンは彼らに、自分には何の害意もなく、決して脅威にはならないということを納得させていた。

依然、外では地獄のような殺戮が続いている。どこからともなく響く断末魔の悲鳴を聞き咎めるたびに、森のエルフはやり場のない怒りと悔恨に顔を歪めた。

こんな筈ではなかった。あまりにも話が違う。

当初ラゼィルが提案していた段取りの総てを、他ならぬラゼィル自身がすべて御破算にしてしまった。そもそも〝樫の護り〟を奪還しようという意図さえ、はたして本心だ

ったのかどうか。今となってはそれさえも疑わしい。
あの男が城に侵入してから始めたことは、ただの殺戮だ。そこに目的があるのかどうかさえ定かでない、血に飢えた獣のような蛮行だ。とても正気の沙汰とは思えない。
胸壁から事の成り行きを見守っていたエルフたちは、ラゼィルが言語道断の流血を繰り広げるに至って、とうとう無法の根無し草と決別することにした。もはや護符の回収どころではなく、この場に留まるだけでも身の危険があった。
だが、悲劇の幕開けはむしろそこからだった。
ラゼィルの用意した穏形のマントの効果は、エルフたちも城に侵入する際に体験して知っていた。当然、城から脱出する際にも、そのマントは同様に役立つものとばかり思っていた。
だが二枚目のマントの梱包を解き、身に纏って物陰から出た途端——先頭を行く仲間が、矢で射られた。
あそこだ。
エルフどもがまだいるぞ。

衛兵たちの蛮声に、ロスファンたちは震え上がった。どういうわけか知らないが、彼らの姿は城の衛兵たちから丸見えになっていた。

逃げる前に、矢の刺さった一人を助け起こしていたせいで、ロスファンは残る二人の仲間ともはぐれてしまった。彼らは無事に逃げ延びたものと期待したいが、それは虫の良すぎる願望かもしれない。

胸を矢で射られた仲間は、今もロスファンの腕の中で、荒い呼吸で苦痛に抗っていた。可能な限りの応急処置と、この場で出来る範囲の治癒魔術を施したものの……この有様では、ただ徒(いたずら)に苦痛を長引かせただけかもしれない。

またどこかで誰かが悲鳴を上げた。あの馬の腹を割いて出てきた大男が、今も暴れ狂っているのだろう。

ラゼィルという、あの男……あれはただの〝根無し〟というだけではない。

いくら生き方を誤ったからといって、笑いながら生命を奪うエルフなどがいるわけがない。衛兵たちの返り血を浴びながら、狂ったように吠え立てていたあの言葉——人族の共通語でも、ましてエルフ語ですらもなかった。あの奇怪な言語は何なのか？

あんな男を信用したのが、そもそもの間違いだった。

奴のせいで今、一人の仲間が死に瀕し、そしてロスファン自身もまた絶体絶命の窮地にある。悔やんでも悔やみきれなかった。ロスファンが短剣を抜いて抗するべきだったのは人間たちではなく、あの狂った根無し草の方だった。

「――ああ、こんな所にいたか」

厩舎の入り口から涼しげな声を浴びせられ、その声の主を理解したロスファンは、怒りに目を血走らせて振り向いた。

ラゼィルは、ロスファンたちに配ったのと同じ穏形のマントを羽織って、悠々と厩舎に入ってきた。肩には連れて行ったはずのアルシアを担いでいる。半エルフの少女は気絶でもしているのか、ぐったりと脱力して身動きもしなかった。

「貴様……何を企んでいた⁉　これは一体どういう真似だ⁉」

「どういう真似、と言われてもなぁ」

ロスファンの剣幕に、まるで身に覚えがないとでも言いたげに肩を竦めて、ラゼィルは苦笑した。

「ちゃんと計画通り、事を済ませてきただけさ。――ほら」
そう嘯いてラゼィルが懐から取り出したのは、たしかに〝樫の護り〟のペンダント……人間には無理でも、エルフの眼力であれば真贋の見分けはつく。たしかに彼は約定通り、本物の護符を取り戻してきた。
だが結果がどうあれ、それでこの惨憺たる状況の言い訳が立つわけではない。
「この出鱈目な騒ぎは何だ？　ここまでする必要があったのか⁉　それにこのマント、二枚目はまるで効き目がないじゃないか！」
「おや？　おかしいな」
立て続けに糾されても、ラゼィルは何処吹く風とばかりに澄まし顔である。
「私のはちゃんと術が効いている。はて……さては君らのマントだけ紋様を描き間違えたかな？」
「貴様……」
眦を決して立ち上がろうとしたロスファンの目の前に、そのとき、いきなり厩舎の壁をぶち抜いて赤黒い塊が飛び込んできた。

「なッ⁉」

馬たちが嘶き騒ぐ中で、その赤黒いものの正体を見て取ったロスファンが絶句する。

人間、だった。重い斬撃で胸から腹までをぱっくりと引き裂かれ、血にまみれた有様はもはや肉塊と呼んだ方が相応しい。無惨な傷を負ったその衛兵は、不幸にもまだ息があった。即死していれば味わわずに済んだ激痛に弱々しく呻いていた。

さらにそこへ、壁に穿たれた開口部をメキメキと破り拡げて、鮮血したたる大鉈を携えた巨漢が押し入ってきた。

この大男が城内に登場したときの怪異きわまる情景、手にした大鉈で衛兵たちを薙ぎ倒す暴虐ぶりを、すでにロスファンは胸壁の上から遠目に見て知っていた。だが間近に見るその姿は、今夜彼が眼にした惨事の数々でさえ比較にならない程おぞましく、忌まわしく、エルフの精神を根底から凍りつかせた。

隆々たる筋肉を覆う肌は一様に黒ずんでいるが、よく見れば場所により色はまちまちだった。それらの肌の色を区分けするのは、巨漢の全身を縦横無尽に覆い尽くす手術痕……縫合の跡だった。剥き出しの腕に、腿に、そして——首に。

男の肉体は一人ぶんではなかった。それはバラバラの人体を縫い合わせて繋げたものだった。

さらになお端的にその巨漢の正体を示すものが、彼の体表には無数にあった。いたる所に無数に突き刺さった矢。腹を抉ったまま折れた剣の刀身。突き刺さったままに背中からぶら下がっている、くの字に曲がった矛槍……

その巨漢は、明らかに死んでいた。その全身を覆う損壊の数々は、数度以上も即死に至るだけのものだった。

〝ハァァァァ……〟

地獄から吹き上げるような熱気を伴って、死んでいるはずの大男は吐気を放った。死魚のように濁った、それでいて熾火のように燃える双眸は、はっきりと焦点を定めて、馬草の中に転がっている瀕死の衛兵を見据えていた。

「――何だ――こいつは――」

いま自分が眼にしているものが信じられず、ロスファンは呆然と呻いた。

巨漢が大鉈を振り上げた。厩舎の天井まで届かんばかりの、幾重にも重ねて返り血に

濡れたその鉄塊は、断末魔の衛兵の脳天へと容赦なく振り下ろされた。
　血飛沫を浴びて、今や半狂乱になった馬たちが泡を吹いて暴れ狂う。ロスファンも、できれば同じように叫び出したい気分だった。だが喉から出たのは掠れた呟きだけだった。
「こいつは……」
「どうだ？　美しいだろう。私の自慢の〝バイラリン〟は」
　ロスファンの呆けようを賛辞とでも受け取ったのか、従者を紹介するラゼィルの表情はあくまで誇らしげだった。
「素材のひとつひとつまで厳選して組み上げた自信作だ。今のところ、私の最高傑作かな」
　大鉈を握る右手の拳の、異常に角張った節々を見て、今更のようにロスファンは、それが人間ではなく鬼族（オーガ）の腕だと気がついた。
　そう、間違いなくこの巨漢は生きてはいない。繋ぎ合わされた死体なのだ。
「馬鹿な……貴様、まさか……こいつは亡者（アンデッド）じゃないか！」

ロスファンは悲鳴に近い声で吐き捨てた。地母神を奉じ生命を尊ぶエルフ族の一員として、彼はこれよりも忌むべき存在を知らなかった。

「待てよ、それは侮辱だぞ」

これまでどんな言葉で詰られようと冷笑ばかりを返してきたラゼィルだったが、なぜかロスファンのその言葉は由々しいものだったらしい。彼は急に憮然となって森のエルフを睨みつけた。

「私を死霊使い（ネクロマンサー）なんぞと一緒にするのか？　このバイラリンが腐りかけのゾンビだとでも？　失敬な。実に不愉快な誤解だ。認識を改めてもらおう」

生なき巨漢は新たな犠牲者を求め、また厩舎の外へと出ていくところだった。ラゼィルは腰をかがめてロスファンの襟首を掴み、怪物の後ろ姿を指さした。

「バイラリンの肉体を駆るのは霊魂ではない。精神の二大要素たる〝魂〟と〝魄〟のうち、肉体に刻み込まれた〝魄〟だけを残した、純然たる生体機械だ。生前の思考力はそのまま、だが自我、欲望、感情はすべて剥落している」

いつになく真摯な情熱を込めて、ラゼィルは謳い上げるように朗々と長弁舌をまくし

立てた。

「故にあれは亡者の如く餓えもせず、祟りもせず、妄執に囚われることもない。ただ従順に私の意のままに動く、通実なる使い魔なのだ。なぁ素晴らしいだろう？」

　襟首を掴まれて揺さぶられながらも、ロスファンは、しかし相手の説明など聞いてはいなかった。恐怖に見開かれたエルフの眼差しは、ただ、大鉈を手に暴れ狂う死者の姿に釘付けになっていた。

「私が充填した魔力によって動くのだから、概念としては木偶（ゴーレム）に近い。ただ素体に死体を使うことで、肉体の神経網という素晴らしい機能をそのまま活用できる点が、我が奥義、〝骸繰り（コープスハンドラー）〟の要なのだよ。どうだエルフ？　この芸術が理解できるか⁉」

　このとき、ずっとロスファンが抱きかかえていた矢傷を負った仲間の身体が、ひときわ痙攣して硬直し――そしてぐったりと脱力した。ロスファンは呆然と、自分の両手を染める仲間の鮮血に見入り、そしてようやく我に返った。

　目の前にはラゼィルの笑顔がある。自らが生み出したというおぞましい怪物を、まるで秘蔵の駿馬の如くに自慢する、得意絶頂の笑顔がある。

嬉々として剣を執り、殺戮に謳うエルフ。死者を冒涜し辱めるエルフ。決して居るはずのないエルフ。
遅蒔きながらも、ロスファンは確信した。この男はエルフなどではない。
「貴様ァ‼」
激情に駆られるままに、ロスファンは相手に掴みかかった。その笑み崩れた顔面に手が届き、顎を掴んだその刹那に、ラゼィルの力強い腕がロスファンを突き飛ばして馬草の中に転倒させた。
すぐさまロスファンは起き上がって身構え――そして、己の掌を見て呆気にとられた。白い。
仲間の血で赤く染まっていた手に、今度は生乾きの漆喰のような真っ白いものが付着している。
「エルフの遺灰と骨粉を練って造った白粉だよ」
ラゼィルが、顔の下半分……たった今ロスファンに掴まれた辺りを手で覆い隠しながら、うっそりと呟いた。

「水や油で落ちることはないが、エルフの生き血にだけは弱くてね……そうやって、すぐに剥がれてしまう。やれやれ、せっかくの化粧を台無しにしてくれたな」

そして、根無し草のエルフを騙っていた男は、ロスファンの見守る目の前で、顔を覆っていた手を除けた。

白くエルフの肌色に塗り込められていた貌（かお）の、頬の辺りだけに穴が空いていた。――否、空洞と見紛うばかりの黒い色。闇そのものが染み入ったかの如き、漆黒の肌がそこにあった。

「ダ……」

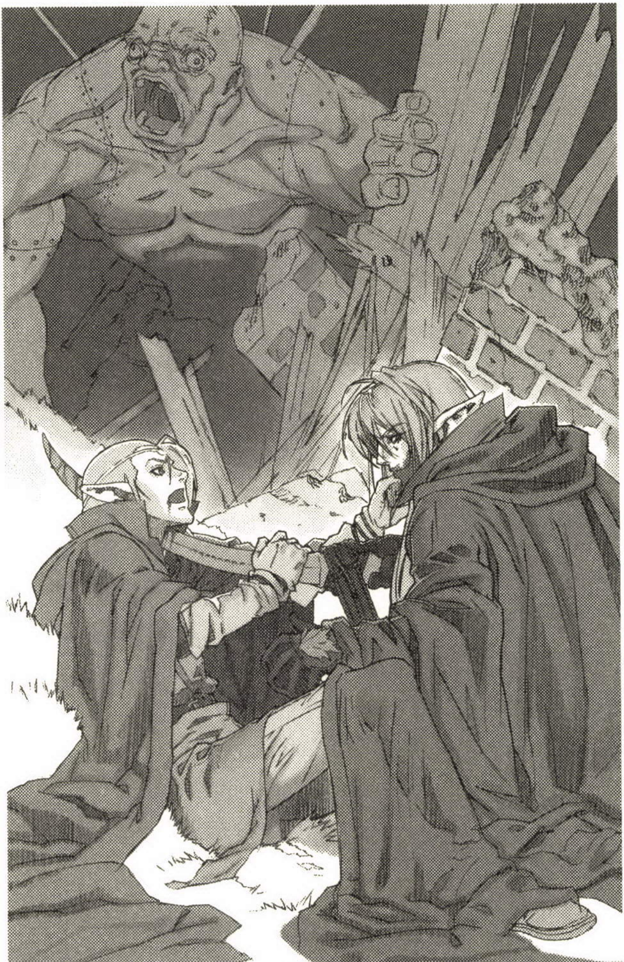
ロスファンは硬直した。魂の奥底から、憎悪と忌避と恐怖を込めて、いま目の当たりにした存在の名を悲鳴に重ねて口にした。

「ダークエルフが⁉　闇の落とし子が⁉　そんな……」

絶叫は最後まで続かなかった。その前に、忽然と宙に躍り出た〝凍月（いてづき）〟の切っ先が、ロスファンの喉を刺し貫いていた。

「本当は君だけでなく、連れてきた全員をこの手で殺りたかったんだがね。地上世界の

兄弟諸君」
もはや種族として生来備わった邪悪さを包み隠すこともなく、黒いエルフは嗜虐の笑みで囁いた。
「しかし、それでは次の宴の仕込みにならない。悔やまれるが、残りの始末は人間どもに任せるよ」
「……」
喉を刺されたロスファンには、当然、声など出なかった。それでも彼は最後の意志で、エルフ族の仇敵たる地下世界からの侵略者に、精一杯の憎悪の視線を向けた。
だがその視線を受け止めたのは、ラゼィルの双眸ではなく、曲刀を握る手に嵌められた腕輪の宝玉――深緑色の猫目石だった。縦に割れた白い線条が、まるで生あるもののようにひくつき、瞬く。
違う。猫目石なんかじゃない。――断末魔の最後の思考で、ロスファンは理解した。
あれは、眼だ。本当に生きている眼球だ。
「偉大なるグルガイアに奉る、人族の供物は数重ねれど、エルフの生贄は一人きり。―



——おお飢えし混沌の君よ、どうか今宵のところは御容赦を」

陶然とそう祈りの文言を嘯くと、ダークエルフは曲刀の刀身を捻り、横に薙ぎ払った。

刎ね跳ばされたロスファンの頸は、厩舎の外にまで転がっていった。

黒き刺客

ダークエルフ族――

その炭のように黒い肌の色だけを別にすれば、容姿は森に住まうエルフ族と酷似している。元を質せばエルフとは類縁関係にある種族でありながら、遠い神話の時代に袂を分かちて以来、両種族は互いを不倶戴天の敵と見なして憎み合っている。

エルフ族のみならず、人族やドワーフ族にとってもダークエルフは畏怖と嫌悪の対象である。混沌の諸神を崇め、あらゆる破壊と殺戮を神への貢ぎ物として奨励するダークエルフ族は、地表にて生きとし生ける者すべての天敵なのだ。

遙かな太古、〝法〟と〝混沌〟の勢力が地上の覇権を争って激突した最終戦争において、混沌の使徒たるダークエルフ族は、善なる種族の連合を前にして敗退し、地下世界の深い闇の中へと放逐された。だが生来より、その漆黒の肌に由縁する闇の呪力を得手としてきたダークエルフ族にとっては、むしろ暗黒の地下世界こそが約束の地であったのかもしれない。光射さぬ深淵の渓谷や、大地の蠕動によって穿たれた広大な空洞を新

たなる領土として、彼ら闇の妖精たちは壮麗なる都市国家を築き上げ、邪神を奉じ、ついには独自の魔術大系を発展させて糜爛した繁栄を謳歌するまでに至った。
その肌の色が真逆であるように、ダークエルフ族の精神性はあらゆる点でエルフ族と対極にある。調和と均衡を尊び、慈愛と協調を旨とする森の民とは対照的に、闇の落とし子たちは、飽くなき闘争と欲望の探求を悦びとし、他を威圧すること、簒奪者たることを最大の美徳として讃え上げる。
厳格な身分制度と専制的な恐怖政治に統べられた深淵の都は、いついかなるときも闘争の舞台だ。より強き者、より狡猾なる者だけが頂点へと登りつめ、その悪辣さに対する畏怖の念でもって配下の者たちの忠誠を勝ち取る。徹底した実力主義は権力の座を流動的にし、貴族たちの集う宮廷はつねに陰謀と裏切りの坩堝と化している。
エルフ族と並び劣らぬ高い知能を備えた彼らが、飽くことなく繰り広げる熾烈な権力闘争は、緻密かつ厳格なチェスゲームにも喩えられる。その勝利の報償は地位と栄華。そしてその敗北の代価は死に他ならない。
そんな彼らの慢性的な政情不安は、図らずも地上世界にひとときの安寧をもたらした。

太古の大戦よりこのかた、闇の眷属たちが大規模な軍勢を動員して〝法〟の勢力に挑みかかってきたことはない。歴代のダークエルフの指導者たちは、油断ならざる政敵たちへの対処に汲々となるあまり、地上世界への報復を二の次とせざるを得ないというのが実状なのだ。

時として、彼らの宗教祭事である集団殺戮のために、人族の孤立した村落やエルフの隠れ里が襲撃を受けることもあるにはあるが、そういった小規模で散発的な遠征の他には、彼ら黒い肌の妖精たちが地表世界に姿を見せることは皆無といっていい。

それ故、太古の大戦を知らぬ定命の種族たちは、おどろおどろしい御伽噺の中でしかダークエルフ族の脅威を知らない。彼らは幽鬼や怨霊と同じ、実体のない伝説上の悪夢と同等であり、ときにはその実在を疑う者すらいる始末である。

それでも彼らは、確かに居る。陽光の降りそそぐ大地ばかりが世界ではない。暗黒の地底に隠遁した邪悪の眷属たちは、今もなお着々と力を蓄えながら、憎き地表世界への復讐の機会を眈々と狙い続けているのである。

×　×　×

さんざめく雨音の律べに、アルシアは目を覚ました。
幌馬車の中だった。雨はいつの間に降り出したのか、絶え間なく幌を叩き震わすしめやかな音が、暗い荷台の中を満たしている。
すぐ隣には、座したラゼィルの背中があった。闇の中で手明かりもなく何をしているのか、背中越しには判らないが、どうやら顔に何か塗っているように見える。
「……お怪我でも？」
おずおずと声をかけると、彼は振り向きもせずに、
「いいや。ただの化粧直しさ」
そう謎めいた返事を返した。
いつの間にメラネイド伯爵の城を脱したのか判らないが、ここまで無事に逃げ戻ってこられたのなら、計画は成功を収めたのだろう。
「他の人たちは？」

「みな死んだ。逃げ延びたのは我々だけだ」
「……」
無惨な話だ、とは思った。だが不思議と悲しみはなかった。
たしかにロスファンや、谺谷のエルフたちが好きだったわけではない。いつも差別され、蔑まれ、厄介者扱いされてきた。それでも捨て子のアルシアに衣食住を分け与えてくれた彼らは、決して憎んではならない人達だった。
だから、彼らの死は悼むべきだった。そもそもアルシアが〝樫の護り〟を里から持ち出したりしなければ、死ぬ謂われなどなかった者たちなのだ。自責に苛まれて当然だった。
なのに——なぜ自分の心は冷たく麻痺したまま、動かないのだろうか？
「わたし……自分が解りません」
誰に話しかけるというわけでもなく、ただ、このまま黙って考え込んでいるのが空恐ろしくなって、アルシアは呟いた。
「まるで自分が、別人みたいです。目の前で起こっていることや、感じていることが、

まるで他人事みたいで……こんなの、変です」
「今のお前は、昔とは違う」
ラゼィルのそっけない返答は、だがアルシアの漫ろな独白をきちんと受け止めた上でのものだった。
「以前のままではいられないだけの体験をしたのだから、当然だ。——怖いか？　自分が変わっていくのは」
「……」
自分の何がどう変わったのかは解らない。だが、変化の形だけは理解できる。
これは、喪失だ。
だんだんと自分から、少しずつ崩れてこぼれ落ちるように、何か大切な物が欠けていきつつある。
主（あるじ）たるラゼィルは、彼女がそうやって〝喪っていく〟のを好ましいものとしている。
そんな彼女が美しいと言う。
人族からは、エルフとして憎まれ——

エルフからは、人間として蔑まれ——

生まれ落ちたこと自体を忌むしかなかった自分に、今、ようやく寄せられた賛辞の言葉。

言祝いでくれる人がいるのなら、それは喜ぶべきことなのかもしれない。

だが、

それでも。

「……怖いです」

漠然と、アルシアには察しがついた。この変化は不可逆だと。

いま変わりゆく自分は、決して、もう昔の自分には戻れないのだと。

「今は、眠れ」

ラゼィルの掌が、アルシアの額から鼻梁までを撫でた。優しく瞼を閉ざすその手に安らぎを感じて、アルシアは言われるがままに、想いを忘却に沈めていく。

× × ×

ラゼィルは暫しの間、アルシアの寝顔を眺めてから、静かに立ち上がり荷馬車から降りた。
幌の外に身を晒した途端、雨音とその飛沫が全身を包み込む。
ラゼィルが馬車を隠していたのは、城下町から遠く離れた、見捨てられて久しい旧時代の刑場だった。放置された絞首台や吊り篭が、冷たい風雨を浴びて恨めしげに揺れている。
雑草でさえも生えるのを忌むかのような不毛の土地に、ただ一本、鬱蒼と枝を茂らせてそびえ立つ楡の大木は、きっと過日の刑罰の数々をすべて見届けてきた生き証人であろう。ねじくれ、葉の落ちた枝が空へと差し伸べられている様は、まるで悶え苦しむ罪人の手のようだった。
激しい雨の中、こんな不気味な場所を夜中に訪れようなどと思う者がいるはずもなく、身を隠すにはうってつけの場所だった。
だが雨の飛沫く闇の向こうを見透かすラゼィルの視力は、周囲に佇む無数の人影を、

あやまたず見て取っていた。
総勢、五人。楡の根本に立ったラゼィルを囲む、水も漏らさぬ包囲の陣。
「思いのほか、早かったな」
馬車の中にいたときから相手の気配に気付いていたラゼィルは、その正体にも察しがついていた。彼にとっては慣れ親しんだ、だが今の彼が闊歩する世界では異質きわまる気配。
全員が、揃いで誂えたかのような漆黒の外套姿。細身ながらも上背のある体躯は、間違いなくエルフ族のそれである。だが——目深に被ったフードの奥に垣間見える口元の肌は、外套と同様、まるで闇そのものの色に染まったかのように黒い。
それは白粉に塗り込めたラゼィルの地肌と、まぎれもない同類だった。
「暗き深淵のアビサリオンより遠路はるばるのお越し、痛み入るよ。御同胞」
〝深淵宮〟アビサリオン。地上世界の御伽噺では地獄の呼称として使われる。地下深くの大空洞にダークエルフたちが築いたその都こそは、ラゼィルを含むすべてのダークエルフの家郷であった。

「さて、今回はいずこの氏族のお歴々かな？　ゼベリエル家か、ギメルヴァーン家か……」
「たわけ。この顔を見忘れたとは言わさぬ」
影たちのうち、他の四人を統率する位置に立っていた一人が、フードを脱ぎ払って素顔を晒した。
露わになった男の風貌――銀の瞳と銀の頭髪を見て、ラゼィルは親しげに微笑する。
「これはこれは、懐かしの我がラファルガー家までもがお出ましとは。……久方ぶりの再会ですな。兄上殿」
「もはや貴様を親族兄弟とは思っておらぬ」
ラゼィルの笑みとは対照的に、その実兄、ラクリアス・ラファルガーの双眸は憎しみを滾らせていた。
ラファルガー家――これまでラゼィルが慎重に秘め隠してきた姓がそれだった。アビサリオンが地獄の異名なら、ラファルガーの名はそこに棲む悪鬼として知れ渡る。
その実態は、アビサリオンを統べる氏族評議会において、最高権限を振るう〃御三家〃

の一家門。だが地表世界におけるその威名は別の形で伝わっている。ダークエルフ族がしばしば〝祭事〟として執り行う地上への強襲行動において、焼き払った人族の村落やエルフの森に、ラファルガー家の部隊は敢えて地上標準語の刻印を残していくのだ。――〝この地に蔓延りし生命の全て、悉くラファルガーの剣によりて、餓えし混沌の喉を潤すもの也〟と。

「ラゼィル・ラファルガー……骸繰りの匠として名を馳せ、屠龍の功でアビサリオンの筆頭祀将にまで登り詰めた貴様が、なぜ今になって我が氏族の威信を地に落とさんとする？」

「何のことやら、とんと身に覚えがありませぬが」

「とぼけるなッ！」

一喝して、ラクリアスはラゼィルの右手を飾る腕輪に、指先を突きつける。

「その右手の腕輪、いまさら隠そうなどとは思うなよ。我らがアビサリオンを守護するグルガイア神像の片目を、抉り出して持ち去った狼藉者……やはり貴様だったか、ラゼィル！」

「神の眼は、我らの都の景色なぞ見飽きておられましょう」
糾弾の言葉に、だがラゼィルは悪びれた風もなく肩を竦めた。
「ならば、より広く。より数多く。贄たる者どもの阿鼻叫喚を御覧に入れることこそ、祀将（ししょう）として神楽の任を負った私の務めと知りました」
「たわけっ！」
ラゼィルの慇懃さに激高し、ラクリアスはますます怒声を張り上げる。
「折りも折り、評議会における当家の位階を、次位氏族の連中が狙っているこの時期に、よくも、かような狼藉を……貴様の所行が露見すれば、我がラファルガー家は破滅だ！」
「そこで、この場で私を亡き者にして、事を闇に葬ろうと？」
哮るラクリアスに対し、ラゼィルはあくまで冷ややかな態度のまま揶揄を挿む。
「やれやれ、その小心ぶり……ラクリアスをしてラファルガー家の程度を量れと言われたら、いっそゼベリエルかギメルヴァーンの方が、評議会の椅子には相応しいように思えてきますな」
あからさまな挑発を受けたラクリアスは、しかし激昂する代わりに眼を細め、さもラ

ゼィルの意中を見通したとでも言わんばかりに、
「まさかラゼィル、貴様、ラファルガーを見限って他家に身を売ったのではあるまいな？　この血迷った狼藉の数々、すべて当家の威信を貶めるための謀か？」
そう、低い声で詰問した。
その言葉によほど辟易したのか、ラゼィルは疲れ切った様子で深い吐息をもらす。
「口を開けば、二言目に出てくるのは〝謀〟というその言葉……やれ氏族間の序列だの、互いの権益の奪い合いだの、相変わらず地底世界は埒もないことに明け暮れているようですな」
「独り地表をさまよう貴様が、それより上等だとでも思っているのか？」
ラクリアスは底意地の悪い侮蔑を込めて、ラゼィルに失笑を返す。
「その見苦しき白い肌は何だ？　我らにとっては漆黒の肌こそが闇の恩寵であり、混沌の使徒たる誇りのはず。それを光の色に染め上げるとは、何たる冒涜！　何たる恥辱！　貴様は出自を偽ってまでこの地上に隠れ住みたいわけか？」
そこまで言われても、依然、ラゼィルは動じない。

「白い顔のダークエルフが地表に一人いるだけで、どれほどの破滅と災厄をこの世界にもたらしてやれるとお思いか？」

そう嘯きながらラゼィルは、一見、森のエルフとしか見えない風貌に、断じてエルフのものではない邪悪な笑みを刻みつける。

「今現在も、仕込みは上々。程なくこの土地のエルフと人間は、血で血を洗う闘争にもつれ込む手筈になっております」

「たわけ。闇の子の白粉化粧など、詭弁で言い繕える醜態ではないわ」

ラゼィルの言葉にはまるで聞く耳を持たず、ラクリアスは腰に佩いていた二刀を左右の手に引き抜いた。

追従する四人のダークエルフも、それぞれに得意の得物を抜き払う。いずれもラゼィル追討のために選りすぐられたラファルガー家の精鋭私兵たちである。

各々が手に構えるのは、鉤、手鎌、多節鞭……みな華美で細緻な装飾が施され、鋭利かつ強靭、そして殺傷力のみならず最大限の苦痛を敵にもたらすべく工夫を凝らした拵えの武器ばかりである。ダークエルフ族の美意識においては、武器と拷問器具は最高の

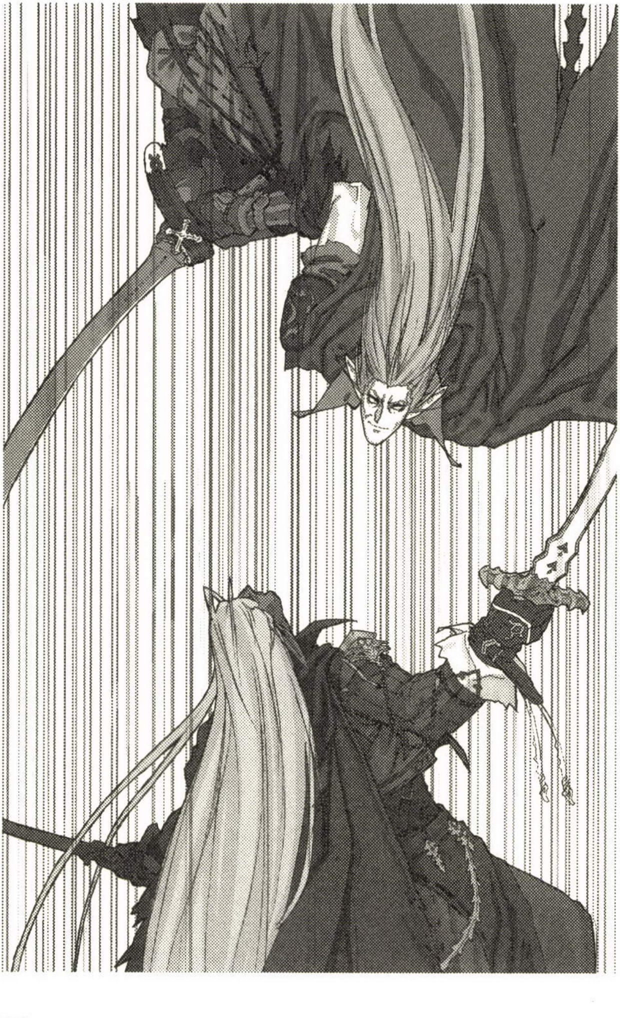
芸術作品であり、それらの鍛造に費やされる職工たちの情熱は、エルフの木彫、ドワーフの金細工にも匹敵する。
「貴様は氏族の掟に背き、戒律を破り、ダークエルフとしての誇りすら見失った」
必殺を期した包囲の陣を、摺り足で徐々に狭めつつ、すでに勝利を確信したラクリアスは、余裕の笑みで宣言した。
「故にその身を切り裂く誅戮の刃、その苦痛もろともすべて、我らが闇に讃えしグルガイアの、神意によるものと心得よ！」
声高らかに宣せられたその言葉を聞いた途端、ここまで泰然たる態度を貫いてきたラゼィルの双眸が、やおら炎と燃え上がった。
「貴様らのような愚昧が、知ったふうに神意を騙るな！」
ラゼィルの喝破の声は重く鋭く、残虐無双のダークエルフたちまでもが、刹那、たじろいで固まるほどだった。
「……地の底に引きこもり、せせこましい権益の奪い合いに明け暮れている者どもに問う」

炯々たる眼光で刺客たちを威圧しながら、ラゼィルは胆力のこもった声で問う。
「貴様らの誉れとは何だ？　勝利とは何だ？　ただ地の底で妄するばかりの栄華の夢か？　同族を策に陥れて掴む権勢か？　たわけ。大たわけ！　なぜその暗い情熱を地表の侵略に向けぬ⁉　地の底で、同じ闇の子ら同士が巡らす権謀術数を、なぜ陽光の世界の蹂躙に費やさぬ⁉」
自らの飛ばした檄に、己自身が煽り立てられているかのように、ラゼィルの説法はとめどなく勢いを増していく。
「かつて地の底に封印された我らダークエルフの始祖に、大いなるグルガイアの宣わった詔（みことのり）は、聖典ウィグニアのただ一節――〝殺し、穢し、焼き尽くすべし。陽光に栄える者共に、闇の怨嗟を知らしむるべし〟とある。だが今のアビサリオンの蒙昧どもは、同族と相争って権力を奪い合うばかり。……貴様らが神に乞う恩寵とは何だ？　自らの栄華を希う（こいねが）ばかりか？　そんなちっぽけな保身と延命が、〝混沌の君〟の加護に値するとでも思っているのか？」
振り上げた右手に影が躍る。次の瞬間、その手が執った〝凍月（いてづき）〟が、湾曲した刀身を

冷ややかに光らせていた。振りかざした切っ先はぴたりとラクリアスに向けられ、ラゼィルの声に威を添える。
「そんな欲得ずくの信心で祭壇を祀る奴原が、神意の代行とは片腹痛いわ！　聖典の文言すら忘れ、ただ己が欲望のためだけに神権に頼る……忘恩の逆徒とは貴様らよ！」
「ほ……ほざけェッ‼」
ラクリアスとて、それ以上言わせておけば氏族の名折れである。弁舌で攻守を覆された以上は、もはや死をもって相手の口を噤ませるしか他にない。
叱咤とともにラゼィルへと斬りかかるラクリアス。その動きに呼応して、配下のダークエルフたちもまた、追いつめた仇敵めがけて突進する。
地が裂けたのは、そのときだった。
不意を討って地中から繰り出された大蛇の一撃は、十人並みの戦士であれば避けることも叶わず餌食になっていたことだろう。だがラクリアスの配下たちも精鋭だけのことはあった。全員、すんでのところで身を退き、かろうじて難を逃れる。そんな彼らでも、地を揺るがして躍り出た巨漢の偉容には、畏怖の念を禁じ得なかった。

追っ手の襲撃に備えて、ラゼィルは秘中の護衛を地面の下に潜ませていたのだ。
操躯兵（そうくへい）バイラリン。〝骸繰り師〟ラゼィルが意のままに操る縫合死体。その桁外れの膂力と、殺そうにも殺しようのない無生物ならではの頑強さは、ダークエルフたちとて熟知していた。邪悪の秘技について知悉する彼らだからこそ、その脅威の程を正しく理解し、警戒するのも当然である。
攻めあぐねて二の足を踏むダークエルフたちの頭上から、居丈高な嘲笑が降りそそぐ。今やラゼィルは、大岩のように聳えるバイラリンの肩の上に立ち、実兄とその配下の刺客たちを高みから眼下に睥睨していた。
「我はグルガイアの瞳とともに往く」
掲げ上げた右腕で、腕輪の宝玉が深緑の光芒を妖しく揺らめかす。
「白く塗り固めたこの顔が、エルフと人間を欺き、謀り、破滅へと導く……一夜のうちに一人でも多く！　そしてやがては一人残らず！」
ダークエルフ族の神楽たる地上侵攻。その儀式的殺戮の采配を一手に引き受ける〝祀（し）将（しょう）〟として畏敬の念を集めていた英雄ラゼィルであればこそ、その言葉は重く、雄々し

く、荘厳に闇の子たちの魂を揺さぶった。
だが、ついさっきまで己が剣にこそ神意ありと宣言していたラクリアスにとって、弟が発揮するカリスマに屈することは、断じてできない相談である。
「痴れ言をッ、痴れ言をぉッ‼」
昇る感情に駆られるがまま、ラクリアスは聳え立つ敵に突進した。
轟、と唸って横薙ぎに振るわれるバイラリンの大鉈。だが既にそれを見切っていたラクリアスは、軽やかに跳躍して大鉈の刃を飛び越え、のみならずバイラリンの腕を足場にして一気にラゼィルの許まで駆け上った。殺戮を技芸として嗜み、芸能の域にまで昇華させたダークエルフの戦士ならではの体術といえた。
ラゼィルもまた怯むことなく、死せる巨漢の肩から跳躍して真上へと逃れる。跳んだ先は楡の大木の横枝だった。すかさず追いすがるラクリアス。両者の戦いは樹上――枝から枝へと跳び渡りながら間合いを計る体術の競い合いになった。
一合、二合……すれ違いざまにラゼィルの曲刀とラクリアスの双刀が交差して燦と鳴る。人族の刀剣であれば木っ端のように叩き折る凍月(いてづき)の刃であったが、ラクリアスの得



物もまたダークエルフの魔力で鍛えられた魔性の剣である。両者は硬度を競い合うように、絡み合うたび火花を散らす。

地上に残ったダークエルフたちは、バイラリンを囲って牽制しつつ、樹上の決闘を見守った。頭目たるラクリアスの手練は彼らの中でも抜きん出ている。ラゼィル共々、達人同士の競い合いともなれば、迂闊に手を出すのは憚られた。

とある大枝で動きを止めたラゼィルに、隙ありと見計らったラクリアスは勝負を仕掛けた。双刀を左右に大きく振りかぶり、次の足場を鑑みることなく大きく跳んで斬りかかる。斬った後に踏む枝はなく、そのまま地表にまで落下する覚悟だったが、そのときには敵もまた両断された骸となって地に落ちる——そう確信できるほどに会心の一撃だった。

はたしてラゼィルは、次のラクリアスの斬撃が容易にあしらえるものではないと即座に見て取った。跳び退いて逃れるには間に合わず、身構えて防御するには相手の勢いがありすぎる。そこでラゼィルはさらに虚を突く行動に出た。迫るラクリアスに向かって自らもまた跳躍し、その懐に飛び込む形で刃の下を潜り抜けようとしたのだ。

すれ違いざまに置き土産とばかり曲刀が振るわれるものと察して、ラクリアスは咄嗟に双刀でラゼィルの右手を封じにかかった。だが案に反してラゼィルの曲刀は切っ先を下げたまま素通りし――

代わりに、硬く冷ややかな感触がラクリアスの胴に巻きついた。

謀られたと、そうラクリアスが気付いたときには遅かった。彼の注意が右手の凍月にばかり向いていた隙に、ラゼィルの左手は影の中から〝凶蛟〟を現出させていた。空中でラクリアスと擦れ違ったラゼィルには、最初から右の斬撃など意図しておらず、逆に左手で凶蛟の鎖を絡ませる狙いだったのだ。

重ねてラゼィルの戦法が悪辣だったのは、あらかじめ凶蛟の一端を足許の枝に巻き付けておいた点である。鎖に絡め取られたラクリアスは地に降り立つこともできず、刃の鎖に絡め取られたまま枝から宙吊りにされてしまった。

落下の加速とラクリアス自身の体重が、凶蛟の鎖を締め上げる。おびただしい数の鋭利な刃が皮鎧を切り裂き、所構わずラクリアスの総身に食い込んだ。

あまりの激痛に呻きを漏らしつつ、ラクリアスは手にした剣で凶蛟を断ち切ろうとす

る。だがラゼィルの鎖分銅は、ラクリアスの自慢の魔剣をまるで受け付けず、逆にもがけばもがくほど深々と獲物の全身を抉る。

「があああああッ⁉」

降り注ぐ雨が、吊られたラクリアスの下でだけ真紅に染まりはじめた。もはや痛みに泣き叫びながら、ラクリアスは遮二無二、両手の剣を振るう。――が、一向に鎖が切れることはない。

「そんななまくらが、私の凶蛟(まがみずち)に通用するとでも？」

無惨に吊るされたラクリアスとは裏腹に、鮮やかに地表に着地を決めていたラゼィルが、頭上でもがき暴れながら血を流し続ける兄を嘲笑する。

「舐められたものだな。そうそう簡単に〝龍の肉体〟を壊せるものと思っていたのなら、それは私の武功に対する侮辱だぞ？」

ラクリアスの抵抗がいかに空しい所行か、それは頭目の敗北を愕然と見守っていたダークエルフたちが心得ていた。

ラゼィル・ラファルガーの〝屠龍の功〟……幼いダークエルフであれば寝物語に聞か

される、闇の種族の英雄譚である。かつてその手で白銀龍（しろがねりゅう）を討ち取ったラゼィルは、解体したその死体を素材にして、〝龍骸装〟と呼ばれる一連の武器を作製した。肋骨を曲刀に。額の長角を短槍の穂に。また無数の鱗はそのまま手裏剣となり、鬣からは籠手と胴着が編み上げられた。

いまラクリアスを捕らえているのもまた、龍の遺骸から造られた武具である。鋼以上の硬度と剃刀同然の鋭さを備えた龍の鱗を、鬣の毛で一条に繋ぎ合わせ、その先端に牙の植わったままの顎骨を繋いだ鎖分銅。これを阻める防具といえば、同じく龍の遺骸を素材とするラゼィルの籠手しかない。

もとよりラゼィルは〝骸繰りの匠〟として、生物の死骸に魔力を充填する術に長けている。その彼が、尋常な武器では破壊し得ない最強生物たる龍の肉体を加工したのだ。完成した武器はいずれも他に類を見ないほど強力な魔導兵器となり、ラゼィルの武功の証として、あまねく闇の世界に知れ渡ることとなった。

ラクリアスの双刀も、名だたる〝凍月（いてづき）〟と打ち合って折れなかっただけでも上等とするべきで、同じ〝龍骸装〟のひとつである〝凶蛟（まがみずち）〟を断ち切るなどとは望むべくもなか

った。

「故郷を遠く離れて、地表の異境に斃れる無念、察しまするぞ。我が兄よ」

もはや悲鳴すらも枯れ果て、宙吊りのまま血を搾り取られ続けて痙攣するばかりになったラクリアスに対し、ラゼィルは優しくいたわりを込めて語りかけた。

「しかし兄上、あなたは祀将たる私の奉神の刃にて死に至ったのだ。その血をもって我らが君の喉を潤すと思えば、痛みさえもが甘美でありましょう？」

呵々と大笑するラゼィルを前に、ダークエルフの刺客たちは完全に戦意が萎えていた。バイラリンの登場に加え、一番の使い手だったラクリアスが、ああも容易く討ち取られた後とあっては、残る四人で数を頼みに攻めかかったところで勝算があるとは思えなかった。

「さて、諸君――どうするかね？」

身動きのとれないダークエルフたちに、ラゼィルが向き直る。その声には何の邪気も害意もなく、まるで道端で行き会った同胞に挨拶でもするかのように、何の作為のない姿勢である。たったいま死闘の末に肉親を殺めた事実など、とうに失念している風だっ

た。

「このラゼィルの首級を獲らない限り、おめおめとアビサリオンに戻るわけにもいかないというのは、まぁ、察しがつかんでもない」

まるで他人事のように嘯きつつ、ラゼィルは何の予備動作もなしに背後へと手裏剣を放った。

四人のうち唯一、まだラゼィルに抗する望みを捨てず、奇襲を狙って背後から忍び寄っていた一人が、この一撃で鮮やかに頸動脈を切り裂かれ、血煙を振り撒いて絶命した。

背後の動きを目に留めぬまま、ただ気配だけで殺気を察したのだとしても、振り向きもせず、狙いもつけずに投げ放った手裏剣ですら一撃のもとに必殺……目の前の英雄の、生きながらに伝説たる由縁を思い知らされた心地で、残ったダークエルフたちの肌は粟立った。

「神職にない諸君らに、私の理想を理解せよ、とは言わぬ。ここで私の手にかかるのがラファルガーへの忠義と思うなら、それも良し。好きにするがいい」

たったいま死んだ一人についてのコメントとも受け取れる言葉だったが、そもそも殺

した当人の言葉としては、あまりにも飄々と気負いがない。
殺されかかるのも殺すのも、泰然と意に介さず……それは生死の達観というよりも、死そのものの具現たる人格ゆえの無感覚であろうか。
この男には、勝てない——
残虐冷酷比類なきダークエルフの戦士たちが、揃って絶望と諦観を受け入れた。もとより技を競い、策を競って張り合うような相手ではないのだ。龍殺しにして骸繰りの匠、暗黒世界にその名も高きラゼィル・ラファルガーは、まさしく死神そのものだった。
その死神が、微笑んだ。
「諸君らもダークエルフなら、〝どう死ぬか〟を思い悩むより、〝どう殺すか〟を工夫する方が性に合っているのではないか？」
含みのある言葉の意味を判じかねて、刺客たちは互いに顔を見合わせる。
「わざわざ地表世界にまで出向いてきたのだ。斬ってみたいだろう？　森のエルフや人間を。その気があるなら、私が段取りをつけんでもないぞ」
地表種族への憎悪、流血の渇望、それらは総てのダークエルフが持ち合わせている願

望だけに、ラゼィルの言葉は当然のように彼らを魅了した。加えて先の熱を込めた説法は、若きダークエルフの戦士たちの心に少なからず響くところがあった。ラファルガー家の嫡子たるラクリアスと違い、権力の中枢から隔たったところに身を置く兵卒に過ぎない彼らとっては、むしろ祀将（ししょう）ラゼィルの説法こそが、より混沌崇拝の本道に近いもののように聞こえた。

だが彼らが心情を絆した最大の要因は、この場で伝説の英雄と刃を交えずとも済むという、その安堵に他ならなかった。ここでラゼィルとの共闘に同意するのは、当然ラファルガー家に対する反逆である。だが隊長であるラクリアスをみすみす戦死させ、その後も臆面なく生き長らえているという点で、すでに宗家に対する不忠を問われるだけの材料は揃っていた。もしラゼィルの誘いを断るにしても、そのときはラゼィルに斬られるか、アビサリオンで処刑されるか、彼らには二つにひとつしか道はなかった。

生き残った三人は、めいめいがほぼ同時に、同じ決断へと辿り着いた。ダークエルフたちは武器を収めると、皆が揃って一斉に、泥にぬかるむ大地へと身を投げ出すようにして平伏した。

「我ら、刃にて神を讃えし者。陽光を滅びの唄にて払う者。我らが神楽たる剣戟の律べは、祀将ラゼィルの導きのままに！」
恭順の意を示した闇の戦士たちを、ラゼィルは、遠い故郷の祭壇に立つのと同じ威厳を身に纏って睥睨した。そして左手首の腕輪を高々と掲げ、厳かに宣言する。
「其の方らの宣誓、グルガイアの眼が見届けた。栄えある闇の子らよ、これよりその手の刃には混沌の君の神威が宿るものと知れ」
「御意に！」
ラゼィルは返答の声にこもった胆力に満足した。そして敬虔なる熱狂に衝かれるがまま、嵐の空を振り仰ぎ　降り注ぐ豪雨に負けじとばかりに声を張り上げる。
「戦士らよ、神を辱めることなかれ！　神を貶めることなかれ！　その言祝がれし刃にて示す意は何ぞ！」
呼びかけに応じて、拝跪したダークエルフたちもまた声の限りに謳い上げる。
「あまねく陽の光の許に絶望を！　草木と風の生命に復讐を！」
呪わしき邪悪の軍勢が、今ここに誕生していた。総勢、わずか四人とはいえ——狂信

の情熱に憑かれたダークエルフの精鋭兵士は、まぎれもなく一騎当千の猛者である。
そして何よりも彼ら自身が、自らを寡兵とは思わなかった。なぜならば彼らは、混沌の申し子たる伝説の英雄、その名も高きラゼィル・ラファルガーと共にあったからだ。

招かれざる客

エルフが住まう隠れ里は、しばしば人族の間では〝幽世〟にあるものと誤解される。
仮にその存在が察せられたところで、近隣の人間が総掛かりで、それこそ寸刻みに、さして広くもない森の中を探し歩いたとしても、エルフの姿はおろか彼らの生活の痕跡さえ見出すことはできない。なるほど人間の理解の範囲では、これはもう〝この世に存在しないもの〟と解釈するしか他にあるまい。
だが実際のところ、これは誤解である。エルフの居住地は森の中に、間尺通りの空間を占めて実在している。ただ、その一帯を取り囲む幻覚の結界があまりに強力すぎて、人族の知覚力では惑わされていることにさえ気付かないのだ。
慎重に方角を計り、真っ直ぐに森を通り抜けた気になっても、実はとある一角を大きく迂回して歩いていたという事実に、探索者は決して気付かない。探る、という行為そのものを幻惑するエルフの幻覚結界は、どんな強固な要害にも勝る鉄壁の護りといえた。
結果、人間は〝森にエルフが居るらしい〟と憶測で推し量ることはできても、エルフ

の側から出向いてこない限り、決して接触を図ることは叶わないのである。
反面、里のエルフが招き入れるものと決めた客人は、いとも容易く結界の内側にまで辿り着く。仰ぎ見た梢の中に、忽然と出現する頭上の集落の景観は、来訪者の目を奪うこと必至であろう。エルフは地表ではなく木の枝の上に家屋を設け、それらを橋や木道で繋ぐことによって往来の便をつける。いわば村そのものが樹上にあるのだ。
建造物——という表現が、エルフの家屋に当てはまるかどうかは難しい。エルフは自らの手で建築を行わない。わざわざ木々を切り刻んで材木を用立てなくても、エルフの輩（ともがら）たる木々の方から、進んでエルフの求め欲する構造物を提供してくれるのだ。
初めてエルフの家屋を目にした者には、それが奇怪な魔術の成果によるものとしか思えまい。天然の枝や蔦、宿り木といった植物が、まるで何かの意図に導かれたかのように自ずと絡み合い、編み合わさって、頑丈な床や、風雨を阻む屋根と壁を形成しているのである。
エルフは木々と共に暮らす上で、斧も鋸も釘も必要としない。屋舎や橋として必要とされる形に変形するよう、樹木に働きかける行為そのものが〝魔術〟であるという見解

あくまで木々の側の〝好意〟によるものだという。

さらにこの谺谷においては、他のエルフの里でも見られない驚異がもうひとつ存在する。里の中央、すなわち森の中心に位置している桁外れの巨木である。

幹の直径は、まず間違いなく五〇フィートを下るまい。ここまでくると巨木というよりも天を支える柱のようですらある。その巨木はただ偉容を誇るばかりでなく、この森の精霊力を司る霊脈の要でもあった。エルフたちの里自体が、この巨木の周囲をぐるりと取り囲んで保護するようにして設けられている。

より間近にまで寄って眺めれば、一本の巨木かと思えたその神樹の幹が、実際には細くねじくれた無数の木々が絡み合った集合体であることに気付くだろう。

だが、夥しい数の細木が群生しているかのように見えても、あくまでそれは一本の木である。正確には、大木の枝から無数に垂れ落ちた気根が、大地にまで届いて支持根となり、それらが元の樹幹を覆い隠すほどに絡まり錯綜して外観を形成しているのだ。桁外れなまでの大木の正体は、見事なまでに老成した巨大な榕樹(ようじゅ)であった。

希に見るほどの見事な神樹を戴いたこの谺谷は、他のエルフの隠れ里と較べても格段に多い五〇〇余りの戸数を擁していた。エルフ族の感覚で言えば、まさしく都市と呼んでも差し支えない規模である。

にも拘わらず、数多のエルフ里の中でも、谺谷はとりわけ排他的な部類に入った。この里は実に百年以上の永きに渡って、外部の者に門戸を開くことがなかったという。それほどまでに固執していた禁忌を破り、このたび招き入れられた客人は、たしかに同じエルフ族でこそあったものの、漂泊の〝根無し草〟という、きわめて歓迎しがたい類の来訪者であった。

とはいえ、里の秘宝を奪還したラゼィルを、谺谷が賓客としてもてなしたのは当然の処遇である。里のエルフたちは、もはやラゼィルの埃じみた旅装に眉を顰めることもなく、手厚い歓待で迎え入れた。その脇に侍るアルシアまでもが、裏切り者として白眼視されることなく、仁義に篤き英雄ラゼィルの従者として同伴を許容されたほどである。

二人は殆ど待たされることもなく、酋長の待つ屋敷へと案内された。

ニブニール酋長の住居は谺谷の中でも最も大規模なもので、三本の木に跨って設けら





れた堂々たる館である。中でも、里じゅうの要人を集めて談判するための大広間には、歴代の酋長の遺品や、数々の歴史的な記念物が恭しく陳列され、また森の中枢でもある大榕樹に隣接する位置にある。

大榕樹に面した広間の一角にはバルコニーが設えられ、幾星霜を経た霊木の威風堂々たる枝振りに、半ば抱かれるような形で空中に張り出している。物見櫓を除けば、里のどの家屋よりも高い位置にあるそのバルコニーからは、谿谷に住まうエルフ族の生活が眼下に一望できた。

まさしくこの里の中核と呼ぶに相応しい、その厳かな空間が、今はラゼィルとアルシアの二人との謁見のためだけに使われていた。

この広間においても、椅子や卓台といった家具を使わないのは他のエルフの家屋と変わらない。酋長も客人も、ともに坐すのは床に敷かれた獣皮の敷物の上である。

「よくぞ――」

感極まって声を詰まらせながら、ニブニール酋長はラゼィルより受け取った〝樫の護り〟の護符を、仔細に検めて眺め入った。

「――よくぞ、取り戻してくださった。ラゼィル殿。これにて我らが谺谷の安寧は守られた」

「されど、失ったものも多すぎました」

畏まって面を伏せたまま、沈鬱な声でラゼィルが応じる。

「この里より参じていただいた四人の同胞を、私は、みすみす敵の手に……」

「それを申されるな。友よ」

悄然と俯くラゼィルの上に、ニブニールは優しく労りを込めて語りかける。

「たしかに犠牲は大きかった。が、彼らの命を代価にしてこの里が得たものを、散り逝った者たちの魂は充分に心得ているはずだ」

功労者の自責の念を、少しでも和らげてやろうと心を尽くすニブニール酋長は、まさか相手が腹の内で笑い転げていようとは知る由もない。

不浄の白粉で塗り固められたダークエルフの面皮の厚さは、まさに畏れ知らずの不遜ぶりだった。彼が演じる偽りの苦衷は、老賢なるエルフ族の酋長までをも、まんまと騙し果せていた。

報告も、もちろん虚偽である。
首尾良く護符を偽物とすり替えたものの、いざ脱出という段になって運悪く隠形の術を見破られ、矢を射掛けられる中を辛くも逃げ延びたのは、結局ラゼィルとアルシアの二人きり——たしかに、その場に居合わせた者でない限りは疑問を差し挟む余地のない説明だった。
後ろに侍っていたアルシアは、ラゼィルが最初に二人の衛兵を殺めたこと、それから陽動のために〝幻術を使って〟城内を騒がせた件が省かれているのに気付いたが、敢えて指摘はしなかった。森住まいのエルフの博愛心に顰蹙を買いたくないという、根無し草なりの配慮と思えば、その程度は致し方ないものと見過ごしていた。——無論、彼女もまた真相を知りはしない。幻術と言っておきながらもその実、ラゼィルとその操躯兵バイラリンが繰り広げた殺戮劇。そしてロスファンの末路。すべてアルシアの目のないところでの出来事だったのだ。
なべて混沌の眷属が脅威と見なされるのは、その悪辣さが善なる種族の想像力をはるかに上回るが故である。

「どうか今宵の宴の席には、ラゼィル殿、貴殿も誇りを胸に抱いて参列していただきたい。貴殿がその功績を栄誉として受け入れるならば、それが死んだ者たちへの一番の手向けになる」

ニブニール酋長の言葉を受けて、ラゼィルはますます深く頭を垂れた。実のところ、そうでもしなければ哄笑を堪えきれなかった。

「そうまで言われては是非もありません。今宵一晩、厚かましくもこの里にて安らぎの温情を賜ります」

そう深々と礼をするラゼィルにあわせて、アルシアもまた床に額がつくまで平伏した。思えば二度と谿谷に踏み入ることを許されない身であったのだが、彼女の身柄を預かるラゼィルが引き留められた以上、今夜一晩は追放前の猶予としての時間が与えられるのだろう。とはいえ確認しようにも、酋長は同席しているアルシアを、その場に居合わせないかのようにずっと無視し続けている。祝福も、ねぎらいの言葉も、すべてラゼィル一人に向けられたものだった。少女はいたたまれない心地のまま、黙して孤独に耐えていた。

そのとき、ニブニール酋長の許へ、傍仕えの者が血相を変えて馳せ参じてきた。

はじめは客前での非礼を詫ろうとしたニブニールも、従者に何事かを耳打ちで告げられた途端、表情を一変させて蒼白になる。

「いかがなさいましたか？」

凶報の内容は、すでにラゼィルには察しがついていたが、それでもダークエルフは偽りの白貌に気遣わしげな表情を繕って問いかけた。

「メラネイド伯爵の軍勢が……この谺谷に攻め込もうとしている」

谺谷を守護するエルフの長たるニブニール酋長は、必要とあれば森の中のどこであろうとも千里眼で覗き見ることができる。

彼はかつて森を訪れたラゼィルの許に虚像を送り込んだのと同じ要領で、今度は騒乱の舞台となっている森の一角の情景を呼び出し、自らの掌の上に投影してラゼィルたちに見せた。

蜃気楼のように透き通って揺らめきながら、それでも明確な像を結んで、遠見の映像

はその光景をつぶさに映し出した。そこに、縦隊を組んで森の外縁に踏み込んできた人族の兵士たちが見出せた。

「何という数だ……」

ざっと見た範囲でも二〇〇名は下るまい。さすがに騎兵の姿こそないが、その武装、隊伍の動き、まぎれもなく進軍の呈である。

もちろん、これはまったくの自殺行為といえた。いかに大軍を率いて挑もうと、害意を持って森に踏み込めば最後、不可視の幻覚を纏ったエルフの弓と、猛り狂う樹妖（トレント）の剛腕が、何者であろうとも悉く殲滅し尽くす。エルフ族が持ち前の呪術を最大限に発揮する森の中において、他種族の侵略者には万に一つの勝算もない。

にも拘わらず、メラネイド伯爵がこのような蛮行に訴え出たのは――

「どうやら、偽の護符を残してきたのが仇になったようですな」

苦々しい口調で、ラゼィルが呟いた。

「いまだ手元にある護符を本物と信じて疑わず、エルフの呪術が我が身に及ばぬものと信じ込んで、勝算ありと決断したのでしょう」

「勝てるからといって、ただそれだけの理由で——攻めるのか？」
震えわななくニブニール酋長の声には、すべての人族に対する怒りと呪詛が込められていた。
「義もなく、理もなく、ただ我らが脅威でなくなったと見ただけで攻め込むのか？　それほどにまで我らが憎いか⁉」
ニブニール酋長はラゼィルの虚言により、〝樫の護り〟奪還の企てによって犠牲になったのは四人のエルフだけだと思い込んでいた。それ故に彼は、メラネイド伯爵の挙兵を、ただ城内に忍び入ったのがエルフだったというだけの理由で戦を仕掛けてきたものと判ずるしかなく、なるほど人族の領主を非情の暴君と思い込むのも無理からぬことだった。
事実、伯爵の軍勢の戦支度は、エルフ族の心情を殊更に逆撫でするものだった。
歩兵たちはみな皮鎧を主体とする軽装。揃いも揃って剣ではなく斧や鉈で武装し、全員が片手に燃えさかる松明を携えている。さらに五人に一人は武装でなく、明らかに中身の詰まった重そうな樽を背に担いでいた。中身は——おそらく油であろう。

もはや敵の作戦は推し量るまでもなかった。総軍が揃って焼き討ちの準備を固めていた。

剣と弓矢を交えるのでなく、ただ森を刈り、焼き払う——人族の軍勢は、たしかにエルフと対決する戦術を心得ていた。その悪辣さはオークと比しても劣るものではないと言えた。

「私の愚策が、期せずして彼らに道を誤らせる結果になってしまいました……」

そう落胆の声で呟くラゼィルに対し、ニブニール酋長は決然とかぶりを振る。

「ラゼィル殿、貴殿には何の落ち度もない。貴殿が人族の手元に残してきた偽の護符は、ただ単に彼奴らの性根を露わにさせただけのこと。もし護符の助けがなかったとしても、遅かれ早かれ、いつかはああして滅びの炎を手に攻め寄せてきたであろう。それが人間という種族なのだ！」

ラゼィルは頷いた。表向きには悄然と、内心では〝我が意を得たり〟と。

ダークエルフのラゼィルは、ただ肌が黒いというだけで、容姿の上では同じ妖精族であるエルフに近い。だが闇の眷属たる彼の目から見れば、決して相容れないエルフ族に

較べて、人間という種族には多くの美点や見所があった。
ダークエルフには及ばずとも、人族の思想や行いもまた、多くの点で〝餓えし混沌〟の興を買うに足るものである。そんな人間たちが、いったい何の間違いで地表世界に居を定めたのか、ラゼィルには返す返すも惜しまれた。もし彼らが闇の眷属に加わっていたならば、低脳なオークやゴブリンたちよりも、ずっと優秀な奉仕種族としてダークエルフの繁栄を手伝ったことだろう。
これまで地表世界を旅する中で、ラゼィルは幾多もの災厄と破滅の種を蒔いてきた。それらが枝葉を茂らせ実を結ぶまでに、様々な権謀術数を巡らせて、地上に割拠する異種族たちを謀り、惑わし、扇動してきた。
だが最後に〝滅びの実〟の収穫に至る、その切り札は、いつでも人族が鍵になる。彼らの強欲、虚栄、憎悪と嫉妬――それはダークエルフのラゼィルがもっとも与しやすい、熟知した情動だった。
今回もまた、彼の目論見通り……伯爵の孫に偽の護符を握らせるよう画策したのは、人間たちがその〝切り札〟の威に酔って愚挙に出るものと見越したからだ。はたして予

想は的中した。

もちろん、護符はあくまで偽物でなければならなかった。彼の奉ずるグルガイアは人族の血も好む。人間たちがただ一方的にエルフの里を攻め滅ぼしたのでは片手落ちというものだ。

この谺谷の森が灰燼に帰すさまは、より凄惨な地獄でなければならない。人間とエルフ、どちらが勝者であってもならない。彼らはことごとく、恐怖と絶望の嘆きとともに潰えていかなければならないのだ。それが〝餓えし混沌の君〟に捧げる神楽というものである。

いつになく素晴らしい〝祭典〟の予感に、孤高の祀将ラゼィル・ラファルガーは打ち震えた。それは神への信仰に身を捧げた者だけが味わう、魂の歓喜と法悦だった。

準備は、すべて整った。

共栄の末路

メラネイド伯爵城内を颶風のように蹂躙した殺戮者が、現れたのと同様に忽然と姿を消した後、誰よりも早く恐懼から立ち直ったのはアーウィン・メラネイドだった。

それというのも、何も知らない兵たちとは違って、彼は襲撃者たるエルフの一団の標的が何なのかを知っていた。そして、彼らがついにその目的を果たしおおせなかったことも。

〝樫の護り〟を狙ってアーウィンの寝所にまで迫ったアルシアは、アーウィン自身の手によって返り討ちに遭い、谺谷攻略の要とも言える魔法の護符は、無事にアーウィンの手元に残った。

多大な犠牲を払ったとはいえ、防衛戦は伯爵方の勝利に終わったのだ。敵は目当ての宝物をついに手にすることなく、城内から退いたのだから。

唯一の気がかりといえば……アーウィンがその手で仕留めたはずのアルシアの遺体が、何処へともなく消え失せていたことだった。考え難いことではあったが、もし万が一ア

ルシアが一命を取り留めて城中から脱出したのだとしたら、いささか厄介なことになる。アーウィンが〝樫の護り〟を手に入れるに至った顛末の、生き証人とも言える少女。その口を封じることが出来なかったとなれば――あとは、予定を前倒しにしてでも企てを成就させるしかない。

アーウィンの決断は早かった。まだ襲撃の衝撃から醒めやらぬ城中の兵たちに檄を飛ばし、さらに最寄りの砦にも早馬を飛ばして、夜のうちに軍勢を立て直しエルフ族の討伐隊を編成した。

さらに夜明けとともに城下町の広場には、城内に死体のあった四人のエルフの頚を晒した。その罪状を記した張り紙には、ニブニール率いる谺谷のエルフの無法を、逐一、微に入り細に渡って記しておいた。――まず事実無根の難癖をつけて伯爵を恫喝した挙げ句、これを毅然とした態度で退けた伯爵に対して、夜陰に乗じて四人のエルフが魔獣を引き連れ城内に侵入し、五三名に及ぶ衛兵を死傷せしめた旨。扇情的な脚色を添えて綴られた文言は、挙兵の大義名分として申し分のない仕上がりだった。

ここまで状況が調えば、事態はもはや歴然たる反乱である。国王より領土を預かる領

主として、法の名の下に谺谷のエルフたちを討伐したとしても、誰も伯爵家に後ろ指を立てる者はいないだろう。

もう何の気兼ねもいらない。この手に〝樫の護り〟がある限り、自軍の決定的な優位は揺るがない。エルフによる夜襲はむしろ、望みうる最良の形で戦いの火蓋が切って落とされたことで、アーウィンをほくそ笑ませる結末となった。

いま彼は意気揚々と兵たちの先頭に立ち、その士気を鼓舞している。これだけの軍勢を率いて戦に臨むというのは、アーウィンにとって初めての経験だった。より経験のある将兵に指揮を任せるのが賢明なことは判っていたが、〝樫の護り〟を預かる役だけは誰に譲るつもりもなかった。

出陣に先立って、アーウィンは祖父である老伯爵から一言だけ質された。――そんなにもエルフが憎いのか、と。

なるほどメラネイド伯爵も、為政者として、谺谷のエルフを駆逐する必要性は当然のように理解していた。ところがその務めを果たすに当たって、愛孫がこれほど血気に逸っている様子は、いささか度の過ぎたものと見えたのかもしれない。

アーウィンは返答に迷うまでもなかった。是、だ。エルフが憎いかと問われれば、ただ単に是でしかない。

老いを知らず、病を知らず、死の恐怖に怯えることのないエルフ族。その美しさ、取り澄ました高邁さ、何もかもが憎かった。あの長寿種族に較べれば人間など犬猫と同等の寿命しかない、その現実が屈辱だった。

とうの昔に世界の覇権を人族に譲り、自らは森林の奥に引きこもって隔絶しておきながら、なおも居丈高に〝定命の者たち〟を見下しているエルフ族は、人に生まれ人であることを誇るアーウィンの自尊心を踏みにじる存在でしかなかった。断じて許せるものではなかった。

叶うならばいっそのこと、世界中の森という森からエルフどもを根絶やしにしてやりたい。それができて初めて人類は、自らの治世の幕開けを本当の意味で宣言できるのではないか。

その手始めに、まず谺谷の木々を焼き払う。そう思えば何の躊躇があろうか。

従僕の野伏に山刀を振るわせ、行く手を阻む茂みを切り払わせながら、アーウィンは

憚ることなく錚々と森を進んだ。左手に燃えさかる松明を携え、右手には輝く〝樫の護り〟を高々と掲げての、威風堂々たるその歩み。満身にみなぎる自信の程は、後に続く兵たちの士気を否が応にも昂揚させた。

それほどまでにアーウィンは、アルシアから奪った〝樫の護り〟の威力を確信していた。この護符を手にした自分が先頭に立つ限り、森の怪異やエルフの呪力は決して兵たちに届かないものと思い込んでいた若者は、もはや指揮官であるのみならず、自軍を守護する軍神にでもなった気分でいた。

無論、森の脅威に対する加護など、まさか護符を偽物と摺り替えられているとは思いもよらぬアーウィンの妄想でしかない。我が物顔で森を行軍する人族の軍勢は、すでにとうの昔から、不可視の幻影を身に纏ったエルフの防人、数十人に及ぶ弓の名手たちに照準されていたのである。

エルフたちは侵略者が防衛戦を踏み越えた時点で鏃を放つ義務を負っていた。それでもなお射手たちが躊躇し、弓を引き絞ったまま硬直していたのは、彼らが平和主義を第

一の原則とするエルフ族であるが故だった。かようなまでの人族の蛮行、自滅に至る決定的な愚行を、俄には信じられない思いで、防人たちは侵略者の行軍を眺めていた。いかに価値観の相違はあれど、それでも人族は〝混沌〟に抗する点でエルフの朋友たる種族だと、そう信じる思いを断ち切れなかった。

だがそのとき、葛藤するすべてのエルフたちの脳裏に、ニブニール酋長から直々に念話の声が届けられた。

『戦士たちよ。森の護り手たる誇りを疑うな。心を静めて、防人の務めを遂行せよ』

是非もなし……苦い諦観に、防人頭は歯噛みした。思えば砂金騒動の始まったその日から、これは逃れ得ない必定の運命だったのかもしれない。

弓兵たちへの下知に続いて、さらに酋長の念話の声はエルフ以外の存在にも呼びかける。

『――目覚めよ、緑の翁たち。刈られざる髭の、苔生す肌の古老たちよ。森の子らの嘆きの声を聞けば、汝ら黙すること能わず――』

朗々たる祈祷の声は、森の樹妖を解き放つための詠唱だった。森の防衛力の切り札と

も言うべき彼らを動員するとなれば、これは最初から総力戦の構えである。防人のエルフたちは、あらためてニブニール酋長の本気の程を思い知らされた。

そこかしこから湧き起こる地鳴りが、森の静寂を破る。

谿谷に生える木々のうち、霊魂を宿すまでに樹齢を重ねた巨木たちが、ニブニールの祈祷の声に呼び覚まされて、静物たる樹木の理（ことわり）を逸脱し、幹を、根を、枝葉を蠢かせはじめたのだ。

森の古老たる樹妖（トレント）たちは、深い眠りから醒めるや否や、彼らの領土に踏み込んだ矮小なる者どもが、こともあろうに〝炎〟を携えていることを知って激昂した。朴訥なる樹妖（トレント）たちは、エルフのような温情も、人族に対する共感とも無縁である。忌まわしい〝炎〟を消し止めるためなら、どんな手段も厭わない——そんな苛烈な意思とともに、彼らは動きはじめた。

まず深く大地に食い込んでいた根を自ら引き抜き、地表を闊歩するべく立ち上がる。それだけで森の地面は激しく震動し、人間兵たちを動揺させて行軍の足を止めさせた。辺りを見回した兵たちのうち、まず一人が動く巨木を見咎めて恐怖の悲鳴を上げた。



その恐怖は瞬く間に伝播して、総軍を恐慌に陥れる。なにせ動く巨木は一本ではなかった。人族の軍勢を四方八方から押し包むように、無数の樹妖（トレント）が迫ってくるのだ。

　頭上から打ち下ろされた大枝が、兵たちを人形のように薙ぎ払い、串刺しにして吊り上げるに至って、もはやアーウィン麾下の軍勢は完全に浮き足立った。森の脅威に対して〝樫の護り〟が何の効果も発揮していないことは、もう誰の目にも明らかだった。

「落ち着け！　隊列を乱すな！　エルフのあやかしなど――」

　そう叫んだアーウィンの声が、途中から悲鳴に変わった。唸りを上げて飛来した一本の矢が、彼の左手を、その手の中の護符ごと射抜いたのである。射抜かれた〝樫の護り〟は最後まで何の顕現も見せることなく、ただ粉微塵になって四散した。

　その一矢を皮切りに、エルフたちは右往左往する人族たちに雨霰と矢を射かけはじめた。もはや防人の義務に迷いを差し挟む者は一人としていなかった。樹妖（トレント）の剛腕に捻り潰されることを思えば、狙いすました弓矢の一撃の方がよほど慈悲深いのだから。

『逃げる者は捨て置いてよい。伯爵の孫も、命までは取らずにおけ。ただし二度と愚かな過ちを繰り返さない程度には教訓を与えてやれ』

念話によるニブニール酋長の指示は、エルフの弓手たちの重圧を若干ながらも和らげた。実際、樹妖（トレント）の加勢を得たエルフたちは、敵の撃破を急くこともなく、ただ圧倒して壊走せしめればそれで済んだ。

緒戦が凄惨であればそれだけ、犠牲は少なく終わる——そう覚悟を決めたエルフの弓は、もう何の呵責もなく矢を放ち続けていた。

森の中で繰り広げられる一方的な殺戮を、遠見の投影で見届けていたニブニール酋長は、澎湃と溢れる涙に頬を濡らしていた。

「……かつて、過ぎ去りし遠い日に、この近隣をオークの群れが跋扈したことがある……」

誰にともなく語りかける声は、悲嘆と悔恨に掠れきっていた。

「あのとき、人族の領主を努めていたのは先々代のメラネイド伯爵……我ら谺谷のエルフは、彼と轡を並べて混沌の駆逐に駆けめぐった。あれは……誉れのある戦だった……」

老いたエルフの脇に控える傍仕えの者たちもまた、酋長の語りに涙を誘われ、言葉も

なく顔を伏せる。
「もはや谺谷の木々に向けて地母神は微笑むまい。これほどの血を吸ってしまった、この森は……もはや生命の喜びの庭では在り得ない」
痛ましい空気の中、ただ独りラゼィルだけは、仇敵たちの涙に蜜の味を堪能していたのだが、あいにくと彼は彼で多忙な身であった。宴の進行役として、こんなところで呑気にくつろいでいる場合ではない。
「ただ坐して眺めているのには、あまりに忍びない光景です」
沈鬱な口調を装ってそう嘯くと、ラゼィルは腰を上げた。
「及ばずながら、これより加勢に向かいます」
「……ならぬ。客人である貴殿に、これ以上の汚れ仕事を負わせるなど……」
そう言ってかぶりを振るニブニールを、ラゼィルは穏やかな声で諭す。
「私が一矢を射るごとに、誰かが射なければならない矢が一本減ります。谺谷の皆様が射る矢は、一本でも少ない方がいい」
「ラゼィル殿……」

「メラネイド城から生きて連れ戻せなかった四人の分を、このラゼィルが務めを果たしましょう」
そうまで言われては、谺谷の酋長も意地を張ることはできなかった。もとより意地を張り抜くだけの気概など、打ちひしがれた老エルフには残っていなかったのだが。
「……忝い」
深く頭を垂れる酋長に頷いて、ラゼィルは広間を辞する。が、その後に続こうとしたアルシアを、彼は肩越しに一瞥して制止した。
「お前はここに残るがいい。お傍衆ともども、ニブニール殿をお守りするように」
「……」
アルシアにとっては重すぎる務めだった。縋る眼差しでラゼィルに懇願しようにも、すでに主は足早に広間を出ていった後である。
おそるおそる振り向いたアルシアは、氷のように冷ややかなニブニール酋長の視線と目が合った。
これがお前の夢見た、人族とエルフ族との行き着く末なのだ——と、そう半エルフの

少女を詰るかのような酋長の眼差しに、アルシアは声もなく項垂れた。

惨劇の森

人族の軍勢は、もはや完全に統制を失っていた。
アーウィンによって鼓舞された人間族の栄光も、エルフ討伐の大義も、兵たちの脳裏には微塵も残っていなかった。我先にと逃げまどう彼らにとって今は、歩く大木と飛来する弓矢への恐怖だけが全てだった。
もと来た道を引き返すのが唯一の退路なのは、誰の目にも明らかだった。押し寄せる樹妖(トレント)の群れも、後方からだけは現れない。正確無比なエルフの弓が、背中を見せた者にだけは当たらないことも皆が理解した。一刻も早く死の森から外へ出ようと、敗残兵たちは先を争って無秩序な退却を開始した。
が……そんな彼らのうち、真の絶望を最初に味わう羽目になったのは、敗走する軍勢の先頭に立って森の外を目指していた臆病者たちの一団だった。
逃げきれる——そう安堵した彼らの前に、突如、怪物じみた巌のような巨躯が立ち塞がったのである。

亡者の如き虚ろな双眸と、全身を覆い尽くす縫合痕、そして何よりも悪夢的な、ギロチンの刃に柄を付け足したかのような特大サイズの大鉈。

昨夜の城中での惨劇を生き残った者たちが、恐怖のあまり発狂した兵たちの退路を断ったのは、他でもない、あの凄惨な殺戮の主である不死身の怪物に他ならなかったのである。

巨漢は問答無用のままに、腰の抜けた敗残兵たちを刈り取りはじめた。雄叫びもなければ哄笑もなく、ただ黙々と機械的に振り払われる大鉈が、一旋ごとに数人分の血飛沫と肉片を飛び散らせる。森の中の虐殺は、ここに酸鼻の極みを迎えた。

仰天したのはエルフたちである。人間たちを効率よく放逐するよう、敢えて包囲せず退路を残しておいたというのに、突如現れた怪物がすべてを御破算にしてしまった。見れば相手は紛れもなく混沌の眷属。異なる人型種族（ヒューマノイド）の肉体を継ぎ合わせて造ったとおぼしい巨躯は、明らかに生者の肉体ではない。最も怖ましく忌まわしい邪法の産物、

〝生ける屍（リビングデッド）〟ではないか。

人族の侵入の混乱に乗じて、あんな不浄の怪物までもが森に紛れ込んでいた事実に、

エルフたちは恐慌をきたした。無論、まさかそれが今、隠れ里に招かれている賓客の差し金だとは誰一人として想像も及ばない。

また一方で、逃げ場さえも奪われ、絶体絶命の窮地に追い込まれた人族の敗残兵たちは、極限状況下の絶望によって、むしろ逆に生存本能に火を点けられた。

殺される前に、殺し尽くせば或いは――

追いつめられた恐慌が、さらに一段階上の錯乱へとシフトする。生き残っていた人族たちは、ここにきてついに手負いの獣の如き凶暴さを発揮して、迫り繰る樹妖（トレント）とエルフたちに牙を剥いた。

怪物の出現に動揺していたエルフたちは、ひとたび追い払ったはずの人間たちが、死に物狂いの獣性に双眸をギラつかせ、奇声を上げて襲いかかってくるのを目の当たりにして、完全に浮き足だった。

一人、二人と敵を射殺した弓手の脳天に、三人目が斧を振り下ろす。エルフの弓の鋭さも、死の恐怖を忘れた暴徒の群れを前にしては、さながら津波に晒された篝火のようなものだった。

逃走の際に放置された油樽が叩き割られ、まだ燃え残っていた松明がその中へと投げ込まれた。狂乱した人族の兵たちは、もはや同胞が炎に巻かれて焼け死ぬのさえ厭わなかった。累々たる屍を踏み越えながら、人間たちは暴れ狂う樹妖（トレント）に蟻のように群がって、巨木を大地に引きずり倒していく。周囲の木々に燃え移った炎が、阿鼻叫喚の地獄絵図を赤々と照らし出した。

× × ×

戦場の不穏な空気は、隠れ里の中にも着実に浸透していた。
血相を変えた伝令が次から次へと往復し、そのたびに、里に待機中だった後詰めの兵たちが、厳しい表情で弓矢を携え、続々と里の外へ駆り出されていく。そんな様相を、里に残されたエルフの女子供たちは、みな一様に不安な面持ちで見守っていた。
ひとり隠れ里の木道を闊歩しながら、そういった数々の不吉な兆しを見て取って、ラゼィルは胸の内でほくそ笑んだ。どうやら愛すべきバイラリンは充分な働きを果たして

いるらしい。エルフたちが囁き交わす言葉の端々に、亡者が出ただの、混沌の差し金がどうの、といった単語が聞き取れる。

ラゼィルが目指していたのは、里の外れにある物見櫓だった。

どんなエルフの隠れ里も、必ず霊木に支えられた物見櫓によって四方を囲われている。それらは見張りの役のみならず、里を護る幻覚結界の起点として機能し、必ず中級かそれ以上の呪術師が常駐して結界の維持に当たっている。

先だってこの谺谷の里を案内された折りにも、ラゼィルは目敏くそのひとつに目星をつけていた。

――はたして、目当ての物見櫓に着いてみると、二人のエルフが沈鬱な顔をして言葉を交わしている。草色のローブを着た一人と、長弓を携えた一人。この櫓を受け持つ呪術師とその護衛であろう。

二人はラゼィルに気がつくと、会話を打ち切って黙礼した。おおかた森の中の戦況について伝令のもたらした情報を語り合っていたのだろう。

「混沌の手先が現れたというのは、本当ですか？」

そうラゼィルが気兼ねなく問いかけると、二人のエルフは気まずそうに顔を見合わせる。

「……どこで御客人の耳に入ったのかは知りませぬが、どうか喧伝せぬよう願います。女子供たちが怯えます故」

「ああ、成る程。それは失敬」

愛想笑いを振りまきつつも、ラゼィルは櫓の中を見渡す。霊木の幹に刻まれている魔術刻印はすぐ目についた。あの刻印が破壊されれば、この里を巡る幻覚の一角が消え去り、その姿が外部に暴かれることになる。

だがエルフの呪術師と弓手は、ラゼィルの視線の意図に露ほども気付かず、話を続ける。

「……何でも、押し寄せてきた人族の中に死霊使い(ネクロマンサー)が潜んでいたらしく、亡者が一匹、暴れ狂っているという報告が」

死霊使いではなく骸繰りなのだと喝破したいのは山々だったが、ラゼィルは怒りを面に出すこともなく、頷いて先を促した。

「しかし、その亡者は人間たちを襲っているとの情報もあり、まだ状況が判然としません。ともすれば、人族よりもさらに質の悪い混沌の勢力が現れたのかもしれません」
「ほほう、それはまた恐ろしい」
「ですが御客人、ご安心ください。外の状況は予断を許しませんが、里の中にいる限りは安全です。この櫓の幻影結界が、不埒な者どもの侵入を阻んでおります」
「いやいやご両人、油断は禁物ですぞ」
神妙に表情を引き締めて、ラゼィルは二人のエルフを諭した。
「隠れ里の結界とて、隙を衝かれることはございます。ご両人、たとえば〝夜鬼の置き土産〟というものはご存じでしょう?」
「それは、まぁ……」
大抵のエルフであれば、その戒めは伝聞に聞いている。
エルフの幼子が、隠れ里の外を散策するうち、ふと森の外縁で不可思議な落とし物を拾うことがある。それは人族の旅人が落としたと思しき装身具であったり、玩具であったり、その時々によってまちまちである。それを子供が興味本位に持ち帰ると、その夜、

隠れ里がダークエルフの襲撃を受ける——という顛末だ。
「子供の関心を惹くような物品に、隠れ里の結界を破る呪いをかけて森の外れに置いておくという……邪悪なダークエルフたちの常套手段として、あまりにも有名な話ですな」
「ええ。聞き知ってはおりますが——」
他愛もない話だとばかり、呪術師は鼻で嗤う。
「我が谺谷の結界はとりわけ強固です。たかだか呪いの物品程度で破られるほどに不甲斐ない守りではございませんぞ」
「そういう油断で、実に、多くの隠れ里が陥落しているのですよ」
口調ばかりは気遣わしげに、だが口元の笑みにはどことなく底意地の悪いものを覗かせながら、ラゼィルは続ける。
「実のところ、あの〝置き土産〟というやつに仕掛けられているのは呪いなどではないのです。もっと単純で、それだけに盲点となる仕掛けがあるのですよ」
「——ほう？」
博識を誇る呪術師のエルフも、それは初耳の情報だった。訝りつつも興味を惹かれ、

真顔になってラゼィルの語りに耳を傾ける。

「ダークエルフの戦士は、見習いの時期から数々の特殊な訓練を受けております。そのひとつに、きわめて特殊な揮発物の臭気を嗅ぎ分ける、という鍛錬がありましてね」

「揮発物？　……香か、薬のようなもので？」

「左様、きわめて特殊な香ですな。その香が放つ臭気は、人族やエルフ、ドワーフの鼻では決して嗅ぎ取れない微弱なものです。ところが訓練されたダークエルフであれば、その臭いを数マイル先から嗅ぎ分けられる——そういう魔法の香なのです」

信じがたい話ではあった。が、この〝根無し〟のエルフは、森に住まうエルフでは知りようのない知識を豊富に蓄えているという。信憑性はさておき、最後まで聞き届ける価値はあるように思えた。

「その香を炊き込めた品が、隠れ里の中に持ち込まれれば……ダークエルフの斥候は視覚に頼らず、彼らにだけ嗅ぎ取れる強烈な臭気を手がかりに、隠れ里の位置を探り当てることができるのですよ」

「何ともはや……博識でおられますな。ラゼィル殿は」

「いや、それほどでも。かの〝置き土産〟の秘訣を森のエルフ殿に語ったのは、実はこれが初めてでして」

微妙に引っかかる言い回しではあったが、呪術師はさほど気にもかけず聞き流した。

「それにしても、何故そんなにも詳しいことを御存知で？」

「いやなに当然ですとも」

もはや偽る必要もない——そう判断したラゼィルは、満面の笑みを黒く黒く染め上げた。

「アレは私自身が、何度も使った戦略なのでねぇ」

〝根無し草〟の邪悪極まる笑みの意味も、言い放ったその言葉の意味も、正しく理解する暇さえなく——櫓にいた二人のエルフは、それぞれ背後から瞬時に八ヶ所もの急所を深々と抉り裂かれて絶命した。骸はさながら即興の腑分けをされたかのように、最も効率の良い断面で解体されて臓腑を散らし、一目では人型種族(ヒューマノイド)の遺骸とさえ判別できないような有様で、櫓の床に散乱した。……まぎれもなく、芸術の域にまで洗練されたダークエルフ流の肉体解体術である。

ラゼィルの長弁舌に聴き入っていたエルフたちは、その背後へと音もなく忍び寄っていた黒いローブ姿の三人に、最後の瞬間まで気付かなかった。愚かな犠牲者たちの肉体を、ただ殺すのみならず徹底的に破壊し尽くした凶刃は、他でもない、嵐の中の刑場跡でラゼィルに忠誠を誓った、元ラファルガー家私兵の精鋭ダークエルフたちである。

混沌の申し子たちは、振り撒いた血の臭いに酔いしれることもなく、恭しくラゼィルの膝下に額ずいた。彼らが幻覚に惑わされることなく隠れ里にまで侵入できたのは、まさしくラゼィルが今しがた語っていた〝夜鬼の置き土産〟の応用によるものだ。ダークエルフのみを誘導する結界破りの魔香を、今回はラゼィル自身の着衣にたっぷりと焚き込めておいたのである。

「よくぞ参った。神楽の狩場へ」

ラゼィルは祀将（ししょう）として戦士たちに祝福を与えると、自らも愛刀凍月（いてづき）を抜き、その一旋で霊木に刻まれていた結界の刻印を削り落とした。

「ここと同じ結界の櫓が、この規模の隠れ里であればあと三ヶ所はあるはずだ。残らず潰せ。しかる後に――神愉しますす楽（がく）を律（しら）べよ。その手の剣にて存分に」

「御意!」

そう応じるや否や、黒いローブ姿は死を運ぶ邪悪の影となって里の方々に散っていく。程なくこの里を覆う幻覚はすべて解除され、谺谷はその姿を白日の下にさらけ出すことになるだろう。そうなれば、外の森で逃げ場を失ったメラネイド伯の軍勢が一気に雪崩れ込んでくる。

仕込みは、これにて完了だ。後は顛末を見届けるのみ。

もはや謀を巡らす必要もなくなった今、白貌に身を窶すまでもない。ラゼィルは櫓の床を染めるエルフの血に手を浸すと、その手で顔の白粉をくまなく拭い取った。

久々に残らずさらけ出した地肌が、風に心地よい。

涼やかな風に、迫り来る滅びの気配を敏感に嗅ぎ取って、ラゼィルは陶然とその香りに酔った。

×　　×　　×

「げ、幻覚結界が薄れていいます！　里の位置を見破った人族どもの生き残りが続々と攻め寄せて……もう防人衆では支えきれません！」
「さ、里の中に闇の落とし子どもが！　男たちの留守をいいことに、女子供が殺されています！　酋長、お助けをッ！」
次から次へと広間にもたらされる致命的な報せを、ニブニール酋長は、どこか醒めた心境で聞き届けた。
この里の滅びは——今に始まったことではないのかもしれない。
だとすれば、元凶はいつの頃に遡るのだろう？　谷の小川に砂金が見つかったときか。
それとも、森の外れに捨てられていた混血の赤子を、情にほだされて拾い上げたときからか。
「——お前たち、此処は構わぬ。里に侵入した敵を討ちに向かいなさい」
側近に控える護衛たちに、ニブニールはそう下知をくだす。
「し、しかし酋長！　それでは貴方様は……」
「案ずるには及ばない。私はこれより大主様(オオヌシ)にお出ましを乞います」

それを聞いた護衛たちは、畏怖と緊張に生唾を呑むと、酋長に一礼してから槍を手に広間を駆け出ていった。彼らの背中を見送ってから、酋長もまた立ち上がり、大榕樹を臨むテラスへと向かう。

「……」

最後まで無視され、放置されていたアルシアだったが、主であるラゼィルからは酋長の守護を命じられている。しばらく躊躇した後で、彼女もまた床を立った。

だが、意を決してニブニールの後ろに付き従おうとした少女を、老いたエルフの長は厳しい視線だけで押し止めた。

「我に近寄るでない。黒髪の者よ」

「……」

冷ややかな声に萎縮し、アルシアは畏まってその場に平伏する。その頭上に、ニブニール酋長は硬く無機質な語調で言葉を続けた。

「何処へなりとも去れ。運が良ければ生き長らえよう。ただし、この谺谷の末裔を名乗ることは、未来永劫まかりならぬ」

「……ニブニール様……」

「誇り高き我らが里の名を、血の穢れた者に託すつもりはない。森を捨て、エルフを捨てよ。これより先は定命の者どもの塵世(じんせい)を生きるがいい」

思えば――この厳めしいエルフの長が、哀れな半エルフの少女に向けて直々に言葉を投げかけたのは、どれほど久しいことだっただろうか。

それを自分がどれほど待ち望み、必要としていたか、アルシアは改めて痛感した。

ニブニールの言葉が欲しかった。優しさや哀れみを期待したわけでもない。ただ、ここにいる自分を認めてくれさえすれば良かった。いっそ無聊の慰めに蔑まれ、貶されるのでも構わなかった。

なのに――ようやく賜った彼の言葉は、冷厳なる拒絶と、追放の命。

もはや酋長はアルシアに罪を糺すことさえしなかった。ただ、路傍の石を蹴り除けるかのごとく、少女の居場所を否定しただけだった。

広間の床に平伏した姿勢のまま、アルシアは全身の力を喪った。もう二度と立ち上がれない程に、彼女の力は根こそぎ奪い去られていた。

そんな少女に、最後の一瞥を与えることすらもなく、ニブニール酋長は広間から出ていった。

救済

アーウィンは幸福だった。踊り狂いたいほどの心境だった。喉が枯れるほどに笑い尽くして、なお笑いが止まらなかった。

手にしたサーベルは六人分のエルフの血で濡れている。自らも矢傷と火傷を負っていたが、それらの痛みさえ忘れるほどに爽快だった。

殺してやった。もう六人も殺してやった。

それに数倍する臣下を殺されたが、些末なことだ。もっともっと殺してやればいい。抵抗もできずに逃げまどうエルフの子供たちは、そこかしこを駆け回っている。斬っても斬っても、獲物は次から次へと目に映る。

ついさっきまで、四方八方から現れる怪物と雨のようなエルフの鏃で、絶体絶命の窮地に立たされていたのが、死に物狂いで逃げまどい、森の奥へ奥へと迷い込んでいくうちに、はたしてどういう奇跡が起こったのか——アーウィンたちの眼前に忽然と、探し求めたエルフの隠れ里の景観が立ち現れたのである。

そこから先は攻守が一転した。

なぜ唐突にエルフたちの防衛線が瓦解したのかといえば……アーウィンたちの窺い知らぬことではあったが、エルフの防人たちは幻覚の結界が破れたことに狼狽し、さらに加えて里の中にダークエルフが現れたことで、森の防衛線に動員していた兵力を里の救援に割かなければならなくなったのである。その混乱によって統制を失い、結局、森の番人たちは凶暴化した人族の残党を最後まで抑えきれなくなった。

たとえ幻覚の守りが失せても、エルフの村落を頭上遥かな位置に支えている太く屈強な木々の高度が、城壁も同然に外敵の侵入を阻むはずだった。ところが樹上は樹上で、すでに何処からともなく忍び入ってきたダークエルフたちの攻撃に蹂躙されていたのである。

ラゼィルの麾下に降ったアビサリオンの猛者たちは、文字通りに一騎当千の武勇でもって群れなすエルフ兵たちを蹴散らした。わずか三人の侵略者を排除するためだけに、里にいた後詰めの戦士たちが残らず駆り出され、しかもその大半が命を落としていた。

老練の戦士が外の森のメラネイド勢に立ち向かうために里を空けていたという事情も

あったが、そもそも平和を愛するエルフ族と、その逆徒たるダークエルフとでは、なまじ戦闘訓練に傾ける情熱の程が違う。戦士の練度に差が開くのは当然のことだ。実際、多くのエルフの隠れ里は、たった二個小隊ばかりのダークエルフの潜入を許しただけで、一夜のうちに壊滅に至るという。

ダークエルフたちは殺戮の片手間に家屋に火を放ち、それらは消し止められぬまま村じゅうに燃え広がって、すでに収拾がつかなくなっていた。やむなく、エルフたちは非戦闘員である女子供を、修羅場と化した樹上から地表へと逃げ延びさせた。だがそこへ、里の外での乱戦を生き延びたメラネイド伯の兵たちが雪崩れ込んできたのである。

狂乱に憑かれた人族の暴虐は、筆舌に尽くしがたかった。子供と見れば殺し、女と見れば数人がかりで押さえ込んで輪姦し……そんなことをしているうちに燃え広がる火勢に取り囲まれようとも、兵士たちはまったく頓着しなかった。

虫けらのように殺されるのを待つばかりだった立場から、一転して、相手を虫けらのように殺して廻る立場になった——その優越感と開放感は、アーウィンを含む人族の兵士たちの精神から理性の箍(たが)を外してしまった。慈悲だの、尊厳だの、名誉だの——そん

な人生の粉飾が、殺し殺される現場においてどれだけ陳腐で下らないものか、彼らは経験によって理解してしまったのだ。

〝ああ、こんなにも気持ちいいものか――〟

若き次代の伯爵は、ケタケタと弛みきった哄笑を放ちながら樹幹の間をさまよい歩き、滅多矢鱈にサーベルを振り回した。出鱈目な刃の一旋が、また一人のエルフの少女の背中を切り裂いて、新鮮な返り血で刀身を染め直す。

アーウィンだけではない。彼の引き連れる手勢の全員が、いまや白痴のように虚ろな目のまま、手にした斧が肉を裂き血を飛沫かせる感触に嬉々とするばかりの狂態を晒していた。

いま彼らは獣として、畜生として、限りなく自由で放埒だった。その悦楽の形を言葉に言い表すならば、まさしく〝混沌〟の二文字しか他になかった。

思うさまに非道の限りを尽くしながらも、アーウィンたちは着々と里の中心――聳え立つ大榕樹を目指して進行していた。そこに居るであろうニブニール酋長の首級を上げ

ることで、この享楽はクライマックスに至るものと、兵たちは狂乱した思考なりに戦(いくさ)の初志を果たそうとしていた。

やがて巨大な榕樹の偉容は、絡み合う気根の一本一本が見て取れるほど間近に迫っていた。視野を覆い尽くす神樹の雄大さは、さながらそれ自体が垂直に伸び上がる森であるかのように見えるほどだった。

そしてその根本に、ただひとり佇む空色のローブの姿。紫水晶の頭冠(サークレット)は紛れもなく貴人の証である。その毅然とした立ち姿が、目下の標的であるニブニール酋長に他ならないと見咎めて、人族たちの凶相がよりいっそう濃くなる。

「……ついに見つけたぞ。亜人どもの首魁めが」

血染めのサーベルをゆらりと持ち上げ、その切っ先をエルフの長に向けて、アーウィンは歪んだ笑みを浮かべる。

「その様子では観念したようだな。だが我らメラネイド家に恭順を誓うには、いささか時期を失したぞ。――貴様の民は、もう残らず殺して犯してやったからなぁ」

頭目であるアーウィンの言葉に、その嗜虐の手応えを思い出してか、いまや二〇人足

らずにまで数を減らしたメラネイド伯の兵士たちが血に飢えた獣の目をして嗤う。
そんな人族の嘲笑を、ニブニール酋長は冷厳な無表情で受け止めた。見下すかのような眼差しは哀れみすら帯びて、怯えの色は微塵もない。彼が群れ集う暴徒たちを何ら脅威として見なしていないのは明らかだった。
「ついさっき、私はお前たちの死を悼んで涙した」
疲弊しきったかのように乾いた、それでいて冷厳な怒りを秘めた語調で、エルフの老雄は言葉を続ける。
「……だが今は、お前たちの魂を悼もう。過ぎし日の朋友の末裔が、滅びをもってしか救えぬほどに、穢れ、堕落しはてたことを嘆こう」
この期に及んで尊大なニブニールの口上を、アーウィンは鼻で嗤う。
「貴様、状況を弁えて――」
そう言いさしたところで、睨み合う人族とエルフとの間に、はらり、と、一枚の葉が舞い落ちる。
続けて二枚、三枚……風もないのに頭上の梢が、まるで何かに揺すられたかのように

散っている。

「……」

じわじわと込み上げてくる悪寒とともに、アーウィンは、老エルフの背後に聳える大木を凝視した。

動いている。

榕樹の幹——無数に絡み合った支持根の束が、まるで身震いするかのように蠢いている。

地震……ではない。アーウィンたちが立つ大地は微塵ほどにも揺れていない。あの大木は、内側から揺さぶられている。

榕樹の中に何かがいるのだ。分厚く折り重なった根の隙間を、縫うようにして這い進む何かが。

幾重にも編み合わさった支持根の向こう側、その間隙の奥の闇の中から、ぎらり——と、燃え立つような眼光が光る。アーウィンが知るどんな獣のそれとも違う、金色に輝

く異形の視線。一睨みされただけで、居並ぶ人族たちは残らず総身を凍らせた。
その恐怖と絶望は、あまりにも静謐だった。金色の凝視に固まった餌食たちは、支持根の網目の隙間から滑り出てきた巨体を目の当たりにしても、悲鳴ひとつ上げることすらできなかった。
信じがたいほどの大蛇だった。馬車の車輪ほどもある直径の胴回りに、牛一頭ぶんはあろうかという大きさの頭。割けた顎は、拡げただけで大の大人を数人まとめて丸呑みにしてしまえるだろう。
誰が知ろうか。この大蛇こそが、谺谷の奉る〝大主様（オオヌシ）〟——森の守護神たる大榕樹に、太古の昔から宿ってきた聖獣だった。里のエルフたちですら、かつてその姿を目の当たりにした者は最長老のニブニール以外に一人もいない。まして森を知らぬ人族にとって、これほどの圧倒的な神聖が谺谷を守護していようとは、想像すら及ばなかった。
蛇に睨まれた蛙、という表現がある。それがこの場ではただの比喩という以上に相応しかった。大蛇の凝視を浴びせられた人間たちは、まさしく蛙も同然に無力だった。
「さぁ清めてやるぞ邪悪の徒ども。死して無垢なる魂に還れ」

冷ややかに宣言したニブニールの傍らで、大蛇が鎌首を持ち上げる。その鼻面から吹き出す湿った息遣いが、突風のように轟々とアーウィンたちの頬を擦過する。抗いようもない死を誰もが覚悟したそのとき——誰も予期しなかった新たなる闖入者が、あらぬ方向から割り込んできた。

頭上、である。

もはや炎に焼き尽くされつつある樹上の村落の、いずれかの吊り橋から飛び降りてきたのだろう。地響きを立てて着地し、重々しい動作で立ち上がったのは、全身を縫合痕に覆われた雲を衝く巨漢であった。他でもない、昨夜メラネイド城を地獄に変えた不死の怪物である。

大蛇への恐怖に思考が麻痺していたアーウィンたちは、さらに重ねて出現した恐怖の対象に、ますます脱力してへたり込んだ。大蛇から逃れる可能性がゼロならば、あの不死身の大男を前にして生き長らえる可能性はゼロ以下である。

だが次の瞬間、人族たちは己の目を疑った。

不死の巨漢は彼らに背を向けたまま一顧だにせず、逆に鎌首をもたげた大蛇に向かっ

て突進していくではないか。
アーウィンたちはもちろん知る由もないが、骸繰り師ラゼィルの操躯兵バイラリンは、断じて谺谷のエルフに与する存在ではない。それどころか魂なき死人形は、つい今しがたまでラゼィルの命のもと、他のダークエルフともども樹上でエルフの戦士たちの掃討にあたっていたのだ。
そうやって、動くもの全てをことごとく斬り伏せながら徘徊し、やがて他にめぼしい獲物が見当たらなくなったところで、バイラリンは眼下の地表にいる面々を発見した。もちろん標的としての優先順位は、人族の敗残兵よりも、エルフの酋長ニブニールとそれを護る〝森の大主(オオヌシ)〟の方が上である。大蛇の魔眼を畏怖するような魂など持ち合わせていないバイラリンは、何の躊躇もなく大鉈を振り上げ、傲然と大蛇に斬りかかっていった。
が、怖じる心がないのは相手もまた同様。たかだか怪力と頑強さだけが取り得の生命なき操り人形など、神樹の主たる聖獣からすれば、何ら恐るるに値しない。
電光石火の勢いで鎌首を繰り出した大蛇は、バイラリンが大上段に掲げた大鉈を振り

下ろすのに先んじて、死せる巨漢の胴体に巻きついた。大蛇の太い胴体は、バイラリンの巨躯を二周あまり巡っただけで、その爪先から肩までを完全に巻き込んでしまった。

持ち前の剛力でもって、バイラリンは大蛇の胴の圧迫に抵抗する。が、いかんせん相手が悪すぎた。ほどなく軋みを上げはじめたのは、骸繰り師が魔力を込めて強化した死体の骨と筋であった。大蛇の胴の隙間からはみ出ていたバイラリンの手から、次第に握力が失せ……やがて節くれ立った手から大鉈の柄が離れ、落下した分厚い刃が地面に深々とめり込んで直立する。

さらに大蛇は容赦なく、蜷局の中に巻き込んだ獲物をギリギリと圧搾していく。臨界はすぐに訪れた。まるで竹の束を捻り折るような破砕音とともに、バイラリンの身体は幅と厚みとを失った。

殺された程度では死なない怪物も、肉体そのものが形を無くすほどに破壊し尽くされてしまっては、立ち上がれる道理がない。大蛇が蜷局を解いた後で地面に頽れたのは、襤褸雑巾のように絞られて不定形になった肉片と皮のオブジェに過ぎなかった。地に突き立ったまま残された大鉈だけが、かつての忌まわしい怪物の脅威を物語る名残だった。



あれほどに脅かされてきた不死の巨漢の、あまりに呆気ない末路を見届けたアーウィンたちだったが、だからといってそれが何の慰めになったわけでもない。むしろ大蛇の法外な力をまざまざと見せつけられて、絶望の度合いがよりいっそう深まっただけのことだった。

「見たか混沌の僕ども！　これが神威である！」

神樹の大蛇の圧勝に昂揚したニブニールが、高らかに哄笑して宣言する。彼もまた、混沌の邪法により産み落とされたに違いない動く屍が、まさかメラネイド勢にまで仇為していたとは知りもしない。

いつしか、三人のダークエルフを追って里じゅうに散開していたエルフの戦士たちの生き残りが、一人、また一人と大榕樹の許に集いつつあった。熾烈な戦いを終えた彼らは誰もが満身創痍で血糊に汚れ、いまだ死闘の余韻の醒めやらぬ悽愴な殺気を纏ったまま、憎悪の眼差しでアーウィンたちを睨み据えている。

誰一人として、大蛇の顎にかからんとする哀れな餌食たちを哀れむ者はいなかった。全員が人族たちの死を望んでいた。たとえ大蛇が慈悲を示したとしても、そのときは猛

り狂ったエルフ兵たちが、彼らの奉じる神に代わってアーウィンたちを八つ裂きにすることだろう。

ほんのいっとき、勝利者さながらに殺戮と蹂躙の悦楽に酔いしれていたメラネイド勢は、ここにきてついに命運尽きた。

「さあ、武器を捨てて頭（こうべ）を垂れよ。大主様（オオヌシ）は慈悲深い。潔く振る舞えば、死の苦痛を長引かせたりはするまいて」

誇り叩きエルフ族の長は――そのとき、自覚していたのだろうか。なべて生命を讃える慈愛の僕（しもべ）として永き寿命を生きてきた己が、いつしか死に瀕した敵を前にして笑みを刻んでいることに。

「お待ち下さい！」

悲痛な声が、今まさに始まらんとしていた処刑を遮る。

いつからこの場に居合わせたのか、血気立つエルフの戦士たちの輪の中から、一人の少女が駆け出てニブニールに取り縋った。そのエルフらしからぬ黒い髪は、誰もが見知ったものだ。

「……控えよ、アルシア。そなたには去ねと命じた筈」
分を弁えずに割り込んだ半エルフの少女に、だがニブニールは怒りを向けなかった。むしろ怒るにも値しないとばかり、一瞥すら与えなかった。
これまでのアルシアなら、そんな酋長の冷ややかな声音を聞いただけで萎縮し、言葉を控えていたことだろう。だが今の彼女は違った。かつて出したこともないほどの声を張り上げ、一生涯ぶんの勇気を振り絞って、半エルフの少女は厳格なる酋長に食い下がった。
「後生です、慈悲を示してください！　かつての同胞たる人の子らに！」
「混沌の使徒を輩とした憶えはない！」
ニブニール酋長は今度こそ怒りも露わに断言する。
「この者どもは欲得に目が眩み、我らの谿谷を蹂躙せんがために、あろうことか闇の眷属にまで助勢を乞うた。この里の守りを崩すために跋扈した者ども……そなたとて聞いておったであろう！　此奴らはダークエルフまでも招き入れたのだぞ！」
「ダークエルフは人族にとっても仇敵のはずです！」

ニブニールの怒声にも一歩たりと譲らず、アルシアは反駁する。

「あるいは人間たちもまた、エルフ族ともども謀られていたのかもしれないと――なぜそれを斟酌してくださらないのですか？」

「……ならば黒髪のアルシアに問う。貴様が〝樫の護り〟を谺谷の外へ持ち出したのも、ダークエルフの指図によるものか？」

「……ッ」

怜悧な言葉に心の傷を抉られ、アルシアは息詰まる。

「闇の眷属に負けず劣らず、真に混沌たるのはメラネイド伯爵とその郎党だ。ここに至るまでの所行が何よりの証……

赦す赦さぬの問題ではない。これは断罪ではなく駆除だ。〝法〟の勢力に与する一員として、我らエルフ族は、この大地に混沌の跋扈を看過せぬ」

アルシアには返す言葉もなかった。だがそれでも少女は、酋長の空色のローブを掴んだ手を放さなかった。

「……貴方には……せめて貴方にだけは……憎しみで人間を殺してほしくない……」

掠れた声で紡がれた少女の泣訴を、ニブニールは鼻で嗤い飛ばした。
「儂はな、アルシア。今となっては貴様の半身に流れる人間の血さえもが恨めしい。残り半分がエルフでなければ、とうに貴様を斬っている」
「わたしは……ッ！」
涙に濡れた目を見開いて、少女は口を衝いて出る激情を、噛み殺すことなく吐き出した。
「醜く生まれ落ちたわたしのことは、お憎みになっても仕方ない！　けれど……でも母は、わたしの母のことは、愛してくださったのでしょう？　お父様‼」
時が凍りついた。ニブニール酋長の表情が、その場に居並ぶエルフ勢が、そして絶望に虚脱しきっていた人族たちまでもが、ことごとく固まった。
硬直した静寂の中に、唯一、声を嗄らして訴えかける少女の嘆きだけが響き渡る。
「……生涯ただ一度の恋だったと、そう言ってくださった……あれは、嘘ですか？　かつて人族にも胸襟を開いたこと……もうお忘れなのですか？」
「――忘れているのは、貴様の方だ」

いつになく穏やかな、そして、いつになく冷たく固い声で、ニブニール酋長は呟いた。
同時に、その声音によく似た冷たく固い感触が、音もなくアルシアの心臓を刺し貫いていた。
「それを一人で胸に秘め置くかぎりは、貴様を生かしておいてやると――そう申しつけておいた筈だったな。半エルフ」
痛みよりも驚きに駆られ、苦しみよりも哀しみに囚われて、少女は胸に突き刺さった短剣と、その柄を握る父の手を見つめた。奇しくもそれは、昨夜、恋人に刺されたのと寸分違わぬ位置だった。
総身の力が抜け、大地へと頽れる。自分の最期を見取る幾多もの視線を、アルシアは感じていた。そのすべてが冷たく、憎しみと嫌悪に満ちていた。
「――」
抜けていく。抜け落ちていく。
自分の中の、痛みを感じていた部分、涙を流していた部分が、まるで砂時計の中身のように流れ落ち、空っぽな空洞へと抜けていく。

思えば既に多くのものを、少女はそうやって喪ってきた。そして、たった今、父だった男に向けて叩きつけた激白が、アルシアの内側に残されていた最後の中身だったのだ。

虚ろになっていく自分の中に、アルシアは、胸に突き刺さったナイフの痛み、その刃の冷たさを探し求める。

だがもう、何も感じない。

それが寂しかった。虚しかった。きっとその痛みだけが、唯一、まだ彼女とこの世界とを結びつけていられる縁(よすが)であっただろうに。

「――当然だ。今更なにを感じる道理がある？」

その声は頭上から降ってきた。凝然と見上げるエルフや人間たち。アルシアもまた仰ぎ見た。それは彼女の聞き知った声だった。慰めるように、慈しむように、彼は間違いなく、他の誰でもない彼女に向けて呼びかけていたのだから。

声の主は、聳え立つ大榕樹……その幹の半ばあたり、絡み合う支持根の網を足場に、半身を隠すようにして立っていた。

「どんな痛みも苦しみも、とうにお前とは無縁であろうに。我が僕(しもべ)よ、もういい加減に

気付いたらどうだ？」
その貌の造作は確かに、アルシアの恩人のものだった。彼女が主（あるじ）と仰いだ者と瓜二つだった。肌の色さえ別にすれば。
「その涙も、その悲嘆も、すでにお前のものではない。それはな、かつてお前だったモノ、今のお前とは無縁なモノの名残でしかない。その残滓が未だに、お前の内側にこびりついていた……ただそれだけの話なんだよ」
今はもう遠い記憶を、彼女は懸命にたぐり寄せる。
かつて哀れな少女がいた。
父母からの愛もなく、初めての恋にも裏切られ、玩具のように陵辱され壊されて——
そんな無惨な運命に耐えきれず、最後には、自ら舌を噛み切って死んだ。
だから、たまたまその遺体を拾った骸繰り師に、生前の無念を語り聞かせたのも——
すでに生なき身体のままに、自らの足で歩いて、この谺谷にまで帰還したのも——
「……」
呆然と、少女はおのれの両手を見下ろした。

不可視の染料で彫り込まれた刺青が、いま魔力の励起に伴って黒々と浮かび上がっていた。細い矮躯の全身に刻まれた、邪法の魔導文字。死した屍を使役する〝骸繰り〟の秘奥の業。

「……ぁ……」

そうだった。アルシアなどという人物は、すでに亡い。

かつてアルシアと呼ばれていた骸に、いまだ未練がましく取り憑いていた生前の残留思念。そんな〝残り滓〟の分際で、愚かで哀れな霊魂は、自分が死んでいることにさえ気付いていなかったのだ。

彼女はようやく理解した。あのいたたまれない喪失感の正体を。

あれはアルシアが何かを喪っていたのではない。

すでにアルシアという魂から切り離されていた入れ物から、アルシア自身が抜け落ちていく――そんな、消滅の感触だったのだ。

すべてを理解した少女に向けて、樹上の黒い貌が、満足げな笑みを投げかける。

「さて、気長に完成を待った甲斐があったかどうか……そろそろ仕上がりの程を見せて



くれないか？　わが愛しき作品よ」
ダークエルフだ、まだ一人生きていた——そう騒ぎ立てる声がする。
なぜか彼女には不可解だった。ダークエルフというその呼称は、そういえば、どうしてそうまで忌まわしげに吐き捨てられるのだっただろうか。
ついさっきまでは自明の理だった筈なのに、今の彼女には思い出せない。
そういえば、憎しみとは何だったのか。恐怖とは何だったのか。
何もかもが遠かった。もうまったく解らなかった。
それでも唯一、揺るぎなく確かな認識が、ひとつだけ——
血走った眼差しのエルフたちが弓を番え、今まさに狙いを定めている相手、神樹の上にいる黒い人影こそは、彼女の掛け替えのない主に他ならない。
少女は胸に刺さったナイフを引き抜くや、そのまま一連の動作で投げ放った。風を裂く唸りとともに飛翔した刃は、ラゼィルを狙っていた弓手の右目に突き刺さり、眼窩から脳幹にまで貫通して即死せしめた。
「なッ⁉」

驚愕した他のエルフたちが、弓の狙いを少女へと変える。すでに死んだ骸のはず、などと戸惑っている猶予はなかった。微塵の迷いもなく、弓手たちは番えた矢を一斉に放つ。

縦横から雨のように降りそそぐ矢の中を、少女の遺骸は生前以上のスピードで疾駆した。網目を描く鏃の軌道を即座に見切り、その隙間に身をねじ込ませるようにして潜り抜けながら、ただの一矢も身に受けることなく駆け抜ける。

目指す先には得物があった。骸繰り師ラゼィルが、自らの作品に授ける虐殺の兵装が。弓を躱わされたエルフの戦士たちが、敵の意図に気付き、させまじと短剣を抜いて襲いかかる。だが四方から殺到する刃より、少女の動作が一歩先んじていた。

先に圧壊したバイラリンの残骸、その傍らに突き刺さった巨大な大鉈——刃渡りは少女の身の丈に匹敵し、重さに到っては明らかに上回るその武器をめがけて、彼女は何の躊躇もなく跳躍し、その極太の柄を両手で掴む。

少女の疾走と跳躍の勢いに吊られ、大鉈は大地から抜けて宙に浮いた。転瞬、少女は虚空に浮いたままの全身を独楽のように捩り旋転させる。つられて大鉈の刃もまた放物

線の軌道を乱し、出鱈目に荒れ狂うかのように空中を乱れ飛ぶ。
一斉に血の華が咲いた。
ただの無作為に見えた大蛇の乱舞が、実はそのことごとくが少女の体術に誘導され統べられていたとは、はたして誰に見破れただろうか。彼女に襲いかかったエルフたちは、反撃すら予期しないうちに、一人残らず超重量の鈍い刃に頭蓋を割り砕かれていた。
四人を瞬殺に仕留めた空中から、軽やかに着地を決める少女。その手が柄を掴む大蛇の刃は、ズンと地響きを立てて大地に落下する。
限界を越えた駆動によって破断した筋肉組織が、ほぼ同時に、あらかじめラゼィルに充填されていた魔力によって瞬時に補修される。胸の心臓に穿たれたナイフの傷にも黒い魔力が浸透し、その損壊を跡形もなく消していく。だがその痛みを少女は認識せず、同様に、肌すれすれを擦過していった鏃の恐怖も、総身に浴びた返り血の怖ましさも、彼女の意中にはなかった。
何故なら、彼女はもう死んでいるのだから。
「素晴らしい！　素晴らしいぞ！」



神樹から見下ろすラゼィルは、自作が想像以上の完成度を見せつけたことで歓喜に震え、惜しみない喝采を送っていた。

「おお、我が麗しの踊り子（バイラリナ）！　さぁ舞い踊れ！　収穫を謳え！　さらなる贄の血で宴を飾れ！」

吶喊を張り上げて、二人のエルフの槍兵が少女を刺し貫かんと突進する。

少女はその槍を大鉈で受けた――いや正しくは、大地に切っ先をめり込ませたままの大鉈を、柄を上にして直立させ、その背後に隠れるようにして身を翻したのである。細い体躯の遮蔽物となった大鉈によって、標的を捉えそこなった二本の槍は虚しく弾かれる。

流れるように間断ない動作で、少女は反撃に移った。大鉈の背後に回った運動を殺すことなく、さらに大鉈の峰に肩と背中を叩きつけ、下肢、腰と全身の瞬発力を動員しながら、背負い投げの要領で重い刀身を弾き上げつつ一旋させる。二人の槍兵は槍を構え直す暇さえ与えられず、信じがたいという驚愕の相を刻んだまま、もろともに胴を両断されていた。

勢い余った大鉈の刃は、さらに少女を中心にして一回転半してから、再び地響きとともに地に突き刺さった。依然、その柄は少女の小さな手に握られたまま離れていない。すでに大鉈は少女の一部、少女は大鉈の一部も同然だった。両者はともに殺戮兵器――立ちふさがる肉体を破砕する大鉈の、その駆動部たる装置が少女の全身なのだ。

その圧倒的な戦闘力に威勢を挫かれたエルフの戦士たちを、少女は輝きの失せた虚ろな瞳で見渡した。もはや少女の大鉈に挑みかかってくる猛者はいない。だが、主（あるじ）はさらなる流血を求めている。

何の躊躇もなく、少女は立ち竦むエルフたちに襲いかかった。機械の如き機敏な冷徹さと正確さで大鉈を振るい、最大効率の手際で虐殺を遂行していく。

怯えた顔も、慈悲を請う顔も、区別なく砕いて潰した。誰の顔にも見覚えがあった。かつて恩を受けた隣人たち。蔑まれ、忌み嫌われても、それでも哀れみだけは与えてくれた――そんな面々を、一人ずつ、或いは数人まとめて屠殺していく。

彼女は魂なき操躯兵（バイラリナ）。もう、何も感じはしない。

ついさっき、とめどなく目から溢れ出た雫の残滓は、今もまだ頬を冷たく湿らせてい

る。が、今となってはそれが何だったのかさえ解らない。

もう、痛くは——ない。

もう、辛くは——ない。

それが幸せなことなのかは、解らないけれど——

此処は、なんと安らかな場所だろうか。

紅蓮の祈り

生命なき踊り子が殺戮の舞踏を演じる様を、ラゼィルは大いなる満足とともに見下ろしていた。

そもそも今回の発端は、たまたま行き会った野盗どもの幌馬車の中に、なかなか見目麗しい死体が転がっていたのを見つけ、それに屍繰りの術をかけたというだけの道行きだった。気に入った死体を見つけるたびに、彼はそういう遊び心に囚われる。

彼女のアルシアという自我は、単に自分の抜け殻にこびりついていた残留思念に過ぎない。さぞ恨みを遺して死んだのであろう。これまで色々な骸を繰ってきたラゼィルだったが、こんなにも長く死体に思念が留まっていたのは初めて見た。

だが、あくまで死霊使いではないラゼィルは、死者の魂を骸に縛りつけておくような野暮はしない。ひとたび死んだ魂の行き先は幽界にしかない。ワイン樽の底に空いた穴から中身が抜け落ちていくように、それは決して留めようのない流れだ。早いか遅いかの違いはあったとしても。

喩えるならば、絵の具の溶剤が揮発してカンバスに固着したとき、初めて絵画が完成を見るように――あの少女の骸から余計な霊魂が完全に抜け落ちたことで、ようやくラゼィルの〝傑作〟は仕上がったのである。はたして会心の出来映えであった。生前の体機能を遺憾なく発揮する、無謬かつ的確な挙動。まさに骸繰り師の美学の結晶とも言うべき完璧さである。

精神活動の産物としての感情や記憶は消えても、肉体に染みついた神経の記憶や鍛錬の経験は残留する。手の指先から足の爪先まで、すべての筋肉と神経を連動して駆動させる身体能力というのは、相応の鍛錬を積まなければ獲得できるものではない。あのアルシアという少女が、生前に戦士として自らの肉体を錬磨していたという事実は後になって知ったことだったが、おかげでただの余興のつもりだった施術が思わぬ掘り出し物に化けた。

前作の、無数の死体を継ぎ合わせたバイラリンは、強靱さの面ではそれなりの成功だったが、動作の軽捷さと流麗さにおいて若干の不満があった。そこを改善するためには、よく鍛錬された若く健康な肉体を、なるべく損壊の少ない状態で手に入れる必要があっ

たのだが……まんまと理想的な素材に巡り会えたのは、まさに混沌神の加護とも言うべき天恵であった。
ラゼィル秘蔵の神具である〝嘆きの銃〟との相性も、見たところ、すこぶる良い。今後ともラゼィルが催す殺戮の宴において、あの人形は極上の彩りを添えてくれることだろう。
だが——誰もがラゼィルの死せる踊り子（バイラリナ）を前にして恐懼し、目を釘付けにされている最中にありながら、唯一、その舞いを意に介さぬ存在がいた。他ならぬ神樹の大蛇である。それは自らを奉じる森の民が殺されていく様にすら一瞥も与えなかった。
いや、与えられなかったと言ってもいい。
大蛇は地表の惨劇でなく、自らの依代である大榕樹を見上げていた。そこに佇む黒貌の影、取るに足りないほど小さな一人を見据えていた。
大蛇には、エルフや人間といった人型種族と同じような知性が備わっていたわけではない。言い換えるなら、それは知性などという形態よりも遥かに高次元の魂を持ち合わせていた。森ひとつを預かる護り主として神性を帯びた獣であった。

故にそれは、思慮や分析などといった限定的な判断ではなく、その高次の感性のみによって過たずに本質を理解していたのである。――真に脅威たるもの、邪悪なものは、いま地表で暴れ狂っている小さな屍人形などではなく、それを高みから見下ろしている一人の黒い肌の男の方であると。

聖獣の凝視を受けて、ラゼィルは優雅に深々と一礼する。蛙のように怖じて硬直することもなく、彼は真っ向から大蛇の視線を受け止めた。

死の宣告たる魔眼の一瞥を前に、かくも平然とやり過ごす――その恐れ知らずの不遜ぶりこそが森の大主（オオヌシ）に対する涜神であった。

「おお、我が君（きみ）よ、餓えし混沌よ。ようやく御身への供物とするに足る生贄を、見出してございます」

謳うように、嘲るように、ダークエルフはそう嘯くと、外套の懐から奇妙なものを取り出した。

一見すると、それは大判の皮袋を幾重にも畳み、紐できつく結い上げた――ただそれだけの益体もない品としか見えなかった。にも拘わらずラゼィルの不敵な笑みには、今

まさに勝利への切り札を誇示しているかの如き絶対の自信が窺えた。
「この袋から、魔力封じの呪索を解くのは……実に一年ぶりにもなろうか」
さも愉しげに呟きつつ、ラゼィルは厳重に巻き上げてあった紐を手早く解き捨てる。だらり、とその手からぶら下がったのは、案の定、縦横三フィートほどもある大判の皮袋でしかない。
が、何の変哲もない袋に見えたそれが、ふいに痙攣し、まるで生あるもののようにグネグネと蠢きはじめる。
まるで苦痛に身悶えするかのように、袋は出鱈目な蠕動を繰り返しながら、わずかずつ、だが着実に——膨張を始めていた。
「これより百を数えるだけの猶予がある」
挑みかかるかのように昂然と、ラゼィルは眼下の大蛇に向けて呼びかけた。
「それまでの間に、森の主よ、このラゼィル・ラファルガーを討ち果たすことだ。それが間に合わなければ身の破滅と知るがいい」
大蛇は思考しない。ラゼィルの勿体ぶった言葉も解さない。

ただ、啓示の域にまで昇華された超自然の本能により、その奇怪な袋を携えたダークエルフが、もはや一刻たりとも捨て置けない危険の対象であることを理解した
『シャアアアアアアアッ‼』
唸りの声は咆哮に似て、森じゅうの梢という梢を揺るがすほどの烈風とともに迸る。大蛇の鎌首が宙を趨った。太い頭部が榕樹の幹の中に没入するや、支持根の合間を滑り抜け、猛烈な勢いでラゼィルめがけて這い上がる。
ラゼィルもまた身を翻した。絡み合う気根の節々を足場にして跳躍を繰り返し、大榕樹をさらに上へ上へと駆け登っていく。
だが、神樹の聖性の具現たる大蛇にとって、この大榕樹は我が身の一部も同然である。海魔が波間を往くかの如く、血潮が動脈を駆け巡るかの如く、大蛇の這行は怒濤の勢いの驀進だった。軽捷に身を躍らせながら先を行くラゼィルとの距離が、みるみるうちに縮まっていく。
「そら、もっと急げ！　すでに二十を数えたぞ！」
迫り来る脅威に、だがラゼィルは微塵も焦ることなく、弄(いら)うような哄笑を放つ。とは

いえ彼はまだ武器を抜き放つこともなく、依然ただ遁走に徹するばかりであった。ただ、秘策の在処（ありか）であるらしい右手の皮袋は、いよいよ怪異の様相を露わにしつつある。
絶え間なく蠕動を繰り返すうちに、袋はいつの間にか明らかに膨張を始めていた。それだけではない。茶色くくすんでいた質感が、いつしか桜色の瑞々しい血色を帯び、表面には網目のような血管が青黒く脈打ちはじめている。その袋は生きていた。四肢もなければ頭もない異形の生物ではあったが、明らかにそれはラゼィルの手の中で蘇生しつつあった。
ついに大蛇はラゼィルと同じ高さにまで追いついた。喝ッと大口を上げた顎（あぎと）が支持根の隙間から迸り出て、ラゼィルを足許から丸呑みにしようとする。
すんでのところで跳び退いたラゼィルに、今度は反転した大蛇が真上から襲いかかる。再び回避するラゼィル。大蛇は勢い余って榕樹の気根に激突するかと思いきや、するりと何の抵抗もなくその間隙に身を滑り込ませて没入する。
大蛇は榕樹の内と外とを完全に自在に往復し、逃げまどうラゼィルを縦横無尽に襲撃した。そのたびに長い胴が気根の隙間を埋め、じわじわとラゼィルの足場を奪っていく。

まさに神樹と聖獣とが連携しているかの如き動きであった。もはやラゼィルは足場としている榕樹そのものまで敵に廻しているも同然だった。

にも拘わらず、名だたる混沌の英雄は、呵々と哄笑を放ちながら微塵も窮する様子を見せない。

「五十を数えた！　もう半分だぞ！」

自らが獲物として狩られる身にありながら、まるで自らが敵を責め苛んでいるかのような嗜虐の笑みで、またもラゼィルは大蛇を挑発する。

頭上で展開されるラゼィルと大蛇の死闘を余所に、死せる少女の踊り子(バイラリナ)は黙々と殺戮を続けていた。

血を流せ、と主(あるじ)は言った。さらなる贄を、と仰せだった。

だから血の流れているものはすべて斬った。もはや人間もエルフもない。彼女は淡々と着実に、逃げまどう標的を一人また一人と追いつめ、大鉈の一撃で血飛沫に変えていった。

どちらかといえば重い鎧をつけた人族の方が、はしこく動くエルフより容易に仕留められる。だから彼女は効率のために、まず逃げるエルフの処理を優先した。どのみち疲弊しきった人族の兵たちは、茫然自失の浸で硬直していたり、あるいは完全に正気を喪って白痴のように笑いながら転げ回っているような有様である。追々まとめて処分するのは容易であろうと判断できた。

だから彼女は、物言わぬ死の疾風となって樹幹を駆け抜けながら、また一人、行く手の地面に蹲っていた人族を目に留めたときも、そのままに放置して行き過ぎようと判断していた。……が、相手はそうとは知らず、死の大鉈が真っ直ぐに自分めがけて振り下ろされるものと思ったらしい。やおら跳ね起きて、ぐしゃぐしゃに泣き腫らした顔を晒し、迫り来る彼女に向けて赦しを請うように両手を差し上げた。

「聞いてくれアルシアッ！　後生だからッ！」

予期しなかった反応に、少女は戸惑って足を止めた。この人族は他の者と違い、何やら彼女に期するところがあるらしい。

「こうなったのにも訳があるんだ……アルシア、僕は、僕は君を助けようとして……」

少女はわずかに小首を傾げ、男の発言に耳を傾けてから、そもそも根本的な問いを口にした。

「アルシアって、誰？」

「……」

男は呆けた顔のまま答えなかった。それ以上の会話に意味はないと判断したバイラリナは、もう何回繰り返したのかも解らない滑らかな動作で大鉈を振りかぶると、言葉を失った男の脳天に勢いよく叩き降ろし、それから他の生者の掃討を再開した。

アーウィン・メラネイドの遺骸は、おそらく祖父の伯爵であろうとも判別できないような有様のまま、その場に捨て置かれた。

執拗に追いすがる大蛇の攻撃を紙一重で躱しつつ、ラゼィルはじりじりと高度を稼いでいく。すでに地表は遥か眼下に遠ざかり、足場を踏み違えて落下すれば間違いなく即死を免れない。

「さあ八十だ！　もう後がないぞ！」

彼が携え持った〝生ける袋〟は、さらに止め処なく拡大を続け、もはや元のサイズの二倍近くにまで膨らんでいた。ただの皮袋と見えたのは、木乃伊（ミイラ）になるまで干涸らびて萎縮したその生物の骸であったのだ。

固く凝縮されていたその表面は、いまや生々しい肉の濡れたような色艶と柔軟さとを取り戻していた。もはや皮袋ならぬ肉袋とでも呼ぶべきソレは、まるで大きく呼吸するかのように伸縮を繰り返しながら、なおもじわじわと膨張を続けている。

大蛇の攻撃もまた、ここに来てさらに熾烈さを増していた。どこまでも膨張を続ける肉袋と、それを携えるラゼィルの危険性が、今や聖性を備えた巨大な大蛇にとっても由々しきものになりつつあったのだろう。

「九十！」

すでに決着の形を確信したかのように、勝ち誇った歓喜の声でラゼィルが吼える。

『フシャアアアアッ！！』

応じるように、猛り狂った吐息でもって小さな敵を威嚇する大蛇。

メリメリという破砕音とともに、大榕樹の表層の気根が真一文字に裂けて千切れた。

その下から躍り出たのは大蛇の太く長い尾である。もはや神樹の聖獣は、その母体たる大榕樹を傷つけることさえ厭わなかった。

力強くうねる尾を撓らせて、大蛇はラゼィルが足場としている一帯の気根を薙ぎ払う。逃げ場などない圧倒的な破壊だった。上下左右、どの方角に向けて跳躍しようにも着地先の気根もろとも払い落とされ、大地まで落下する末路である。

絶体絶命の窮地に、ラゼィルは何の躊躇もなく虚空へと身を投げ出した。もはや着地点などない、完全に榕樹の外側へ向けての飛翔である。ついに活路を観念しての身投げかと思いきや、だがそのときダークエルフの左手から、これまた蛇のような一条の影が猛烈な勢いで趨り出る。

龍骸装の鎖分銅〝凶蛟(まがみずち)〟の投擲だった。投げ放たれた龍の下顎は、頭上の大榕樹の梢に食い込んでラゼィルの体重を支え、振り子の要領で運び去る。こうしてラゼィルは、まんまと大蛇の尾の破壊が及ばない遠く離れた位置にまで退避を果たした。

さらにラゼィルが左腕を一捻りすると、撓った〝凶蛟(まがみずち)〟の牙は支点になっていた梢を食い破り、再び彼の体重を支えるもののない虚空へと放り出す。ただし、今度の滑空に

は着地点があった。まるで狙いすましていたかのようにラゼィルが舞い降りたのは、かつてのニブニール酋長の館——樹上に設けられた大テラスの上だった。

大蛇が身を捩って反転し、榕樹の上から逃れたラゼィルを見据える。榕樹の幹から程近い大テラスまでは、大蛇の体長とその瞬発力をもってすれば苦もなく跳躍できる距離だった。そして、ダークエルフがまた小癪に身を躱わそうとも、樹上のテラスは大蛇の体重を支えきれまい。今度こそ小さな怨敵は、崩壊するテラスもろとも地表にまで墜落する運命にある。

が——

「百、だ。これにて観念せよ、森の主(あるじ)」

静かな、揺るぎない勝ち鬨の笑みとともに、ラゼィルは大蛇に向けて宣言した。

すでにラゼィルの体躯を上回るほどの容量にまで膨張していた肉袋を、彼は肩の上に担いでいた。嵩こそ増したが、その内容はあらかたが空気であり、重さは膨らむ前と大差ない。肉質の表面は、いまや膨張のあまり透けるほどに薄い皮膜となり、風船のようにぶよぶよと震えている。どう見てもその内側には骨格も内臓もない、肉で出来た風船

——そうとしか形容できない代物である。

それは生物でも何でもない、ただの空気袋だった。呪索を解かれて以降の膨張も、ただ単に周囲の空気を延々と吸い込み続けていたに過ぎない。もとよりそのためだけに特化した生体器官……それは、とある巨大な生物の臓器のひとつに過ぎなかったのである。

「屍の肉に魔力を通わせ、生前そのままの機能を発揮せしめる——それが我が〝骸繰り〟の秘奥でな」

嘯きながらも、ラゼィルはそれまで固く握りしめていた袋の口を、眼前の大蛇とその根城である大榕樹に向けて突きつける。

「このように——外見こそ今ひとつ様にならないが、そもそもこの臓器には何ら加工する余地がなかったのでね」

かつて死闘の末に龍を屠り、その骸を余さず我が物としたラゼィルは、自らの呪術のすべてを駆使し、最強生物の能力を己が武装へと転化せしめた。

その骨の如き強靭なる刀。

その角の如き鋭利なる槍。

その牙と鱗の如き残虐なる鎖分銅。
そして、それらを繰ってなお傷を負わない籠手と胴着……
だが、それだけではない。
龍を龍たらしめる最強の力を宿すのは、それらの近接武器ではない。
「さぁ、とくと味わうがいい。我が最強の龍骸装、〝凄煉(セイレン)〟の歌声を！」
高らかに吼えて、ラゼィルは袋の口を解放する。
そしてついに、百秒に渡って吸気を続けてきた巨大生物の肺胞が、その内に蓄えていた気体を白熱化させて逆流させた。
森を焼く火よりなお熱く、眩く、轟々と猛り狂う炎の奔流が、一直線に大蛇とその背後の大榕樹めがけて伸び上がり、それらすべてを包み込む。
龍の吐気(ドラゴンブレス)――
超高温を帯びた瘴気の息吹。その灼熱は金属すらも溶解させ、たとえ直撃を浴びずとも致死の毒性だけで骨が腐り血が枯れる。いかなる生物であろうとも死滅させずにはおかない鏖殺の噴流。それが龍の肺腑より迸る最強最悪の攻撃手段である。

これに抗える生命はない。これを防げる城壁はない。たとえ森ひとつを統べるほどの神性を帯びた聖獣であろうとも……

大蛇の断末魔の絶叫は、轟き渡って谺谷の全域を揺るがした。そのとき森が死んだ。その地に根付いた生命の源流が破滅した。

里じゅうに燃え広がっていた火災と、人族が外の森に放っていた火が、このとき申し合わせたように一斉に勢いを増した。大榕樹からの精霊力の供給を絶たれた森の木々は、もはや炎に抗うこともなく、干涸らびた枯れ木も同然に、自らを火勢に供していく。

そして邪悪の忠実なる使徒が、声高らかに勝ち鬨を上げた。

「御覧あれ！　とくと御覧あれッ！　我が君よッ！」

裂けんばかりに大口を開け、凄絶なる歓喜の熱狂に両の眼(まなこ)を見開いて、ラゼィルは右手を天にまで届けと突き上げた。その腕輪に輝く深緑の猫目石に、眼下のすべてを睥睨させせんとするかのように。

炭化して萎れていく大蛇の骸を抱いたまま、炎に包まれて燃え上がる大榕樹。紅蓮に躍るその光を受けて、猫目石は怪異な輝きを放つ。





……否。その眩いまでに強烈な光は、明らかに炎の反射などではない。妖しく不浄な緑の光は、猫目石そのものの内側より湧き出てくるものだった。

それを眼光と呼ぶべきか――炎の中にあってなお、炎より煌々ときらめく緑の宝玉を。

それを視線と呼ぶべきか――宇宙の異なる異相よりこの世界を覗き込む、邪な、悪意に満ちたおぞましき波動を。

「この滅びを御覧あれ！　この嘆きを御覧あれ！　これら皆々すべて残さず余さず！　御身へ捧げる供物にて御座います！　おぉ、どうか餓えし混沌よ（アイアイアグルガイア）！　この阿鼻叫喚（イブンシュブ）を神楽（グフバラザイア）と聴き届け賜え！　屍山血河の宴（サブンフウヲウルガッシュバフナム）にて喉潤し賜え！」

哄笑は逆巻く炎とともに、暗い夜空へ高く高く昇りつめていく。

それは、限りなく敬虔で純粋な信仰の魂だった。

そのとき彼は、神を愛するかの如く世界の全てを愛していた。胸の内に溢れかえる愛に法悦さえ感じていた。

この憎むべき陽光の世界――緑の生命が彩る大地も、翼の羽ばたきが舞う空も、もはや呪詛するまでもない。それら全ての栄華が、今宵こうして焼け落ちるために、餓

えし混沌へと呑み込まれる極上の贄となるためだけに存在したのだとすれば、もはや何を憎む理由があろうか。

ダークエルフとして光の世界に懐いていた積年の憎悪を、彼は今この瞬間ばかりは忘れていた。

殺し尽くせ。或いは死に絶えよ。

剣を執るのも、贄となるのも、いずれも変わらず混沌の神を喜悦せしめる賛歌ではないか。

ならば人もエルフも愛おしい。森も清流も愛おしい。淫靡なる闇の世界の美しさに負けず劣らず、地表の森羅万象が麗しい。

はらはらと歓喜の涙を流しながら、ラゼィルは神を讃え続けた。いま彼は孤独ではない。いま彼は矮小ではない。自我を越え因果を越えた領域で、彼と世界と神とは一体だった。その目眩く全能と解放の感覚に、彼の魂は根底から震えていた。

世界の終焉を思わせる業火の直中に屹立し、狂おしいほどに声張り上げて闇の祷文を謳い上げる混沌の闘士（カオス・チャンピオン）。生きてその光景を見届けた者は誰一人として居合わせず、ただ

邪悪な緑の輝きを湛えた神の隻眼だけが、忠実なる使徒の勇姿を、無言の祝福をもって見守っていた。



焦土の風

久遠の永きに渡り、谺谷の森を支えてきた偉大なる大榕樹が焼け崩れていく様を、ニブニール酋長はその麓から見上げていた。

この森にエルフの在る限り、緑の木々の連なりは不滅であろうと思っていた。エルフとして授かった永い天寿を全うした後も、この森の安寧は後継者たちに引き継がれ、未来永劫に続いていくのだろうと、彼は信じて疑わなかった。

それが——まさか彼の代のうちに、こうして森の滅ぶ様を見届ける羽目になろうとは。

悲嘆も悔恨も涸れ果てた、空虚な放心の眼差しで、ニブニールは今も生存者の姿を捜して燃える森の中を巡り歩いている娘の姿を眺める。

ついに魂を喪い、その穢れた身体までもが混沌の使徒に成り果てた不浄の鬼子。

元を質せば、すべての元凶は彼女にある。だがそこに悪意があったわけではない。あれは、ただ愛されたかっただけだ。愚かしいほどに愛に飢え、飢えるほどに孤独だった。

そんな娘に、父親が育てた。決して娘を愛せなかった父親が。

かつて愚かしい恋に身を焦がし、そんな自分を赦すことも また出来なかった男の矛盾
……そこに、混沌の萌芽があったのだ。

そんな男を盟主に担いだ民が滅ぶのも、そんな民が耕してきた大地が燃えるのも、すべてが必定の運びであろう。

永きに渡ったおのれの生涯の全てに絶望し、ニブニール酋長は乾ききった笑いに喉を軋らせながら、大榕樹を包み込む紅蓮の炎の直中へ、悄々と踏み込んでいった。

×　　×　　×

炎は止め処なく燃え広がり、谺谷の広大な森を一夜に渡って蹂躙し続けた。

暗い空が白みはじめる頃になって、ようやく火勢は衰えはじめたものの、それというのも既に焼くだけのものを焼き尽くしたが故の結果である。

やがて黎明の訪れる頃には、かつての樹木の連なりは見る影もなく一掃され、無惨に焼け爛れた焦土を晒しているばかりの光景が広がっていた。

真っ黒に炭化し、折り重なって倒れた倒木が未だに未練がましく燻り続ける中を、漫然と踏み分けながら散策する人影がある。
他ならぬ惨劇の張本人、ラゼィル・ラファルガーであった。漆黒の美貌には、一夜の宴の興奮が醒めやらぬのか、未だに喜悦の笑みが貼りついたまま残っている。
煤けたブーツが踏み散らしていくのは、芯まで炭化し萎縮した樹木と――それらと区別が付かないまでに焼け焦げた人型種族の骸である。こうなってしまってはエルフ族も人族もない。
吹き渡る風は焦臭い死の匂いに満ちていた。もはや樹木に遮られることもなく渺々と吹き渡る風が、一面の焦土から死の臭いを運び去っていく。風の唸りは、無念のうちに殺戮されていった亡者たちの怨嗟を思わせて、ラゼィルの耳を快く慰めた。
そこでふと異音を聞き咎め、ラゼィルは足を止める。
すぐ傍の倒木の下から、細い苦悶の声が漏れていた。どうやら奇跡的に一命を取り留めた者がいるらしい。
ラゼィルは肩越しに、すぐ背後に控えている従者を見遣った。

以前までと同様、主であるラゼィルの後ろに付かず離れず――いや、今では文字通り影のように音もなく気配もなく、沈黙のままに付き従っている小さな従者。かつてアルシアと呼ばれていた少女の骸は、ラゼィルの一瞥だけでその意図を了解し、つと前に進み出ると倒木の幹に手をかける。

たおやかな細腕からは想像もつかない怪力を発揮して、死せる少女は焼け焦げた大木を横転させた。はたして、その下敷きになっていた生き残りの姿が露わになる。

それは、ラゼィルの軍門に降り谿谷の襲撃に参加していたダークエルフの一人だった。満身いたる所に深手を負い、さらに重度の火傷を負っている。生き長らえたのは奇跡に等しい――が、どう見てももう長くは保たない。

「ラ、ゼィル、様……我らが、祀将、様……」

瀕死の戦士は薄目を開けて、眼前の人物を認めたのだろう。苦痛に歪む顔に悽愴な笑みを浮かべ、掠れた声で囁いた。

「……殺し、ました、ぞ。存分に……殺して、殺し尽くして……はは、断末魔の彼奴らの顔……たまらなく……愉快で、した……」

「その喜悦は、お前だけのものではない」
ねぎらいを込めた優しい声で、ラゼィルは足許に伏す戦士に語りかける。
「我らが君もまた、お前とともに同じ歓喜を味わった。昨夜、お前の魂は確かにグルガイア神と共にあったのだ」
「おぉ……我らが……餓えし、混沌の、君……」
嬉しげに呟いてから、戦士は、縋るような眼差しでラゼィルを見上げる。
「祀将、様……どうか、今一度……我が身に、奉神の、喜びを……どうか……」
「心得た」
厳かに頷いて、ラゼィルは右手に凍月を抜き放つと、戦士が恍惚と眺めるその白い刃の切っ先を――
「我らが君よ、今一度召しませ――生命の贄を！」
――深々と、彼の胸に突き刺した。
「あぁぁぁぁ……」
細く力のない、だが歓喜を孕んだ苦痛の声が上がる。無論、急所はわずかに外してあ

った。苦痛が長引けば長引くほどに供物としての質は高いのだ。

「……ィア……グルガ、イア……」

断末魔の吐息で神を讃えて、ダークエルフは絶命した。その顔は最後の苦痛と、敬虔なる信仰の喜びで、苦悶の歪みと満ち足りた笑みとを同時に刻んでいた。

使徒として望みうる最良の末路を辿った同胞に、賛辞の微笑を投げかけてから、ラゼィルは遠い東の空を仰ぐ。

惨劇の一夜の後に、臆面もなくまた朝日が昇る。地下世界に住まう混沌の僕（しもべ）にとって、憎んでも憎みきれぬ生命と浄火の象徴。

だがあの太陽は気付くだろうか。見下ろす大地から、またひとつの森が消えているという事実を。

「あの日輪こそ、最後の供物だな」

誰にともなく、孤高の伝道師は呟いた。

いずれ混沌の勢力が勝利を収め、グルガイアの威光が大地をくまなく覆い尽くせば、そのときは日輪すらも奈落へ堕ちる。その日が訪れることをラゼィルは信じて疑わない。

果てしなく続くこの戦いに最後の勝利を収めるのは、必ずや混沌の軍勢であろう。
「では往こうか。我が麗しの踊り子（バイラリナ）よ」
「はい、ご主人様」
もはや呼ばれるべき名も持たぬ人形が、主（あるじ）の呼びかけを受けて従順に頷いた。深く澄みきった黒い瞳は、澄みすぎるあまりに無辺の奈落を思わせて、どこまでも虚ろで空洞な闇ばかりを湛えている。
少女の屍を引き連れて、伝道師は再び、次なる宴の地を目指して歩きはじめた。
神に仕える身に休息はない。この広大なる世界は未だに、祭壇に載せられるのを待つ生贄たちで満ち溢れている。

× × ×

今は通う者とてない、亡国の荒野の一角に、谺谷と呼ばれる不毛の土地がある。
昼日向といえど瘴気が立ちこめ、不浄の気配に覆われたその渓谷は、いかな命知らず

の野伏であろうとも立ち入ることを拒む禁忌の場所だ。
夜ともなれば亡霊が群れ集い、怨嗟の声を風に乗せて運ばせ、聞き咎めた者の魂を冥界へと引きずり込むのだという。事実、いかなる呪いを負わされた地なのか、その土に草木の種が根付き芽吹くことは決してない。
金脈が眠るという噂もあり、これまでに幾人かの強欲な山師が運を試しに赴いたそうだが、いずれも惨憺たる目に遭って退散したという話である。
一説によればそこは、昔語（むかしがたり）に伝わる〝白貌の伝道師〟に縁（ゆかり）の地だともされている。成る程、生命の気配の途絶えた不吉な荒れ地は、かの邪悪な伝説の舞台となるに相応しい幽界の様相を呈している。
かつてそこが緑なす豊饒の森であったという誠しやかな冗談も語られるが、今となっては真に受ける者など一人もない。

Author Note

後書き

虚淵玄

Googleに"chaos champion"と入力してイメージ検索かましてみて頂きたい。ダブルクォーテーションで囲うのも忘れずに。

するとほら……まぁ出てくるわ出てくるわ。メタルフィギュアの百鬼夜行。

悪趣味の一歩手前どころか明らかに二歩三歩と踏み出してしまっている武装と装束。ただもう闇雲に凶悪きわまりない面構え。勇ましさと馬鹿馬鹿しさの絶妙な匙加減による格好良さ。こういうのが好きで堪らねぇ。

やはり、かつて「火吹き山の魔法使い」にてファンタジー童貞を失い、「ソーサリー」4部作で爛れきった快楽の日々を送った私にとっては、剣と魔法とくりゃスティーブ・ジャクソンでイアン・リビングストンでファイティングファンタジーなわけで、必定、ヴィジュアルイメージもアニメ絵セル画調な萌えエルフとかよりも、ピーター・ジョーンズやジョン・ブランチが描くソリッドなペン画のドスグロいオーガーだのゴブリンだのの方が親しみがある。Loveなのである。

そんな私なものだから、やっぱりというか当然というか、フェイバリットはソードワールドよりもウォーハンマー。

とりわけ『カオスチャンピオン』という語感に感じる官能と法悦たるや、はじめての広辞苑で女性器の名称を引きまくる中学生の如しである。だってチャンピヲンですよ？　おまけにカオスときたもんですよ？　ハァハァ……これが勃たずにいられるもんかい！　いつか自作の中で『カオスチャンピオン』とか言ってみたい。言いたいだけちゃうんかと小一時間問いつめられようとも構わない。

と、まぁ。

そんな勢いだけで書き始めたはいいものの、実はコレ、中盤過ぎた辺りまで書き進めたところで放置してた。かれこれ半年ほども前の話だろうか。

そも、虚淵玄は愛の戦士である。キューティーハニーの同胞である。

だからこれまでの脚本も、すべて『最後に愛は勝つ』という一貫したスタンスで書いてきた。

ところが今回の作品は違う。愛、惨敗である。これではハニーに顔向けができない。それで一度は書くのを止めた。「あれコレもしかして愛が勝てない？」と気付いてしまったから。っつうか構想の段階で気付こうよ俺。

そんな代物を、なんで今になって完成にまで持ち込み、こうして本にして売らなきゃならない羽目になったのか……その辺の大人の事情は、まぁ、好きなように勘繰って邪推していただきたい。ともかく、この物語は本当なら闇に葬られる運命にありながら、色々とゴニョゴニョな次第で、こうして日の目を浴びることとなった。それが結果として良かったのか悪かったのかは、１５００円という単価と照らし合わせて、読者の皆様の評価に委ねる。

私個人としては……そりゃもう、ひとたび書き上げてしまえば愛児は愛児である。出来栄えがどうとか作品としての存在意義とかいった話はすべてすっ飛ばして、ンもう、可愛いったらありゃしない。言えたしな、カオスチャンピオン。

それにライトノベルという娯楽が大量消費時代にある昨今、こうしてハードカバーの

書物を世に出す機会に恵まれたというのは、とても素晴らしいことではあるまいか。そこは物書きの端くれとして、素直に喜んでおくべきだと思う。

まぁ、書いた思惑も売った思惑も、どうだっていいんじゃないだろうか。そんなものは歴史に残らない。後に語り継がれるのは、読んだ人の感想だけだ。

そんなわけで。

楽しい時を過ごしていただけたのなら、ただそれだけで冥利に尽きるのであります。

虚淵玄



凍月（いてづき）

龍の第六肋骨から削りだした一体成形の曲刀。龍骸装はいずれも魔力付加された屍であり、操躯兵と同様の疑似生命。鮮血を滋養として代謝し、自己再生能力を持つ。

刀身には“鋭化”“硬化”の術が施され、さらに状況に応じて“震壊”“重剛”“柔靱”の魔力付加を発動させることが可能。

群鮫（むらさめ）

龍の角を穂に、大腿骨を柄に使った短槍。使い手の意思に感応して重心配分が変動し、投擲においても絶妙な精度を誇る。刃に施された魔術は“硬化”の二重掛け。さらに切っ先への衝撃で“重剛”の魔力付加が発動し、運動エネルギーを倍加させるため、直撃した際の威力は絶大。

すべての龍骸装には祭具としての聖性が付加されており、これらの凶器による犠牲者は、すべて略式祭儀による生贄として混沌神グルガイアに献上される。

凶蛟（まがみずち）

龍の下顎の骨に、四五枚の鱗を鬣で結わえつけた鎖分銅。すべての部品に“鋭化”の術が、また顎骨には重ねて“重剛”の術が施されている。平常時の全長は二〇フィート余りだが、連結部の鬣に“柔靱”の術がかかっているため、状況に応じて自在に伸縮する。

尾端に凍月を連結することで鎖鎌としても使用可能。



凶蛟+凍月

虚淵 玄［うろぶち げん］
2000年、ニトロプラスPCゲーム『Phantom of Inferno』で、
シナリオライターとして執筆、続く作品として『ヴェドゴニア』
『鬼哭街』、『沙耶の唄』などがある。

白貌の伝道師

著者　虚淵 玄

2004年12月29日　第一刷

発行者　小坂崇氣
発行所　株式会社　ニトロプラス
〒101-0021
東京都千代田区外神田3-1-16ダイドーリミテッドビル5F
TEL 03-5297-8989
FAX 03-5297-8990

印刷所　株式会社 三光リンクス

落丁・乱丁本は当社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

ISBN4-902138-02-6